

若
山
遺
跡

松原市

若 山 遺 跡

—(仮称)松原ポンプ場築造工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

二〇一〇年八月

財団法人 大阪府文化財センター

2010年 8月

財団法人 大阪府文化財センター

松原市

若山遺跡

—(仮称)松原ポンプ場築造工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

財団法人 大阪府文化財センター



1. 調査区遠景（東から）



2. 調査区遠景（西から）

序 文

本書で報告します若山遺跡は、松原市南東部の上田町にあります。旧松原高等職業訓練校跡地に（仮称）松原ポンプ場が築造されるのに先立ち、試掘調査が行われ、その結果古墳時代初頭から近世におよぶ遺跡であることが分かりました。この遺跡の東は、全国第5位の大形前方後円墳である河内大塚山古墳、西は第18代反正天皇の宮跡伝承地とされる柴籬神社に接しています。また北は、堺と大和を結ぶ長尾街道が東西に延び、古代以来の交通の要衝にもあたっています。

今回報告する発掘調査は、先の試掘調査の結果を受け、大阪府南部水道事業所が進めている上記ポンプ場建設工事に伴い、平成20年度から21年度にかけて実施されました。調査の結果、古墳時代初頭から飛鳥・奈良時代に流れていた河川跡がみつかりました。河内大塚山古墳との間に、現在は樋野ヶ池という溜池がありますが、もとの姿は谷地で、そこに合流していました。その後中世から近世にかけて水田を造成するために、丘を削り、谷を埋め、活発に開墾が行われました。現在、わたしたちが目にする景観は、このように1千年以上もの長い時間をかけて営々と形作られてきたものです。本書がその歴史を理解する一助となれば幸いです。

調査にあたり、地元住民の方々、松原市教育委員会、大阪府南部水道事業所の関係者各位には多大なご助力とご指導を賜り深く感謝します。今後とも当センターの事業につきまして、ご理解とご協力をいただきますようお願い申し上げます。

平成22年8月

財団法人 大阪府文化財センター

理 事 長 水 野 正 好

例 言

1. 本書は、松原市上田町に所在する若山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、(仮称)松原ポンプ場築造工事に伴い、大阪府南部水道事業所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、財団法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 発掘調査・遺物整理に関わる受託契約期間および調査体制については以下のとおりである。発掘調査・遺物整理にあたっては、随時当財団職員の助言・協力を得た。

〔発掘調査〕

若山遺跡 発掘調査 (08-1)

受託契約名 (仮称)松原ポンプ場築造工事 若山遺跡発掘調査

受託契約期間 平成20年9月1日～平成21年12月28日

平成20年度 調査部長 赤木克視

調整課長 田中和弘

南部調査事務所長 大野 薫

調査第三係長 森屋美佐子

技師 中尾智行

同 橋本 哲

平成21年度 調査部長兼調査課長 福田英人

調整グループ長 金光正裕

同南部総括主査 森屋美佐子

同主査 辻本 武 (平成21年9月まで)

同副主査 林日佐子 (平成21年9月～)

同技師 橋本 哲

〔遺物整理〕

若山遺跡遺物整理 (08-1)

受託契約名 (仮称)松原ポンプ場築造工事に伴う若山遺跡遺物整理

受託契約期間 平成22年1月4日～平成22年8月31日

平成21年度 調査部長兼調査課長 福田英人

調整グループ長 金光正裕

同南部総括主査 森屋美佐子

同副主査 林日佐子

同技師 橋本 哲

平成22年度 調査部長兼調査課長 福田英人

調整グループ長 江浦 洋

同主幹 岡本茂史

調査グループ長 岡戸哲紀

同南部総括主査 森屋美佐子

同技師 橋本 哲

4. 本書で用いた現地写真は調査担当者が撮影した。また、遺物写真の撮影に関しては、調査グループ（南部）調査員久禮孝志が担当した。
5. 発掘調査および遺物整理作業において、以下の方々はじめ諸氏ならびに諸関係各機関にご指導・ご教示を賜った。記して感謝申し上げます。（順不同、敬称略）
芝田和也・岡本武司（松原市教育委員会）、森村健一（堺市教育委員会）、豊島享志（和泉市池上曽根学習館）。
6. 本書の執筆・編集は、橋本が担当した。
7. 本調査に関わる出土遺物・実測図・写真・カラースライド・デジタルデータ等は財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 調査にあたっては、国土座標軸（使用測地系「世界測地系 2000」）第VI座標系を基準にした。
2. 発掘調査および遺物整理については、『(財)大阪府文化財センター 遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』（2003）の内容に準拠して行った。
3. 本書に掲載した遺構図に付された方位は、すべて国土座標に基づく座標北を示している。なお、座標北を基準とした場合、遺跡の磁北はN 0° 15' E、真北はN 6° 50' Wに偏位する。
4. 標高については、すべて東京湾平均海面（T.P.）+値を使用している。
5. 遺構番号は、遺構の種類とは関係なく、現地調査での検出順に付した連番号である。その番号の後に遺構の種別を表記した。なお、水田に関してはこれに加えて、第1面検出のものを1000番代、第2面検出のものを2000番代として、同位置での上下の重なりを理解し易くした。
6. 各種遺構・遺物の記述にあたっては、規模等の数値について、遺構がm単位、遺物がcm単位を基準にしている。なお、それぞれの数値については最小で少数第2位までの表記を原則とした。
7. 遺構挿図・遺物挿図に関してはIllustratorCS2で作図を、写真図版に関してはフィルムで撮影後デジタル化し、InDesignCS2で作成した。
報告書の編集は、InDesignCS2で行った。

本文目次

巻頭カラー写真

調査区遠景

序文

例言

凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と調査の方法	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	1
第2章 位置と環境	5
第1節 位置	5
第2節 環境	5
第3章 調査の成果	10
第1節 基本層序と遺構面	10
第2節 第1面の遺構と遺物	23
第3節 第2面の遺構と遺物	54
第4節 包含層の出土遺物	68
第4章 まとめ	77
第1節 土地利用の変遷	77
第2節 若山遺跡の出土遺物	82

挿図目次

図1 調査地点位置図	図12 調査区全体土層図（5）
図2 調査区位置図	図13 219水路出土遺物実測図（1）
図3 調査区区割り図	図14 第1面遺構全体図
図4 昭和36年（1961）の調査区周辺地形図	図15 219水路出土遺物実測図（2）
図5 明治18年（1885）の調査区周辺地形図	図16 219水路出土遺物実測図（3）
図6 調査区周辺の地形と遺跡の分布	図17 002・003・078・079 井戸平面・断面図
図7 調査区土層模式図	図18 084 井戸平面・断面図
図8 調査区全体土層図（1）	図19 085・086・087 井戸平面・断面図
図9 調査区全体土層図（2）	図20 089・091・094・096 井戸平面・断面図
図10 調査区全体土層図（3）	図21 097・100・103 井戸平面・断面図
図11 調査区全体土層図（4）	図22 106・110・111・112 井戸平面・断面図

- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| 図 23 114 井戸平面・断面図 | 図 41 溝・溝状遺構出土遺物実測図 |
| 図 24 131・132・134 井戸平面・断面図 | 図 42 069・117・118 土坑平面・断面図 |
| 図 25 135・141・142 井戸平面・断面図 | 図 43 069・117・118 土坑出土遺物実測図 |
| 図 26 井戸出土遺物実測図 | 図 44 006 落込み平面・断面図 |
| 図 27 077 水溜め断面・立面図・出土遺物実測図 | 図 45 007 落込み平面・断面図 |
| 図 28 畦畔断面図（1） | 図 46 落込み出土遺物実測図 |
| 図 29 畦畔断面図（2） | 図 47 包含層Ⅳ出土遺物実測図（1） |
| 図 30 畦畔出土遺物実測図 | 図 48 包含層Ⅳ出土遺物実測図（2） |
| 図 31 092・093 溝断面図 | 図 49 包含層Ⅳ出土遺物実測図（3） |
| 図 32 溝・溝状遺構出土遺物実測図 | 図 50 包含層Ⅳ出土遺物実測図（4） |
| 図 33 088・090 落込み断面図 | 図 51 包含層Ⅴ出土遺物実測図 |
| 図 34 落込み出土遺物実測図 | 図 52 2区包含層Ⅵ出土遺物実測図 |
| 図 35 第2面遺構全体図 | 図 53 1区包含層Ⅵ上層出土遺物実測図 |
| 図 36 071・072 井戸平面・断面図 | 図 54 1区包含層Ⅵ中層出土遺物実測図 |
| 図 37 147 井戸平面・断面図 | 図 55 1・2・5（北）区包含層Ⅹ出土遺物実測図 |
| 図 38 2095 水田断面図 | 図 56 第1面遺構と地形図（1961）の重複状況図 |
| 図 39 070 溝断面図 | 図 57 調査区周辺の溜池分布図 |
| 図 40 104 溝・105 土坑他断面図 | 図 58 調査区周辺の小字分布図 |

図版目次

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 図版 1 調査区土層断面（1） | 図版 17 第2面 全景（2） |
| 図版 2 調査区土層断面（2） | 図版 18 第2面 井戸 |
| 図版 3 調査区土層断面（3） | 図版 19 第2面 土坑 |
| 図版 4 調査区土層断面（4） | 図版 20 第2面 落込み（1） |
| 図版 5 調査区土層断面（5） | 図版 21 第2面 落込み（2） |
| 図版 6 第1面 全景（1） | 図版 22 第2面 落込み（3） |
| 図版 7 第1面 全景（2） | 図版 23 第1面 出土遺物（1） |
| 図版 8 第1面 全景（3） | 図版 24 第1面 出土遺物（2） |
| 図版 9 第1面 井戸（1） | 図版 25 第1面 出土遺物（3） |
| 図版 10 第1面 井戸（2） | 図版 26 第1面 出土遺物（4） |
| 図版 11 第1面 井戸（3） | 図版 27 第1面 出土遺物（5） |
| 図版 12 第1面 井戸（4）・土坑 | 図版 28 第2面 出土遺物 |
| 図版 13 第1面 水溜め・溝・水田 | 図版 29 包含層 出土遺物（1） |
| 図版 14 第1面 溝・畦畔（1） | 図版 30 包含層 出土遺物（2） |
| 図版 15 第1面 溝・畦畔（2） | 図版 31 包含層 出土遺物（3） |
| 図版 16 第2面 全景（1） | 図版 32 包含層 出土遺物（4） |

第1章 調査に至る経緯と調査の方法

第1節 調査に至る経緯（図1・2）

調査対象地にはかつて大阪府立松原高等職業訓練校の校舎群が存在した。同校は、戦後の失業対策事業（職業安定法に基づく職業補導事業）として出発した公共職業訓練校の設置に遡る。昭和33年に施行された「職業訓練法」（法律133号）により公共職業訓練校は技能労働者の養成へと転換し、大阪府労働部職業補導課が職業訓練課に改まり、各公共職業補導所は職業訓練所と改称され、主に新規中卒者を対象に第二次産業に従事する技能労働者に大きな役割を果たした。昭和40年代には職業訓練の種類を体系化に伴い、各職業訓練所は専修職業訓練校となったが、堺・守口職業訓練校とともに松原職業訓練校も、昭和47年4月から高等職業訓練校へと改称される。高度成長期には労働力不足、高学歴化や技術革新の進展に伴う技能労働者の質的・量的変化、産業構造の変化による離職者への職業訓練の必要性などを背景に、訓練対象者は高卒者、離職者、在職者にも拡大する実施体制が整備された。その後各訓練校は社会経済的背景の急激な変化を受けて統合されたため、校舎の跡地利用が行われるに至る。本専門校の場合は、藤井寺ポンプ場から泉北浄水池間のバイパス送水管整備に伴う中継ポンプ場（仮称）松原ポンプ場として利用されることとなった。これは藤井寺ポンプ場からの水をいったんポンプアップし、泉北浄水池に導水するもので、最大能力は約68万トンといわれ、2014年度までの全体完成を目指している。

当該地は、周辺に多数の埋蔵文化財が存在することから、ポンプ場建設にあたって事前に埋蔵文化財の存否を確認する必要があったため、平成19年に財団法人大阪府文化財センターが大阪府水道部より依頼を受けて上田町遺跡隣接地確認調査を実施した。その結果、調査区全体において古墳時代初頭から近世におよぶ遺物包含層の存在が確かめられ、当地に残る字名「若山」に因んで新規に若山遺跡として発見された。これにより大阪府教育委員会は事業地全体の発掘調査が必要と判断し、水道部の委託を受けた大阪府文化財センターがポンプ場建設にかかる約12,850㎡全体の発掘調査を実施することとなった。調査は、平成20年9月より準備工に入り、校舎基礎の撤去を経て、平成21年1月より本格的な発掘調査に着手し、12月前半に現地調査を完了した。

第2節 調査の方法（図3）

調査は、財団法人大阪府文化財センターが作成した「遺跡調査基本マニュアル」に従って実施した。地区割りの際の基準線は国土座標軸（世界測地系）の第VI座標系にもとづく数値を利用している。区割りは大区画から小区画へ6段階で府内全域に共通する地区割りで統一されている。第I区画は、大阪府の南西を通る座標X=-192,000m、Y=-88,000mを基準に、大阪府内を縦6km、横8kmで区画する。表示は縦軸A～O、横軸0～8で表示し、表示方法は縦・横の順とする。第II区画は、第I区画を縦1.5km、横2.0kmでそれぞれ4分割し、計16区画を設定する。南西端を1とし、東へ4まで、あとは西端を5、9、13、北東端を16とする平行式の地区名で表示する。第III区画は、第II区画

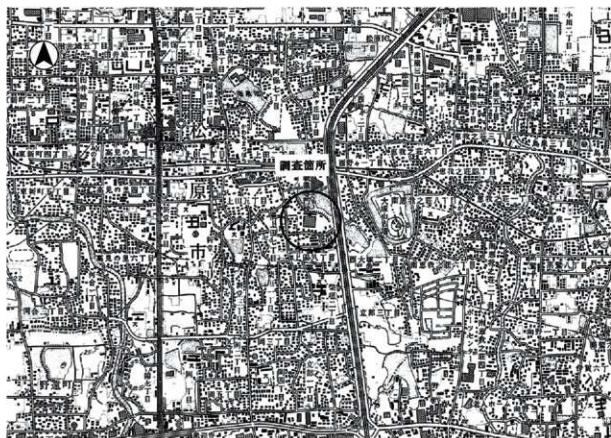


図1 調査地点位置図

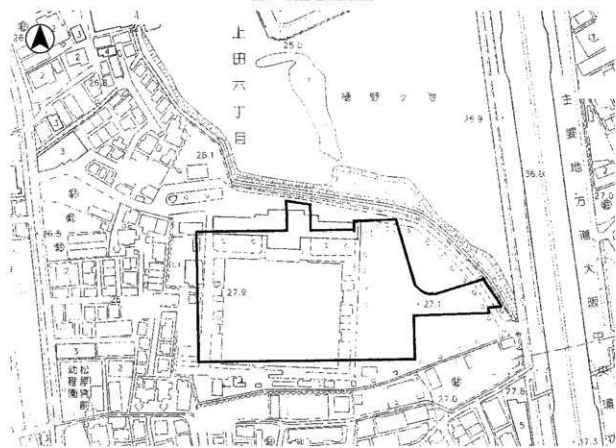


図2 調査区位置図

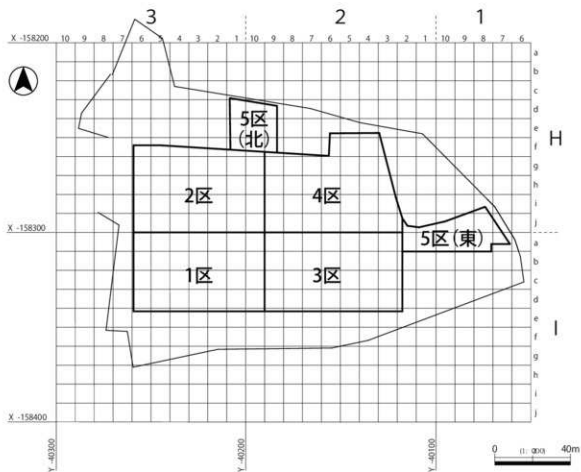
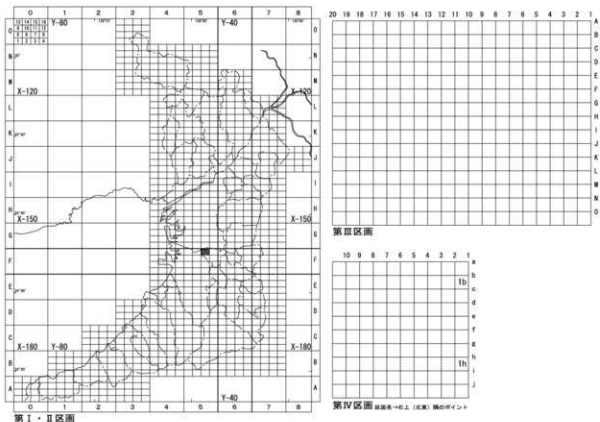


図3 調査区割り図

を100m単位で区画し、縦15、横20、表示は北東端を基点に縦A～O、横1～20とする。表示方法は横・縦の順。第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画を10m単位で区画し、縦・横10で、表示は北東端を基点に縦a～j、横1～10とする。表示方法は横・縦の順。したがって若山遺跡の今回の調査区の第Ⅰ～Ⅲ区画は国土座標第Ⅵ系のF5-12-1～3H～Iと表記される。

調査区全体は、排土置き場や作業効率を考慮して、1～5区に分けて行い、それぞれ1区、2区…と呼称し、遺物取り上げや遺構その他の表示では、若山遺跡08-1-1、若山遺跡08-1-2…と最初に記し、次いで上記の区割り表記を続けて位置を明らかにした。遺構番号は検出した順に001、002…と表し、番号の後に遺構名称（土坑、井戸、溝など）を付記した。方位は座標北で示す。真北は座標北より東へ $0^{\circ}15'$ 、磁北は西へ $6^{\circ}50'$ の振れがある。

調査に当たっては、校舎建設時の約2mの盛土とその下の現耕土、さらに確認調査のトレンチ部、校舎基礎による攪乱部などを機械にて掘削し、以下を人力にて掘り下げた。人力掘削終了後に遺構面を精査し、遺構を検出し、写真撮影、実測を行った。各調査区の遺構全体図はヘリコプター撮影による航空測量を行い、縮尺50分の1の平面図と250分の1縮小図を作成した。

第2章 位置と環境

第1節 位置(図4・5)

調査地は、近畿日本鉄道南大阪線河内松原駅の南東約650mにある。調査地の東側は中央環状線が南北に走る。地形的に調査地はすべて中位段丘面上に位置する。この段丘面には南北あるいは南東～北西の旧開析谷や旧河道を利用した溜池が多く見られる。調査区内でも中位段丘とそれを刻む河道跡が検出され、その基盤となる砂礫層が確認されている。

中位段丘は、東が東除川に南北を限られ、西は河内松原駅の西を南北に通る中高野街道と境して沖積段丘へ移行し、さらに西は国道309号線を挟んで氾濫原となり、その西限が西除川の自然堤防へと変化する。

調査地の北は、主要地方道・大和高田線が東西に通じ、その北側に平行して西除川の自然堤防手前まで近鉄南大阪線の軌道が通る。これらの東西の交通は、泉州堺から大和長尾に至る長尾街道をほぼ踏襲するものである。これと交差する上記の中高野街道、その西に平行する南北の国道309号線は、市域の中央を貫く幹線路であって、この交差点の半径約400mの範囲に、松原市役所をはじめとする主要公共施設が位置している点に、古代以来の交通の要衝としての位置をみることができよう。

第2節 環境(図6)

若山遺跡は大阪府松原市上田6丁目に所在する。『大阪府全誌』巻之四に、「丹比柴籬宮の宮址は東部にあり、広さ四千余坪にして四圍に溝渠を繞らし、別に一郭を為して柴籬林に接し、古樹鬱葱せり。即ち反正天皇の宮居し給ひし所にして、帝王編年記に丹比郡今坂上路北空地是也とせるは此の地を指せるなるべし。古の全封境は詳らかならざれども、本地及び大字高見は挙げて諸殿のありし所なるべし、大宮址の東方に当りて小園田・若山・学堂・極殿山等の宅地存せるは其の證ならん。」と述べられている。

丹比柴籬宮域内の当否はともかく、この遺跡は、羽曳野丘陵の西麓を刻んで北流する東除川の西に、東西1.5～2.0kmに渡り南北に延びる中位段丘上に立地し、景観的に見て西除川以東の沖積段丘そして氾濫原の地形と対照的である。その違いを特徴づけるのは、古代以来、狭山池の灌漑区域とかかわる幾多の溜池の存在である。特に本調査区の場合、南東～北西へと連なる大座間池、阿湯戸池、上ノ池、今池、小治ヶ(コシカ)池、樋野ヶ池、寺池、稚児ヶ池、海泉池などにより示される旧開析谷の左岸区域に接し、それが古くから溜池灌漑へと変遷していく過程と軌を一にした段丘開発に結びついている。これらの溜池は、一方を堰き止めるだけで貯水を容易に確保できる効率性の高い溜池群であり、調査区北側の樋野ヶ池や寺池が東方の上田町遺跡の水掛かりに位置することからも、早くから利用されていたと考えられている。条里の痕跡は、西除川の兩岸一帯の沖積段丘、氾濫原、中位段丘によく留められているのに対し、この溜池ゾーンでは非常に散在的にしか認められない。そして前者では地割りに規制された方形の溜池が多く認められることから、築池の時期を条里制以後という考え方が一方で、このような乱れ地の築池については、周辺の遺跡と旧開析谷の流水方向との位置関係から表面的に観察して

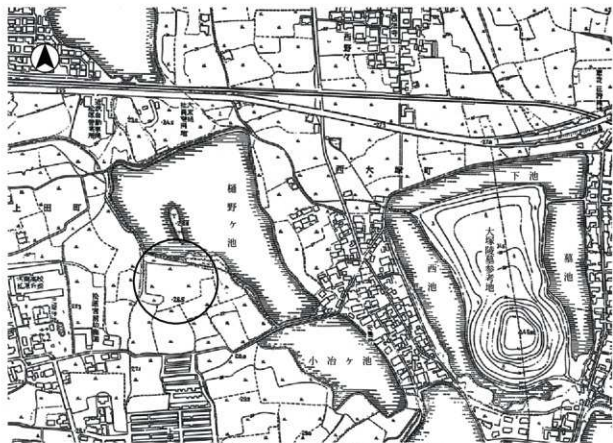


図4 昭和36年(1961)の調査区周辺地形図

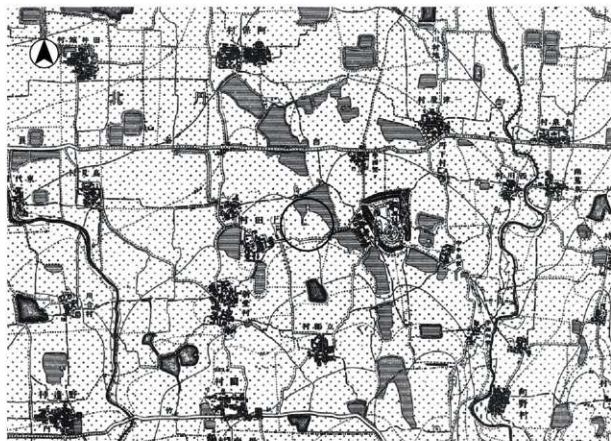
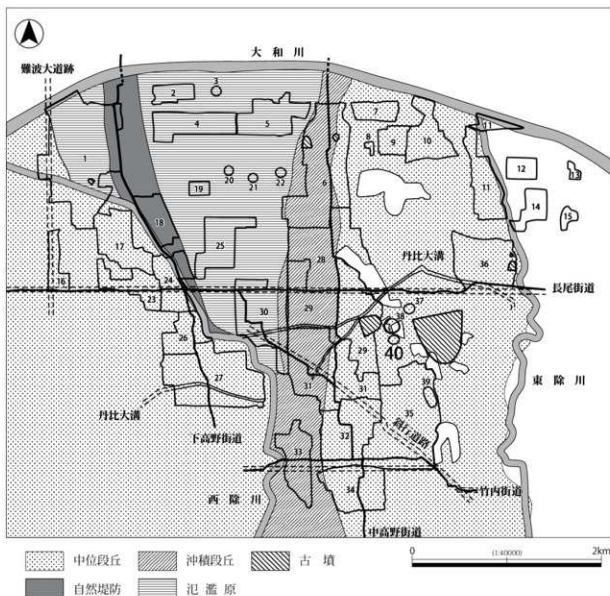


図5 明治18年(1885)の調査区周辺地形図



- | | | |
|-----------|-------------|-----------|
| 1 大和川今池遺跡 | 16 我堂南遺跡 | 31 新堂遺跡 |
| 2 城連寺遺跡 | 17 高木遺跡 | 32 岡遺跡 |
| 3 城連寺東遺跡 | 18 堀遺跡 | 33 清堂遺跡 |
| 4 池内遺跡 | 19 天美南遺跡 | 34 丹南遺跡 |
| 5 三宅西遺跡 | 20 天美東1丁目遺跡 | 35 立部遺跡 |
| 6 三宅遺跡 | 21 田池下遺跡 | 36 一津屋町遺跡 |
| 7 三宅東遺跡 | 22 三宅西4丁目遺跡 | 37 西大塚遺跡 |
| 8 蔵重西遺跡 | 23 清水遺跡 | 38 樋野ヶ池聚跡 |
| 9 蔵重遺跡 | 24 布忍遺跡 | 39 立部古墳群跡 |
| 10 別所遺跡 | 25 東新町遺跡 | 40 若山遺跡 |
| 11 大堀遺跡 | 26 南新町遺跡 | |
| 12 屋後遺跡 | 27 河合遺跡 | |
| 13 若林遺跡 | 28 阿保遺跡 | |
| 14 小川遺跡 | 29 上田町遺跡 | |
| 15 津堂遺跡 | 30 高見の里遺跡 | |

図6 調査区周辺の地形と遺跡の分布

想定できるくらいで、必ずしもはっきりしない。

現在の国道 309 号線の東約 400m を南北に通る中高野街道は、東除川以西での中位段丘と沖積段丘の境にほぼ沿っている。それより西に至って西除川の自然堤防までと、同左岸西一帯に広がる中位段丘は、松原市域でも条里地割のよく残るところとして知られる。また東除川以東、古市古墳群の所在する羽曳野市、藤井寺市から八尾市にかけても条里地割は比較的良好に残るといえる。したがって松原市域を中心とする遺跡、とりわけ集落遺跡は当然、この東除川から中高野街道の間の南北に延びる中位段丘を刻む旧河谷一帯には稀薄となる。

時代を追ってみると、旧石器時代の痕跡が認められる遺跡には、市域北西部の西除川氾濫原の大和川今池遺跡、同東北部の中位段丘縁辺を限る東除川河岸の大堀遺跡、市域中央部の大座間池から北西へと続く一連の旧開析谷利用溜池ラインから、以西の中位段丘西縁～沖積段丘にかけ、北東から南西に続く上田町遺跡、新堂遺跡、岡遺跡がある。それらの立地はいずれも自然地形に依拠する水の安定的確保が第一であったことを示している。そしてこれらの遺跡はその後近世に至るまで営まれた複合遺跡でもあり、拠点的な集住ゾーンを提供していた。河川流域の氾濫原中央へ人為が及ぶのは縄文時代にはいつてからのようで、東新町遺跡、三宅西遺跡などはその例として挙げられよう。また高見の里遺跡、立部遺跡、丹南遺跡、若林遺跡などのように、旧河谷に接するところへ集落を営む志向も持続されていく。

弥生時代には高木遺跡にみられるように、自然堤防上を利用した集落立地がこれに加わる。それ以降は長尾街道（大津道）と竹ノ内街道（丹比道）との間約 1.8km を占めて、上田町遺跡、新堂遺跡、岡遺跡、立部遺跡などが分布し、その立地相接する一帯は、西の百舌鳥古墳群と東の古市古墳群との中央に位置し、古代、中世における東西の往来の舞台となる。

さらに飛鳥時代に至って摂津、河内の境となる難波大道が西除川北西部の氾濫原と中位段丘の間を南下し、上記 2 つの東西の街道に交わって、物資の流通を一層促進したことはいうまでもない。また地割に痕跡をとどめるといわれる大津道と丹比道を結ぶ斜向道路跡や丹比大溝が、やはりこれらの遺跡群の位置に集約されることは、東西除川の間の中位段丘および沖積段丘において旧石器時代以来連続と営まれた土地利用上の相対的な重要性を示すものであろう。

若山遺跡は、上で述べたように市域中央部の中位段丘と沖積段丘にまとまりを見せる遺跡群のうち、旧石器時代以来近世までの複合遺跡として知られる上田町遺跡の東に接し、旧開析谷の名残りである南東～北西の溜池群のうち、樋野ヶ池の南に位置する。この池には遺跡の北へ陸地が中洲状に延び、貯水位が高まれば島状ともなる。この旧開析谷にかつて南西から北東へ小規模な谷が流れ込み、これに合流していた。それが埋没していった土壤に若山遺跡の内容の一端が反映されるのである。

現在は浮島状となっている中位段丘先端の東側では、昭和 49 年（1974）に松原市教育委員会によって須恵器窯 1 基が発見され、その灰原部分から 6 世紀中～後半の須恵器坏身・坏蓋類が出土している。樋野ヶ池を隔てた東には、全国第 5 位の規模を有する大型前方後円墳で、大泊瀬幼天皇（雄略天皇）の「丹比高鷲原陵」に比定されている河内大塚山古墳が所在する。その築造時期は 6 世紀後半と考えられ、古市古墳群および百舌鳥古墳群中最後の大型前方後円墳といわれる。西には同じく前方後円墳の山ノ内古墳があるが、近年、大阪府教育委員会による下水道工事に伴う確認調査が行われた結果、古墳に直接かかわるような痕跡は認められなかった。また南の立部地区では 1990 年に 5 世紀末～6 世紀中頃の円墳や方墳が中世の開墾によって墳丘を削平された状態で発見され、立部古墳群と名づけられた。残った周溝から円筒埴輪、形象埴輪、須恵器などが出土している。古墳が耕地拡張の過程で破壊さ

れたこのような痕跡は、市域の他の地区でも見つかったり、絵図や地籍図に古墳の存在を推測させる小字名もみられる。

古墳以外では上田町遺跡の東側の一部を占めて鎮座する柴籬神社が、日本書紀反正元年冬十月条の「都於河内丹比。是謂柴籬宮」の記載から、5世紀前半の反正天皇の都跡、丹比柴籬宮の伝承地とされている。しかし上田町遺跡のこれまでの調査からも宮跡を積極的に証明できるような遺構・遺物は発見されていない。

古墳時代以降では、若山遺跡の南約400kmの立部遺跡北部で松原市教育委員会により発見された飛鳥時代の建物跡は注目される。その柱穴は一辺約1.0mの方形掘り方で、整然とした柱列をなし、豪族の居館跡や役所跡と考えられている。さらに南の竹内街道以南では、丹南遺跡でも飛鳥時代の大形の掘立柱建物跡10数棟、倉跡2棟が発見されている。また、この時期の開発の歴史を物語るのは、1991年に松原市教育委員会の調査によって明らかにされた丹比大溝の存在である。この溝は東除川から取水して、樋野ヶ池北の寺池を横切り、中位段丘から沖積段丘を西に向けて開削した延長約4.0kmの人工運河である。その開削は7世紀後半とされている。そうであれば若山遺跡東側の開析谷が堰き止められて溜池利用が始まるのはそれ以降のことと考えられるかもしれない。この運河も北西の上田町遺跡から南東の丹南遺跡へ途切れなく続く、中位・沖積段丘上に立地する遺跡ゾーンを貫く形で施工されている点は注目される。

第3章 調査の成果

第1節 基本層序と遺構面（図7～12）

今回の調査区全体の地形や堆積土を最もよく反映する東西断面（X＝－158,300ライン）を以って基本層序を説明する。調査前は旧松原高等職業訓練校跡地のほぼ平坦な地盤（標高約T.P.27.0m）であった。この地盤は厚さ1.1～2.2mの盛土（I層）からなり、これを除去すると1970年代前半の造成直前まで耕作されていた水田や水路などが現れる。それより以下は、西側の旧河道地形と、東側の中位段丘という二つの対照的な地形に影響された堆積土が観察される。また5区東の東端では、松原市城南東から北西に連なる一連の溜池（阿湯戸池・上ノ池・今池・小治ヶ池・樋野ヶ池・寺池・稚児ヶ池・海泉池）に面影を残す旧開析谷の西端が確認される。両地形に共通する堆積土は現耕土（II層）、近世～近代の旧耕土（IV層）そして地山（XI層）である。旧耕土が形成される時期には、旧河道の凹所を利用した南北水路の一部が埋め立てられている（V層）。この土層以下では旧河道部と段丘部で堆積状況が異なる。旧河道地形の層序は、累重して堆積、形成される古土壌の中に複数の遺構面が確認され、それらはいずれも耕作面である。今回は旧河道内堆積土（IX層）の上面を第1面、河床面（XI層上面）を第2面として調査した。なお、断面図は機械掘削完了後の地盤以下の図を原則として使用している。調査区全体土層図には、模式図で示した以下の呼称を付記した（註1）。

基準層序は以下のように観察される。

- I層：旧松原高等職業訓練校造成時盛土。
- II層：造成前耕土。
- III層：造成前水路内廃棄物混入土。藁・草・日常生活品廃棄物が混じる泥土。
- IV層：旧耕土で、旧河道部分と東側段丘部分に堆積する。グライ化した粘土を主体とする上層（a）と、砂礫やブロック土を多く含む鉄分の酸化により黄変する下層（b）に分かれる。いずれも中世～近世の遺物を含む。上位の耕作面を造成するため、東側の段丘を削った土を客土としたものである。
- V層：水路埋め立て土。旧河道部分にのみ堆積する。青灰色～灰色粗砂～シルトで、一部に上位の旧耕土塊を含むブロックが多い。この埋め立てによって東側段丘部の水田面とレベルが揃う。中世～近世の遺物を少量含む。
- VI層：水路（219）内堆積土。旧河道部分にのみ堆積する。灰色～黒色粘土に粗砂・礫・シルトが混じる。17～19世紀の陶磁器・瓦・砥石・鎌・漆椀・下駄が出土する。また昭和30年代のガラス瓶も混じる。
- VII層：畦畔盛土。この基本層序では旧河道部分の水路南辺と周囲の水田を画する004畦畔の盛土が現れている。灰黄色のシルトで、表面は橙色に変じるところがある。
- VIII層：近世～近代耕作土。東側段丘部分に堆積する。明黄褐色、灰色、緑灰色の粘土やシルトに粗砂、礫が混じる。段丘を削って平坦な水田面を造成したことを示し、泥土を利用して水田とした西側旧河道の状況とは異なる。中世～近世遺物が混じる。

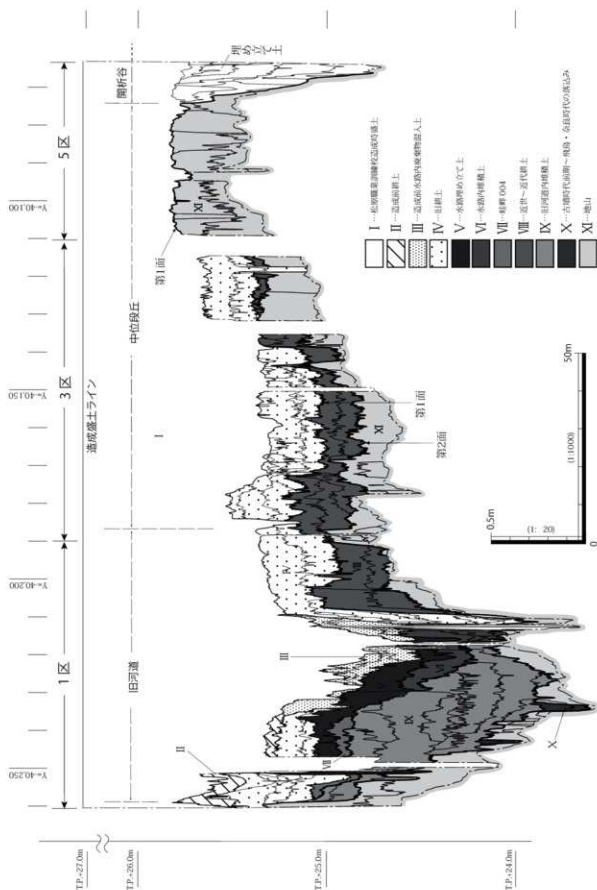


図7 調査区土層模式図 (X=158,300ライン)

IX層：旧河道部分（主に1・2区）にのみ堆積する。219水路を挟んで堆積土の状況が異なるので、表記にあたっては、1区をIX 1、2区をIX 2とし、これに細分を表すアルファベットを続ける。ただし、共通する土層はローマ数字だけで表す。

1区の河道内に溜まった泥土と周辺からの客土によって複数回にわたり水田化していった土層

IX 1a：淘汰が悪く、IV層下層よりは礫が目立たないが、2区に近づくにつれて母材の一部と考えられる粗砂がこの層の下部に顕著に見られる。

IX 1b：グライ化した粘土層である。ただし、よく攪拌されており継続的な耕作により形成された作土層と考えられる。下位の地盤に盛り上られた畦畔の高まりがみられる。

IX 1c：淘汰が悪く累重する古土層。下層ほど砂質が強く、継続的な耕作により形成された作土層と考えられる。下位の地盤に盛り上られた畦畔の高まりがみられる。

これらの土層中には7～8面の水田面が確認される(Y= - 140,230 ライン南北断面参照)。

旧河道を耕地に改変する積極的な土地利用がおこなわれたようである。以上の土層より、7世紀から17世紀におよぶ土師器、瓦器、土師質土器、瓦質土器、陶磁器、瓦が多く出土する。

2区の河道内に溜まった泥土を主体とする土層

IX 2a：青灰色～灰色粘土で非常に粘性が強い。粗砂、礫の混入は1区に比べて少ない。滞水状態の泥土のように見受けられる。

IX 2b：灰色～褐灰色粘土で非常に粘性が強い。下部は粗砂が混じる。

これらの土層中には1区にみられたような畦畔の盛土はみられない。上面では樋野ヶ池方向に流れる流路跡がみられた。

以上の土層の出土遺物は少なく、摩滅した細片が目立つ。6世紀末～18世紀におよぶ土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、土師質土器、瓦質土器、陶磁器、瓦がみられる。

IX d：1区、2区の河道内に共通して見られる砂・砂質土である。砂質が強いものの上層ほど土壌化が進んでいる。ただし、部分的にラミナの認められる場所もある。2区に近いところ、つまり相対的に低地にのみ見られ、部分的に残存した氾濫堆積物の可能性もある。

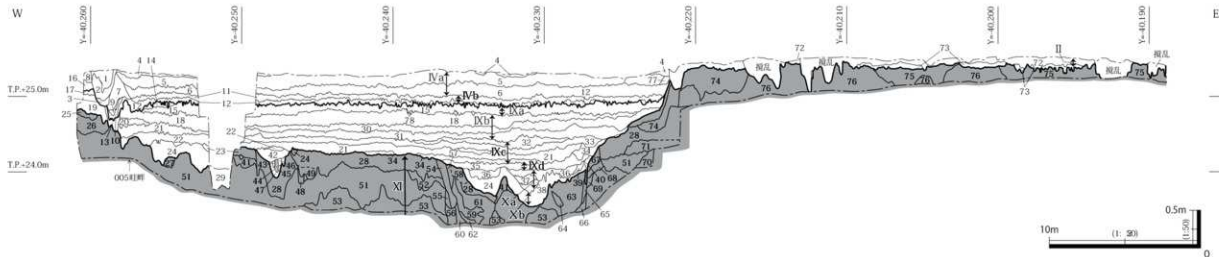
遺物の出土量は少なく、8世紀代～12世紀代におよぶ須恵器、瓦器などが出土するが摩滅した小片が大半である。

X層：1区、2区に共通する土層で、旧河道の河床面における流水作用により生じた落込みの堆積土である。2種みられる。

X a：黄褐色、黒褐色のシルトや細砂。落込みの最終堆積層である。ブロック土や礫を含み、人為的な埋め戻し土である可能性がある。古墳時代後期～飛鳥・奈良時代の須恵器・土師器が出土する。飛鳥・奈良時代の土器には落込み肩部から投棄されたようなほぼ完形に復する器もみられ、自然の落込みで何らかの人為的行為があったことを証明している。

X b：暗褐色を呈する土層であるが、淘汰がよく直下の第11層との層界も明瞭でない。有機物により変色した基盤層(XI層)の可能性もある。摩滅した庄内式土器片がわずかながら出土している。

X I層：調査区全体にわたって堆積する礫と黄灰色シルトからなる無遺物層。礫は風化が進んでいる。調査地内の微地形は当層の堆積によって起伏のある微地形が形成されたとみられる。



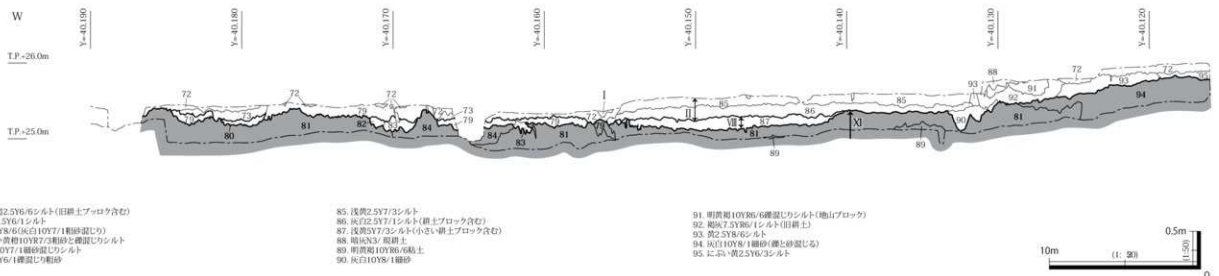
1. 黒10Y2/1～黒10Y5/1粘砂と粘土の互層(現代埋理土)
2. 青灰2S62/1～青1R10/1粘砂と粘土の互層(現代埋理土)
3. 黄緑2S67/1～黄緑2S70/1粘砂と粘土の互層(現代埋理土)
4. 青灰10R6/4粘砂硬シルト～粘砂
5. 青灰10R6/5粘砂硬シルト～粘砂(粗面顕著)
6. 青灰10R6/6シルト～粘砂(粗面顕著)
7. 青灰10R7/1～黒シルト～粘砂(ブロック土含む, 005粒群盛土)
8. 青灰10R6/1粘砂～シルト
9. 青灰5R9/1粘砂硬じり粘土(直径3cmまでの塊を含む, 埋理土)
10. 青灰5R9/1粘砂硬じり粘土(部分厚かつらうま, 埋理土)
11. 青灰5R9/1粘砂～粘土(直径3cmまでの塊を含む, 酸化腐葉層)
12. 青灰5R9/1粘砂～粘土
13. 青灰5R9/1粘砂硬じり粘土の互層(埋理土)
14. 青灰10R9/6粘砂～粘土
15. 青灰5R9/1粘土～粗砂(マンガン灰・粗面顕著)
16. 青灰5R9/1粘砂～粘土
17. 青灰5R9/1粘土～粗砂
18. 青灰5R9/1粘土～粗砂(マンガン灰・粗面顕著)
19. 青灰5R9/1粘砂～シルト(ブロック土・塊多く含む)
20. 青灰10R9/6粘砂～粘土(マンガン灰・粗面顕著)

21. 青灰10R9/6/1粘砂硬～シルト(東方ほど粘質増す, 側方変質土)
22. 緑灰10C7/6/1粘砂硬～粘砂
23. 灰5Y6/1粘砂硬～シルト(下ほど白分多)
24. 灰5Y4/1粘砂硬(シルト)(海法が良く, 部分的な色化層を含む)
25. オリーブ黄5Y6/4粘砂硬～粘土
26. 灰5Y5/1粘砂硬～粘砂
27. 灰黄黒10Y9/2粘砂
28. 青灰5R6/6/1粘砂硬～粘砂(塊多く含む)
29. 黒灰10Y9/6/1砂質シルト(試料レシテ埋理土)
30. 1R, 2埋理土
31. 青灰5R6/2粘土～粗砂
32. 31より埋理土
33. 緑灰10C7/6/1粘砂～粘土
34. 緑灰10C7/6/1粘砂硬じり粘土
35. 灰10Y1/1粘砂硬～粘砂(塊多量存在している, 埋理土)
36. 灰5Y4/1粘土～粗砂硬(ブロック土・塊多く含む)
37. 灰5Y4/1粘土
38. 黄2S7/6/1粘砂
39. 灰5Y4/1粘砂硬～シルト(ブロック土・塊多く含む)
40. 明オリーブ灰2S67/7粘砂

41. オリーブ黄5Y6/4粘～粘砂硬(色腐・塊を多く含む)
42. 緑灰10C7/6/1粘砂硬～粘砂硬(シルトの互層(2粒埋理土の流路内埋積物))
43. 灰5Y6/1粘砂硬(シルト)
44. 黄緑2S7/6/1砂質ブロック(11埋理土)
45. 明黄黒10Y9/6/6ブロック(11埋理土)
46. 灰白10Y7/1粘砂(マンガン灰)
47. 緑灰10Y9/6/1砂(11埋理土)
48. 灰5Y6/1粘砂硬(シルト)ブロック(26埋理土)
49. 灰5Y6/1粘砂硬(シルト)ブロック(48よりやや細かい, 26埋理土)
50. 灰5Y6/1粘砂硬(シルト)ブロック(26埋理土)
51. 明オリーブ灰2S67/7粘砂(5cm厚の塊を含む)
52. 灰黄黒10Y9/2粘砂(5埋より粗)
53. 灰黄黒10Y9/2粘砂(6埋)
54. 灰黄黒10Y9/2粘砂(6埋)
55. 灰黄黒10Y9/2粘砂(6埋)
56. 灰黄黒10Y9/2粘砂(6埋)
57. 灰黄黒10Y9/2粘砂(6埋)
58. 灰黄黒10Y9/2粘砂(6埋)
59. 明黄黒10Y9/6/6粘砂
60. 灰黄黒10Y9/6/6粘砂

61. 灰白N7/粘砂
62. 灰白N7/粘砂
63. 灰白N7/粘砂
64. 灰白N7/粘砂
65. オリーブ黄5Y6/4粘
66. 灰5Y6/1粘砂硬～シルト
67. 明黄黒10Y9/6/6粘土
68. 灰5Y6/1粘砂硬(シルト)
69. 灰5Y6/1粘砂硬(シルト)
70. 明黄黒10Y9/6/6粘砂
71. 灰5Y6/1粘砂硬(シルト)
72. 青灰10R7/1粘砂硬(シルト)
73. 灰5Y6/1粘砂硬(シルト)
74. 灰5Y6/1粘砂硬(シルト)
75. 青灰10R6/1粘砂硬(シルト)
76. 灰5Y6/1粘砂硬(シルト)
77. 青灰10R6/1粘砂硬(シルト)
78. オリーブ灰2S67/7粘砂(5埋り)が, 150の厚材となった埋積物

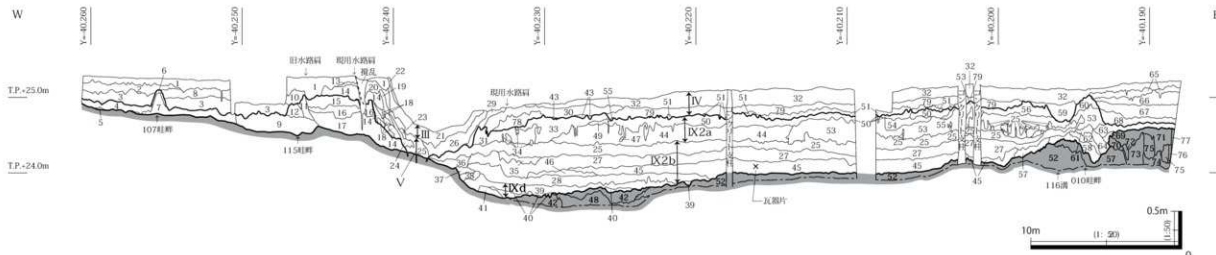
X=158,320ライン断面(1区) (たてS=1:50, よこS=1:250)



79. 明黄黒2S7/6/6シルト(旧耕土ブロック含む)
80. 灰5Y6/1シルト
81. 灰5Y6/1シルト(10Y7/1粘砂硬(塊))
82. 灰5Y6/1シルト(10Y7/1粘砂硬(塊))
83. 灰5Y6/1粘砂硬(シルト)
84. 灰5Y6/1粘砂硬(シルト)
85. 浅黄2S7/7シルト
86. 灰1R2/2/1シルト(粘土ブロック含む)
87. 灰黄黒10Y9/2粘砂硬(シルト)
88. 明黄黒10Y9/6/6粘砂
89. 灰10Y8/1粘砂硬(塊と塊を含む)
90. 灰10Y8/1粘砂
91. 明黄黒10Y9/6/6粘砂硬(シルト)(地山ブロック)
92. 明黄黒10Y9/6/6粘砂硬(シルト)(旧耕土)
93. 灰5Y6/1粘砂硬(シルト)
94. 灰10Y8/1粘砂硬(塊と塊を含む)
95. 灰5Y6/1粘砂硬(シルト)

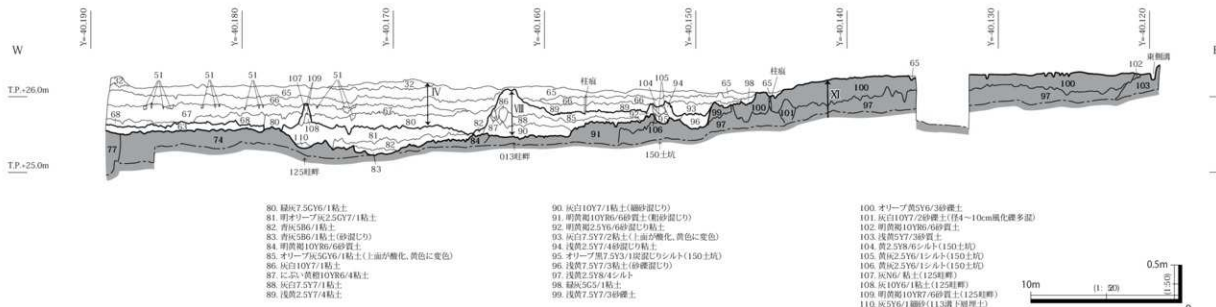
X=158,320ライン断面(3区) (たてS=1:50, よこS=1:250)

図8 調査区全体土層図(1)



- | | | | | |
|---|--|---|--|--|
| 1. 明貴地10YR6/6砂混じりシルト
2. オリーブ黄5Y6/4砂混じり粘土
3. 青灰10G6/51粘質シルト
4. 土色黄2.5Y6/3シルト
5. 明貴地10YR7/6粘砂レキ混じり
6. 土色黄2.5Y6/3から土黄貴地2.5Y7/シロトブロック混じり(107期層)
7. 土色黄2.5Y6/4粘質シルト(107期層)
8. 灰白10Y7/1粘砂混じり粘質シルト
9. 明貴地2.5Y6/6砂混じりシルト
10. 緑灰7.5Y6/6粘質シルト
11. 灰オリーブ5Y6/2粘質シルト(118期層)
12. 灰オリーブ5Y6/2粘質シルト(118期層)
13. 明貴地10YR6/6砂混じりシルト(オリーブ灰5Y6/3シルトブロック混じり)
14. 灰白粘質シルト(灰土)(現用水路層上)
15. 青灰10G6/61粘土(旧水路層)
16. 緑灰5Y6/61粘土(現用水路層上) | 17. 青灰5Y6/61粘土(現用水路層上)
18. 灰オリーブ5Y6/2粘砂(現用水路層上)
19. 灰オリーブ5Y6/9粘土(砂混じり(現用水路層上))
20. 青灰10G6/61粘土(現用水路層上)
21. 青灰5G6/61粘土(現用水路層上)
22. 土色黄貴地10YR7/6粘砂(現用水路層上)
23. 灰白粘質シルト(現用水路層上)
24. 灰白粘質シルト(現用水路層上)
25. 灰10Y6/1粘土(現用水路層上)
26. 灰白粘質シルト(現用水路層上)
27. 灰10Y6/1粘土
28. 灰白粘質シルト(土壌学や中略イ)
29. 灰白粘質シルト(土壌学や中略イ)
30. 明貴地5Y7/1粘砂混じり粘土
31. 灰白粘質シルト | 32. 灰白5Y7/1粘質土
33. 青灰5Y6/61粘質土
34. 緑灰7.5Y6/61粘質土
35. 灰白粘質シルト
36. 灰白5Y6/61粘砂混じり粘土
37. 明貴地2.5Y6/1粘砂
38. 明貴地10YR7/6粘砂混じり粘土
39. 灰白粘質シルト
40. 灰白粘質シルト
41. 明貴地10Y7/1粘砂
42. 灰オリーブ5Y6/2粘砂(粗砂(ブロック土壌多く含む))
43. 明貴地2.5Y6/6粘砂
44. 明貴地10YR7/6粘砂及び粗砂混じり
45. 明貴地2.5Y6/6粘砂混じり粘質土
46. 明貴地10YR5/1粘土
47. 明貴地2.5Y6/6粘砂 | 48. 灰オリーブ灰5Y6/1粘質粘砂
49. 灰灰10YR5/1粘質土
50. 灰10Y5/1粘土-粘砂
51. 土色黄貴地10YR7/6粘砂混じり粘質土(径3mm程度の礫含む)
52. 緑灰10G6/61粘質土
53. オリーブ灰2.5Y6/1粘質土(明貴地2.5Y7/41粘土ブロックが少量含まれる)(101期層)
54. 灰黄2.5Y7/4粘砂
55. オリーブ灰7.5Y6/6粘砂
56. 灰黄2.5Y7/4粘砂(5Y6/1灰 粘土混じり)
57. 明貴地10G6/61粘砂
58. 明貴地7.5Y7/1粘砂
59. 灰10Y7/1粘土(116期)
60. 貴地10YR8/8粘土(101期層)
61. 灰黄2.5Y7/7粘砂
62. 灰10Y6/1粘土 | 63. 灰黄5Y7/3粘土
64. 灰白粘質土
65. 土色黄貴地10YR7/6粘質土
66. 土色黄貴地10YR7/6粘質土
67. 明貴地7.5Y7/2粘土
68. 灰10Y7/1粘土
69. 灰白10Y7/2粘砂
70. 灰10Y7/1粘砂
71. 灰オリーブ5Y6/2粘砂
72. 灰黄地10YR6/2粘砂
73. 土色黄2.5Y6/4粘砂
74. 明貴地2.5Y7/6粘砂
75. 明貴地5Y7/1粘砂
76. 灰黄2.5Y7/3粘砂
77. 灰白10Y7/1粘砂
78. 灰10Y7/1粘土
79. 灰5Y7/1粘土(砂混じり) |
|---|--|---|--|--|

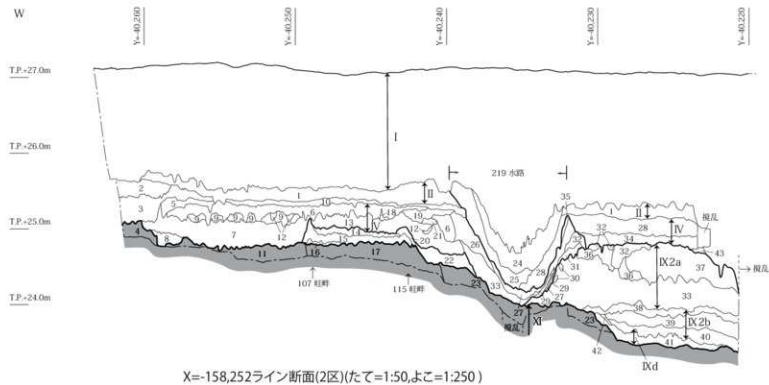
X=158,276ライン断面(2区)(たてS=1:50,よこS=1:250)



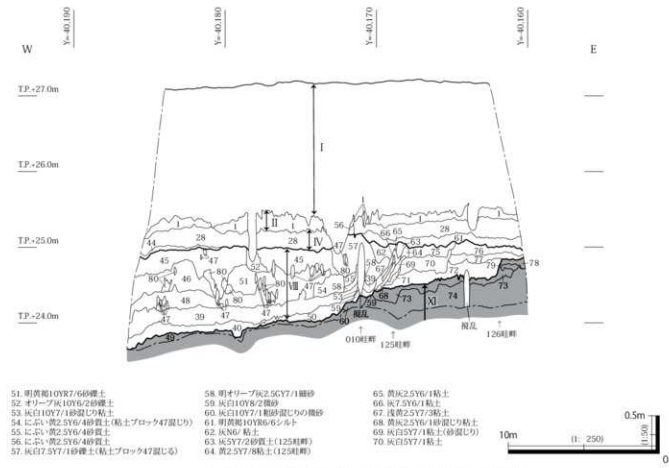
- | | |
|---|--|
| 80. 緑灰7.5Y6/61粘土
81. 明オリーブ灰2.5Y7/1粘土
82. 青灰5G6/61粘土
83. 青灰5G6/61粘土(砂混じり)
84. 明貴地10YR6/6砂質土
85. オリーブ灰5Y6/1粘土(土壌学や中略イ) 黄色に電色)
86. 灰白10Y7/1粘土
87. 土色黄貴地10YR6/4粘土
88. 灰10Y7/1粘土
89. 灰黄2.5Y7/4粘土
90. 灰白10Y7/1粘土(細砂混じり)
91. 明貴地10YR6/6砂質土(粘砂混じり)
92. 明貴地2.5Y6/6砂質土(粘砂混じり)
93. 灰10Y7/2粘質土(土壌学や中略イ) 黄色に電色)
94. 灰黄2.5Y7/4粘砂混じり粘土
95. オリーブ灰2.5Y6/1粘質土(150土坑)
96. 貴地7.5Y7/3粘砂(砂混じり)
97. 灰黄2.5Y8/6粘砂
98. 灰白5Y7/1粘土
99. 灰黄2.5Y7/3粘砂 | 100. オリーブ灰5Y6/3粘質土
101. 灰白10Y7/2粘質土(径4-10mm風化礫多量)
102. 明貴地10YR6/6砂質土
103. 灰黄2.5Y7/3粘砂
104. 貴地2.5Y6/6粘土(150土坑)
105. 貴地2.5Y6/6粘土(150土坑)
106. 貴地2.5Y6/6粘土(150土坑)
107. 灰白粘質シルト(150土坑)
108. 灰10Y6/1粘土(125期層)
109. 明貴地10YR7/6砂質土(125期層)
110. 灰5Y6/6粘砂(113期層下層) |
|---|--|

X=158,298ライン断面(4区)(たてS=1:50,よこS=1:250)

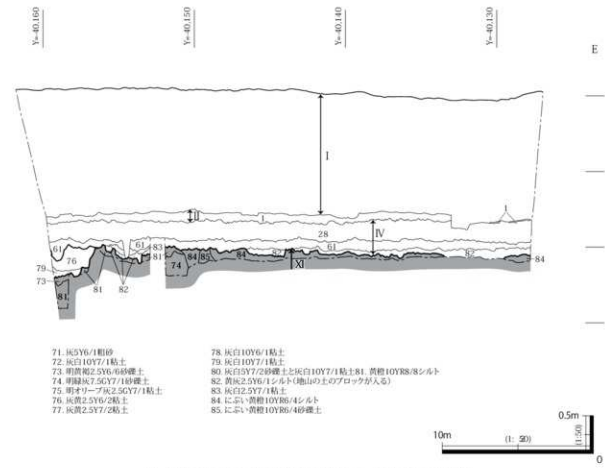
図9 調査区全体土層図(2)



- | | |
|----------------------------|------------------------------------|
| 1. 灰5%/シルト混雑土 | 21. 灰白2.5%Y/シルト |
| 2. 灰白2.5%R/砂質土(固結土造成時の硬土) | 22. 灰白10%R/粘土(砂混じり) |
| 3. 灰5%シルト引締り | 23. 灰白2.5%Y/粘砂 |
| 4. 粉7.5%R/6砂質土 | 24. 粉灰10%R5/粘土(構造物体を含むごく取用水深の底の腐植) |
| 5. 粘土質10%R7/4砂質土 | 25. 灰白2.5%Y/粘土 |
| 6. 粘土質10%R7/2砂質土 | 26. 灰白2.5%Y/粘土 |
| 7. 灰10%R/粘土 | 27. 灰白10%Y/粘砂 |
| 8. 粘土質2.5%R/シルト | 28. 灰白7%粘土(砂混じり) |
| 9. 明腐植10%R/6砂質土(硬含む) | 29. 灰質7.5%Y/3粘砂(硬混じり) |
| 10. 明腐植10%R7/6シルト(現積土(灰土)) | 30. 灰質2.5%R/3粘砂(コック) |
| 11. 黄砂10%R7/8砂質土 | 31. 明腐植2.5%R/6砂質土 |
| 12. 粉7.5%R/6砂質土 | 32. 明腐植2.5%Y/6砂質土 |
| 13. 灰白10%R7/シルト(灰土)引締り | 33. 灰白10%R7/粘砂(灰土) |
| 14. 粘土質10%R7/4シルト(上の土の床土) | 34. 灰白10%R7/シルト硬混じり(積土) |
| 15. 灰質10%R/6シルト(積土) | 35. 灰白7%Y/1砂質土 |
| 16. 灰質2.5%Y/4シルト | 36. 灰6%粘土 |
| 17. 粘土質7.5%R/6砂質土 | 37. 明腐植2.5%Y/6砂質土2%R/灰粘土の混在 |
| 18. 灰質2.5%Y/3シルト | 38. 灰白2.5%Y/1粘砂(積土) |
| 19. 灰5%シルト(積土)硬混じり | 39. 灰白10%Y/粘土 |
| 20. 黄砂10%R/6シルト(灰土) | 40. 灰白7%Y/粘土 |
| | 41. 灰白7%Y/粘土 |
| | 42. 灰10%Y/粘土 |
| | 43. 明腐植2.5%R/粘土 |
| | 44. 黄砂10%R7/8砂質土(灰土) |
| | 45. 灰白7%Y/粘砂土(埋め戻し) |
| | 46. 粘土質10%R7/2砂質土(埋め戻し) |
| | 47. 灰白10%Y/粘土 |
| | 48. 粉7.5%R/6砂質土10%Y7/粘土(埋め戻し) |
| | 49. 粉7.5%R/6砂質土10%Y7/粘土(埋め戻し) |
| | 50. 灰白2.5%Y/粘土 |

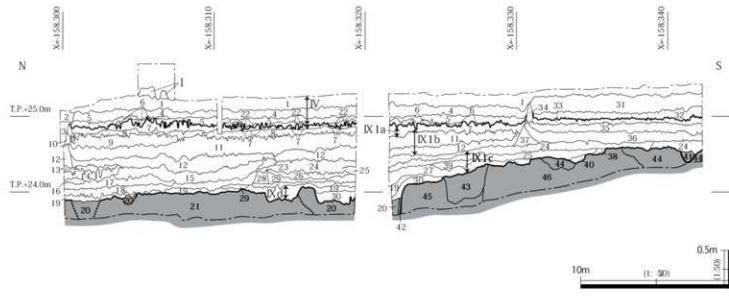


- | | | |
|---------------------------------|-------------------------|---------------------|
| 51. 明腐植10%R7/6砂質土 | 58. 明腐植7.5%Y/1粘砂 | 65. 灰白2.5%Y/粘土 |
| 52. 粉7.5%R/10%R/2粘砂 | 59. 灰白10%R/2粘砂 | 66. 灰7.5%Y/粘土 |
| 53. 灰白10%Y/1粘砂(埋め戻し) | 60. 灰白10%Y7/1粘砂(埋め戻し) | 67. 灰質2.5%Y/2粘土 |
| 54. 粘土質2.5%R/4砂質土(粘土7%コック4%混じり) | 61. 明腐植10%R/6シルト | 68. 灰白2.5%Y/1粘混じり粘土 |
| 55. 粘土質2.5%R/4砂質土 | 62. 灰6%粘土 | 69. 灰白3%Y/粘土(砂混じり) |
| 56. 粘土質2.5%R/4砂質土 | 63. 灰5%Y/2粘砂(125%砂層) | 70. 灰白3%Y/粘土 |
| 57. 灰白7.5%Y/1粘砂(粘土7%コック4%混じり) | 64. 黄砂2.5%Y/8粘土(125%砂層) | |

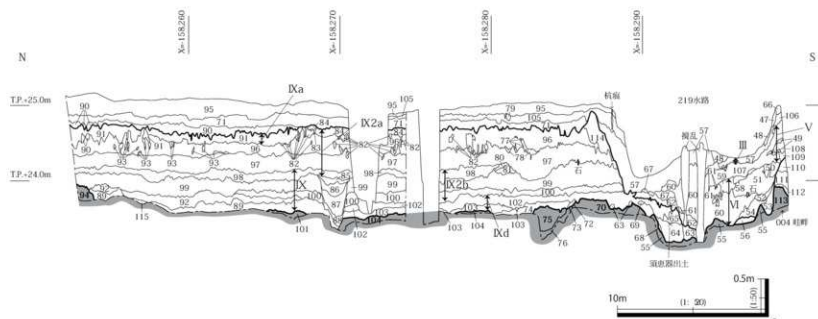


- | | |
|-------------------|-----------------------------|
| 71. 灰5%R/粘砂 | 78. 灰白10%R/粘土 |
| 72. 灰白10%Y/粘土 | 79. 灰白10%Y/粘土 |
| 73. 明腐植2.5%R/6砂質土 | 80. 灰白3%Y/2粘砂(粘土7%コック4%混じり) |
| 74. 明腐植7.5%Y/1粘砂 | 81. 黄砂10%R/8シルト |
| 75. 粉7.5%R/6砂質土 | 82. 灰白2.5%Y/粘土 |
| 76. 灰白2.5%R/6粘土 | 83. 灰白2.5%Y/粘土 |
| 77. 灰質2.5%Y/2粘土 | 84. 粘土質10%R/4シルト |
| | 85. 粘土質10%R/6/4砂質土 |

図10 調査区全体土層図(3)



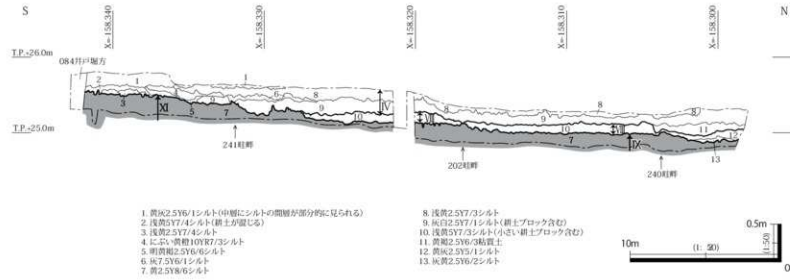
Y=40,230ライン断面(1区) (たて=1:50,よこ=1:250)



Y=40,230ライン断面(2区) (たて=1:50,よこ=1:250)

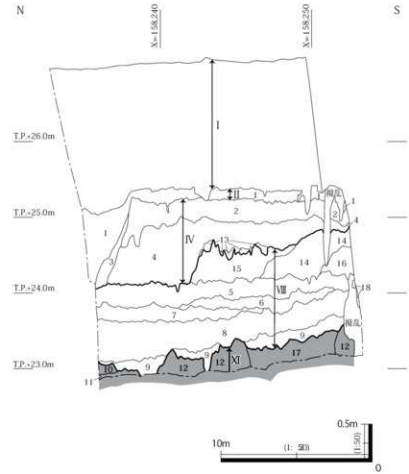
1. 緑灰10G5/1粗砂-シルト
2. 青灰3B6/1粗砂-シルト
3. 青灰3B5/1シルト-粗砂(ブロック土多く含む)
4. 緑灰7.5GY3/1粗砂混じりシルト
5. 灰土7.5GY3/1粗砂混じりシルト
6. オリーブ黄5Y6/4粗砂-粗砂(多く含む)
7. 灰10Y6/1粗砂-シルト(下方ほど粗粒)
8. 灰5Y7/2粗砂-粘土
9. 青灰5B6/5/1粗砂混じり粘土
10. 灰6.5B6/4粗砂混じり粘土
11. 青灰3B6/5/1粗砂混じり粘土
12. 青灰10B6/3/1粘土-粗砂
13. 青灰10B6/5/1シルト-粗砂(粗砂-粗砂(多く含む))
14. 青灰3B6/5/1シルト混じり粗砂(南方ほど粗粒でまがかり)
15. 緑灰10G6/4/1粘土土塊混じり粗砂(土は粗粒)
16. 青灰3B6/5/1シルト混じり粗砂-粗砂
17. 青灰5B6/6/1粗砂混じり粘土
18. 緑灰10G6/4/1粘土-粗砂
19. 灰10Y6/6/1粗砂-粗砂(粗粒でまがかり, 耕作土?)
20. 灰6.4/粘土土塊混じり粗砂(土は粗粒, 耕作土を原状に含む)
21. 緑灰10G6/4/1粗砂-粗砂(上部黄変)
22. オリーブ黄5Y6/4粗砂-粗砂(多く含む)
23. 青灰3B6/6/1粗砂-粘土
24. 青灰5B6/5/1粗砂-粘土
- 24.24に近接するが標準を含む
25. 青灰3B6/5/1粗砂-シルト
26. 緑灰10G6/6/1粗砂混じり粘土
27. 灰10Y6/6/1粗砂-シルト
28. 27に近接するブロック土を含む, 粗砂混じり
29. 緑灰10G6/6/1粗砂混じり粘土
30. オリーブ黄5Y6/3粗砂混じり粗砂
32. オリーブ黄5Y6/3粘土-粗砂
33. 緑灰10G6/6/1粗砂-粗砂(下部粗粒でまがかり, 黄変)
34. 青灰3B6/4/1粗砂-粘土(ブロック土多く含む, 0.05粗粒級土)
35. 青灰10B6/6/1粗砂混じり粘土
36. 灰10Y6/6/1粗砂混じり粘土
37. 青灰10B6/6/1粘土-粗砂
38. 灰5Y7/3/1粘土土塊混じり粗砂(多く含む)
39. 緑灰10G6/5/1粗砂-シルト
40. 青灰3B6/6/1粗砂-粘土
41. 青灰5B6/7/1粗砂混じり粘土
42. 灰6.5/粗砂(ブロック土を含む)
43. 灰10Y6/6/1灰10Y7/1粗砂-シルト(部分的に黄変し, 地山埋戻しの流石内埋積)
44. 灰5Y7/2粗砂-シルト
45. 灰10Y6/8/1シルト-粘土
46. オリーブ黄5Y6/3-灰5Y6/1粗砂(粗粒化した標準を含む, 部分的に黄変化)

図 11 調査区全体土層図 (4)



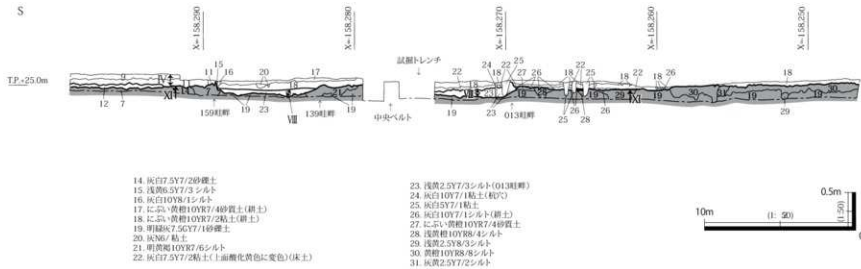
1. 黄62.5V6/シルト(中層にシルトの間層が部分的に見られる)
2. 浅黄5V7/シルト(粘土が混じる)
3. 浅黄2V7/4中砂
4. 粘土質黄10V8/シルト
5. 明黄62.5V6/シルト
6. 灰7.5V6/シルト
7. 黄2.5V8/シルト
8. 浅黄2.5V7/シルト
9. 灰白2.5V7/シルト(粘土ブロック含む)
10. 浅黄5V7/シルト(小さい粘土ブロック含む)
11. 黄62.5V6/粘質土
12. 黄62.5V6/シルト
13. 灰黄2.5V6/シルト

Y=-40,150ライン断面(3区)(たてS=1:50,よこS=1:250)



1. 灰5V6/シルト(固結土)
2. 灰白N7/粘土(粗砂混じり)
3. 粘土質黄10V8/2中層と浅黄10V8/3粘土ブロックとの混在
4. 黄10V7/6粘質土(粘土)
5. 灰白10V7/粘土
6. 灰白5V7/粘土
7. 灰白N7/粘土(粗砂混じり)
8. 灰白5V7/粘土
9. 灰5V6/4粗砂混じりシルト
10. 灰5V6/4粗砂
11. 灰白2.5V7/4粗砂
12. 明オリーブ灰5V7/4粗砂(細砂混じり)
13. 粘土質黄10V8/4粗砂混じり粘質土(径3cm程度の礫含む)
14. 灰白2.5V7/2中層土(粘土)
15. 灰7.5V6/粘土ブロックと浅黄5V7/粗砂が混じる
16. 粘土質黄10V8/3中層土(塊状粘土)
17. 浅黄5V8/4粗砂
18. 灰白10V7/粘土

Y=-40,185ライン断面(5区北)



14. 灰白5V7/2粘土
15. 浅黄6.5V7/3シルト
16. 灰白10V8/シルト
17. 粘土質黄10V8/4粘質土(粘土)
18. 粘土質黄10V8/2粘土(粘土)
19. 明黄62.5V7/4粘質土
20. 灰白/粘土
21. 明黄62.5V7/6シルト
22. 灰白5V7/2粘土(上面酸化黄色に変色)(粘土)
23. 浅黄2.5V7/シルト(0.3粗砂)
24. 灰白10V7/粘土(粘土)
25. 灰白5V7/粘土
26. 灰白10V7/シルト(粘土)
27. 粘土質黄10V8/4粘質土
28. 浅黄10V8/4シルト
29. 浅黄2.5V8/シルト
30. 黄10V8/8シルト
31. 灰黄2.5V7/2シルト

Y=-40,150ライン断面(4区)(たて=1:50,よこ=1:250)

図12 調査区全体土層図(5)

第2節 第1面の遺構と遺物 (814)

219水路

3H-1～5j～i、4～5f～hにおいて検出した。東は110畦畔に、西は115畦畔に、南は004畦畔に画される。平面はL字形をなす。水路幅は東西部分、南北部分ともに13.0mを測る。南西隅には南から001溝が落とし込まれている。南から流れ下る水をいったん集めて溜池とし、出水の時期には北の樋野ヶ池へ放出する形で利用されていたものと思われる。明治18年(1885)測量の陸地測量部作成地図では、水路はL字形で、右岸は樋野ヶ池の現在の島の西辺に陸続きとなっている。半世紀以上経た昭和21年(1946)6月撮影の高度1829mからの航空写真ではL字形の東西部分は埋没している。その後航空撮影は11回行われており、昭和35年(1960)には大阪府作成の3000分の1測量図では右岸の陸続きが途切れて島となり、昭和39年(1964)航空写真では再び陸続きに戻っている。職業

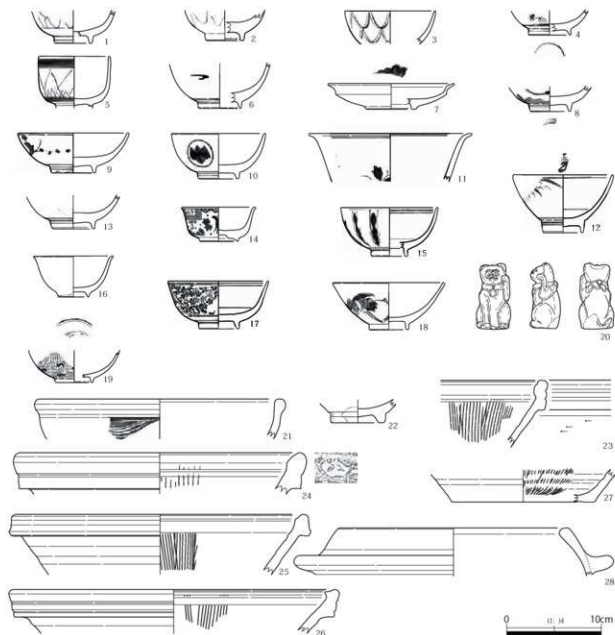


図13 219水路出土遺物実測図(1)

訓練校建物と調査区東に中央環状線が現れる昭和46年(1971)の航空写真ではまた島となり、昭和49年(1974)にもそれに変化はないが、昭和51年(1976)以降、平成11年(1999)までの3回の航空写真では陸続きに復し、平成19年(2007)写真ではまた島となっている。撮影した季節によって水位が変化するのだろう。このことも田畑への配水を考えに入れて、溜池として利用されていたことを物語っている。

検出面からの深さは、南北方向では0.45～0.67mで、南側の東西部分が深く、3H-1～4j付近がもっとも深く掘り込まれて、1.0～1.28mを測る。機械掘削によって取り除いた上層は基本層序のⅢ層にあたり、泥土に生活廃棄物が混じっている。それより以下の堆積土は基本層序のⅤ～Ⅶ層にあたる。調査区毎の断面でみると、2区北壁東西断面(X=-158.252断面)では5層、2区中央東西断面(X=-158.276断面)では7層、2区中央南北断面(Y=-40.230断面)では14層に分けられる。その他水路埋土全体では、瓦(軒丸瓦、平瓦、丸瓦、鬼瓦、道具瓦、井戸棹瓦磚)、陶磁器(碗、皿、壺、鉢、甕)、須恵器(甕、壺、坏)、土師器(形状不明)、土師質土器(羽釜、鉢、炮烙、小皿)、瓦器碗、瓦質甕、金属製品(鎌、銭貨)、木製品(下駄、漆器碗、建具材など)が出土しているが、水路の最深部に近い52層(1区、Y=-40.230ライン断面)より、昭和43年(1968)にプラスチック製に取って代わったガラス製ヤクルト小瓶が出土しているので、新旧混在する状態である。

出土遺物 以下の遺物について図化した(図13・15・16)。

磁器 1～13は波佐見窯系染付磁器で、1～6、8～10、13は碗、7は皿、11は大碗、12は坏である。2、6、9、12、13は見込み蛇ノ目軸刺ぎである。文様は9が梅枝文、10はコンニャク印判、1～3は網目文で、3が二重網目文、5は草花文を描く。4は焼成不良品である。2、7、8、9、10、12、13は豊付が露胎となる。8～10が18世紀中頃、1、2、6、11～13が18世紀代、5が19世紀代、7が17世紀代である。14～19は瀬戸窯系染付磁器で、14～15、17～19は碗、16は白磁坏である。14～18は豊付露胎である。17は見込み蛇ノ目軸ハギ、14は蛇ノ目高台で、内に冷め割れがみられる。18は関西瀬戸窯系染付鶴文碗である。以上は19世紀代の器である。20は白磁製の招き猫であるが、産地は不明である。

陶器 21は17世紀後半～18世紀代の肥前窯系刷毛目鉢、22は17世紀代の唐津窯系碗で削り出し高台である。23～26は玉縁状の口縁部内側にわずかな凸帯をもつ埴埴鉢で、24の口縁部内側に「上」字の刻印がある。これらの埴埴鉢は白石埴埴鉢分類1類にあたり、18世紀代とみられる。27は乗阿備前埴埴鉢編年の近世2期の底部と思われる。内底面でスリメが切り合い、底部外面未調整である。17世紀中頃～後葉と考えられる。

土師質土器 28は内傾する口縁部を丸くおさめ、水平の罫が付く羽釜である。14世紀代と考えられる。

瓦 軒丸瓦は29が外半径10mm、外縁高5mm、瓦当厚15mmである。外縁高は外縁幅の半分程度の立ち上がりである。珠文帯外に圈線が巡る。珠文は24個程度と推定される。12世紀代と考えられる。30は左巻巴文で幅広い外縁の内側に大きい珠文が巡る。外縁には方格の中に「立瓦定」の刻印がある。31は丸瓦で、胴部幅14cm、胴部長20cm、玉縁長5cmである。凹面は布目痕の上から内叩きしている。胴部から玉縁にかけて幅広く面取りする。広端面も同様に面取りする。凸面は丁寧にナデている。凸面狭端面に接して中央に「河野重」の三文字を方格で囲んだ刻印を入れている。凹面に粘土切り離し痕と思われる浅く細い線状痕が横方向に認められる。32はかなり摩滅した平瓦片である。凹面には5～6

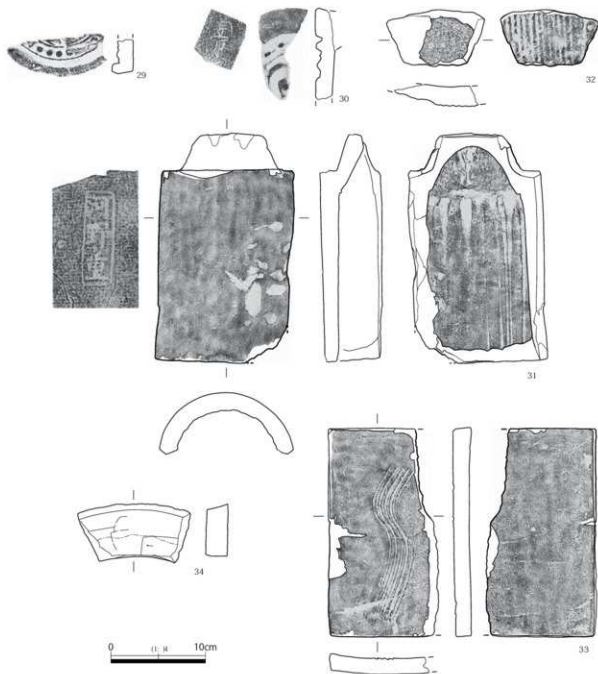


図15 219水路出土遺物実測図(2)

条/cmの布目痕、凸面には縄目叩き痕がある。7世紀後半以降の瓦と思われる。33は凹面にクシ描き曲線文を施す近世平瓦である。34は全体の形状は分からない。厚さ2.25cm、断面台形をなし、その上辺幅は4.7cm、下辺幅は5.5cmで、平面形は緩やかな弧状をなす。上辺側に幅2cmの帯状に炭素未吸着部分がある。道具瓦の一種か、あるいは屋根瓦以外の製品かもしれない。

石製品 35は砂岩質の砥石である。4面が砥面となっている。

金属製品 36は鉄製鎌である。37は寛永通宝鉄銭である。径24mm、厚さ1mm。「ハ」宝、「マ」通で、永字の尾は長く、闊縁で、輪は肉厚である。宝字の郭は上辺より下がり、冠点は長い。不旧手といわれるものにあたと考えられ、元禄期～元文期(1688～1740)の新寛永銭とみられる。

ガラス製品 38はクロレラヤクルト瓶で、口径3.2cm、高さ7cm、定径3cmの法量である。側面に

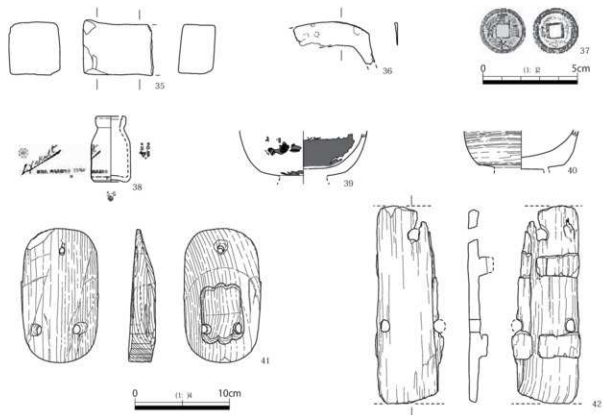


図 16 219 水路出土遺物実測図 (3)

「L Yakult」、「クロレラ 生菌 ヤクルト」、「発酵牛乳 無脂乳固形分 3.5%以上」の赤いプリント文字と記号がある。底部側面には「31」のエンボス、底面には「5-6」と星形のエンボスがある。昭和31年5～6月製造を表示するものが。

木製品 39、40は漆器碗である。いずれも高台、口縁端部は欠失している。39は内外面を赤漆塗りで、外面には黒色で格子様の模様が描かれるが、具体的な題材は分からない。残存する最大径は13.5cm、器厚は1.05cmである。40は内面にかすかに黒漆の塗膜の一部が残るのみである。残存最大径12.0cm、器厚1.9cmと前者に比べて厚い。41は舟形の下駄、いわゆるコッポリ(ポッコリ)である。長さ14.3cm、幅8.2cm、高さ2.85cmで、材は柾目板である。前後の緒穴の間隔は8.5cm、左右のそれは3.5cmである。裏側に4.0×6.5cm、深さ1.6～1.9cmの彫り抜きがある。寸法的に見て5～7歳児用と思われる。42は連歯下駄である。全体的に残りが悪い。長さ20.9cmで約9寸、幅は不明である。材は板目である。前後の緒穴の間隔は10.0cm、後歯より前に穿たれている。左右の緒穴の間隔は5.5cmである。台の厚みは1.0cm、歯の部分で2.0cmを測る。

井戸 (図 17～26)

002井戸

3I-3d区において検出した。検出面がここでは東西で段差が生じているが、西側の低所に掘り込まれた井戸である。位置的には西から東へ延びる008畦畔と東側の一段高い地盤が接する南側で、段差と畦畔に限られた区画の隅に当たる。平面はほぼ円形で、径1.1～1.15m。検出面より深さ1.0m付近で径0.7～0.8mに窄まり、それより以下は胴張りに掘り込み、深さ2.5～2.6mで丸底となる。埋土は一樣に灰色系粘土で、一気に埋め戻した状況が窺われる。地山は粗砂や礫を含む締まった土質で、井戸

底近くの粗砂（第11層）に至って出水を見る。出土遺物はなかった。

003井戸

2I-10d区において検出した。この位置は調査区全体でみると地盤高の最も高い地点にあたり、後世の削平が激しく、現耕土直下が平坦な地山面となっているため、井戸のように深く掘り下げる遺構以外は認められない。平面は不整な円形で、長径1.3m、短径1.15mを測る。深さは0.6m以下は崩落して観察できなかった。近世瓦1片、須恵器甕体部1片が出土している。

078井戸

2I-3d区で検出された。東で077水溜めに断ち切れ、西で079井戸を切って掘り込まれている。東の南東～北西方向の段差、南の南西～北東方向の段差が接する上下2段の水田の隅に位置している。径1.3～1.5mの円形の掘り込みで、深さ0.8mまで掘り下げたが、地山が軟弱な砂地のため崩落により完掘できなかった。1～2層から近代瓦片が7点出土した。

出土遺物 以下の3点の瓦片を図化した。43は全体的に摩滅著しいが、凸面に縄目叩き痕、凹面に布目痕をとどめる。工具側面で叩いた痕跡も認められる。凹面側端を面取りする。13世紀頃の瓦であろうか。44は凸面を丁寧にナデている。凹面は細い布目痕をとどめる。工具側面による叩き痕がある。14世紀以降の瓦と思われる。45は凸面の一部に縄目叩き痕がある。凹面には11～12条/cmの細かい布目痕、棒状工具による叩き痕がある。13～14世紀と考えられる。

079井戸

078井戸に東側を断ち切られている。径2.4mの整った円形掘り方で、検出面より－0.9mで径1.0mに窄まるラッパ状断面を呈する。以下はほぼ垂直に掘り下げているが、崩落により完掘できなかった。第1～4層で近世～近代瓦片1点、サヌカイト片1点、土師器片3点が出土している。

出土遺物 丸瓦片を図示した。46は玉縁～胴部の破片である。凹面側縁にはやや広い面取りがある。模骨に被せる布筒の粗い目の痕跡がある。凸面はナデている。13世紀頃の瓦と考える。47の凹面には9～10条/cmの細かい布目痕がある。側面は端部を凹面側に面取りを行っている。凸面は縦方向に丁寧にナデている。14世紀以降の瓦と思われる。

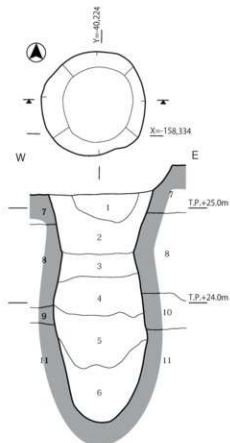
084井戸

2I-6eにおいて調査区南壁にかかる状態で検出した。現耕土上面から掘り込まれ、職業訓練校造成時まで用いられていた井戸である。平面は南北に長い楕円形の掘り込みで、南は一部調査区外に及んでいる。短径で2.5mを測る。検出面より－1.0mで径1.4mと窄まり、それより以下は若干胴張りに掘り込んでいる。地盤が軟弱で崩壊の恐れがあったため井戸底まで完掘出来なかったが、この掘り方の西壁寄りに設けられた桶側構造の井戸枠が少なくとも3段確認した。1段目の桶側は高さ0.2m残存し、その下端径は0.8m、2段目の桶側の上端は0.72m、下端径は0.76mを測り、下段の桶の上端を上段の桶の下端に0.1m程度嵌め込んでいる。桶板は板目材で幅0.2～0.25m、厚さ0.03～0.04mを24枚使用している。

085井戸

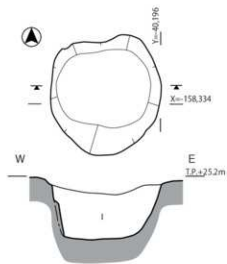
2I-8dにおいて検出した。径約2.0mのほぼ円形の掘り方の井戸である。検出面より約1.6mの砂礫の地山面に達するまで掘り下げて、平坦な底面としている。掘り方の埋土は第1～4層まで地山のブロックの混入が顕著である。その埋土中より近世～近代の瓦片2点、土師器片2点が出土している。

出土遺物 瓦片を図化した。48は胴部～玉縁の破片である。凸面は粗い縄目叩きでその後ナデている。



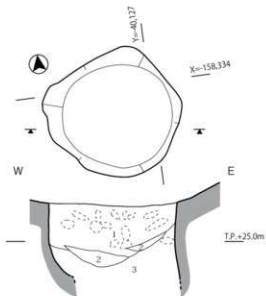
1区 002井戸平面・断面図

1. 青灰10R66/1粗砂混じり粘土
2. 青灰10R66/1粘土混じり粗砂(礫含む)
3. 灰N5/粘土
4. 暗緑灰7.5GY4/1粘土
5. オリーブ灰5GY5/1粘土(礫・粗砂が混じる)
6. 灰N6/粘土
7. 浅黄SY7/4礫混じりシルト
8. 明黄灰10YR6/6礫混じり粗砂
9. 緑灰10G6/1粘土
10. オリーブ灰5GY5/1礫混じり粗砂
11. にぶい黄2.5Y6/4粗砂



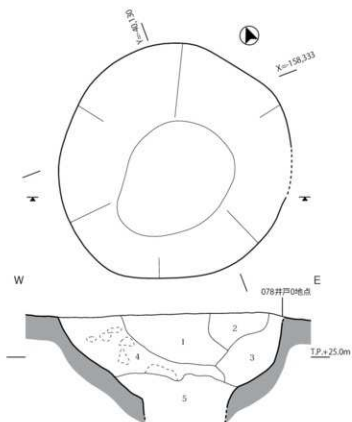
1区 003井戸平面・断面図

1. 緑灰7.5GY6/1礫混じり粗砂(礫多く含む)



3区 078井戸平面・断面図

1. 灰N6/粘土上(明黄灰2.5Y6/6粘質土ブロック含む)
2. 黄灰2.5Y6/1粗砂
3. 灰CN7/粘土

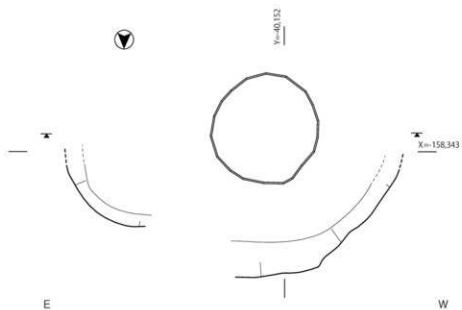


3区 079井戸平面・断面図

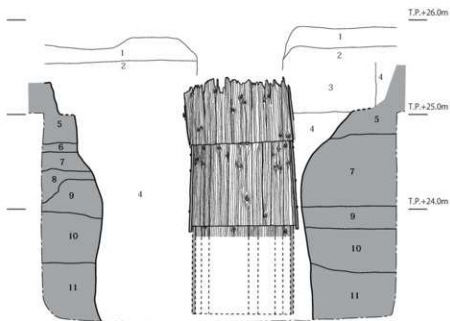
1. 灰黄2.5Y6/2粘質シルト
2. にぶい黄2.5Y6/4粘質シルト
3. 黄灰2.5Y6/1粘質シルト(明黄灰2.5Y6/6粘質シルトブロック含む)
4. 明黄灰10YR7/6粘質土
5. 黄灰10YR5/1粘質土



図17 002・003・078・079井戸平面・断面図



旧松原高等職業技術専門学校造成遺土



1. 黒褐色10YR3/2シルト(上部部に炭化層あり、旧表土)
2. 黒褐色10YR4/1シルト
3. 明黄褐色2.5Y6/6粘質土
4. 暗緑褐色2.5GY4/1粘質シルト
5. 明黄褐色10YR6/6粘質シルト
6. オリーブ褐色2.5GY6/1粘砂混じりシルト
7. 明オリーブ褐色2.5GY7/1粘砂
8. 明黄褐色10YR6/6粘質シルト
9. 灰白10Y7/2粘砂混じりシルト
10. 暗オリーブ褐色5GY4/1粘質シルト
11. 暗緑褐色7.5GY4/1粘質シルト



図 18 084 井戸平面・断面図

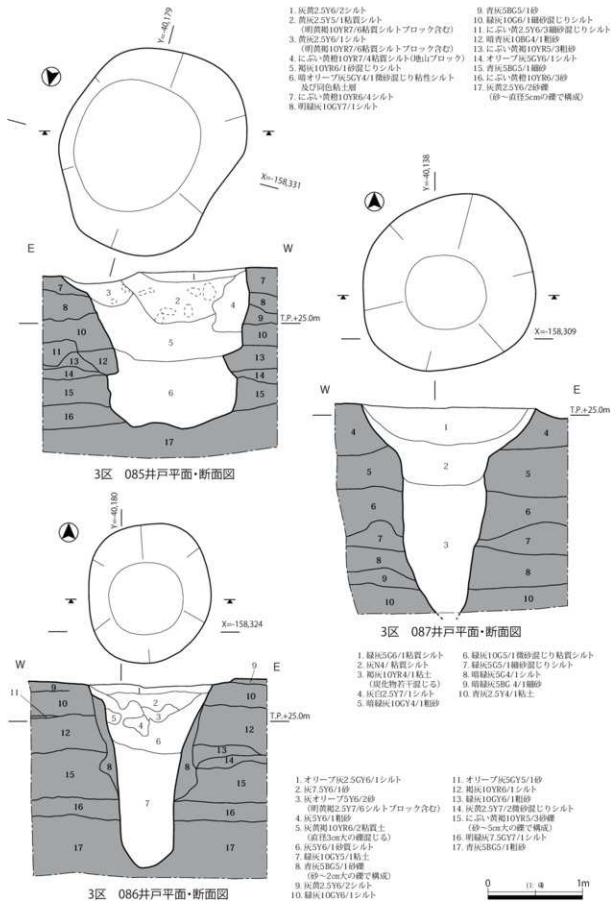
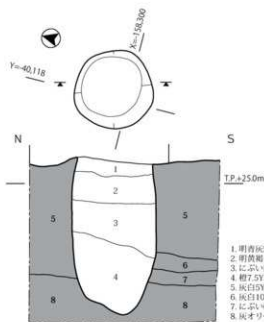
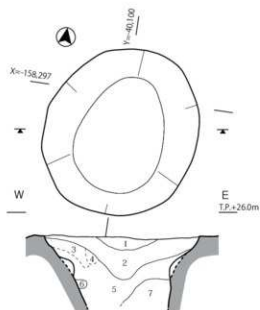


図19 085・086・087井戸平面・断面図



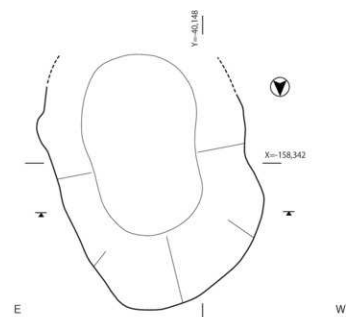
3区 094井戸平面・断面図

1. 明黄期5B6/7/1粘土
2. 明黄期10YR6/6粘土
3. にふい・黄期10YR7/2粘土
4. 紺7.5YR7/6細砂
5. 灰白5Y7/1細砂
6. 灰白10YR8/2シルト質粘土
7. にふい・紺7.5YR6/4砂
8. 灰オリーブ5Y6/2シルト

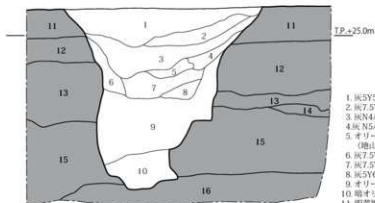


5区 096井戸平面・断面図

1. 灰黄期10YR6/2シルト
2. にふい・黄期10YR6/4粘質シルト(中央で還元化し、灰NS/シルトに変)
3. 灰黄期2.5Y6/3・黄灰2.5Y6/1シルトの順土
4. にふい・黄期10YR6/3硬土
5. 灰黄2.5Y6/2粘質シルト(3~5mm大の礫を含む)
6. 明黄期10YR6/6シルト質粘土ブロック
7. 紺灰10YR6/1シルト質粘土(3mm大の礫を含む)

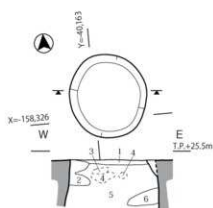


3区 091井戸平面・断面図



1. 灰5Y5/1シルト質砂
2. 灰7.5Y6/1粘土
3. 灰N4/粘土
4. 灰NS/粘質シルト
5. オリーブ黄7.5Y6/3粘土(礫山ブロック)
6. 灰7.5Y7/1砂
7. 灰7.5Y5/1砂混じり粘質シルト
8. 灰5Y6/1シルト質粘土
9. オリーブ黒10Y3/1粘土
10. 暗オリーブ灰5GY4/1砂混じり粘土
11. 明黄期2.5Y6/6粘質シルト
12. 灰NS/細砂混じりシルト
13. 緑灰10GY5/1砂礫(礫径~直径5cmの礫で構成)
14. 灰10Y5/1細砂
15. オリーブ灰2.5GY5/1細砂混じりシルト
16. 暗オリーブ灰2.5GY4/1細砂混じりシルト

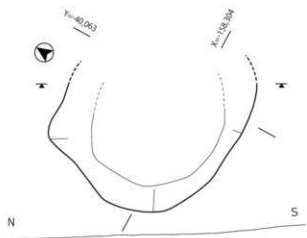
図 20 089・091・094・096 井戸平面・断面図



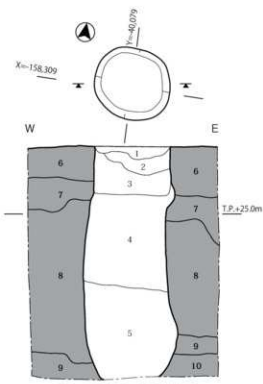
3区 089井戸平面・断面図

1. にふい・黄期10YR6/4礫・ブロック混じり土
2. にふい・黄期10YR6/3~紺灰10YR6/1硬土
3. 明黄期10YR6/6粘質シルトブロック
4. 紺灰10Y5/1粘土ブロック
5. 灰5Y5/1細砂
6. 灰7.5Y5/1粘質土



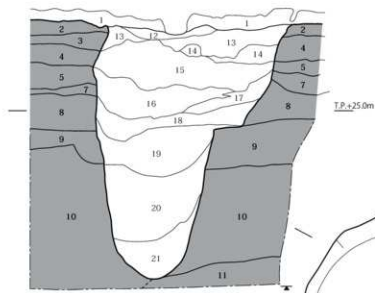


旧松原高等職業技術専門学校造成遺土



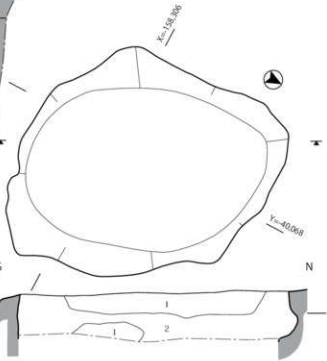
5区 100井戸平面・断面図

1. にぶい黄2.5Y6/3粘質シルト
2. 灰オリーブ2.5Y5/2シルト質粘土
3. 黄灰2.5Y6/1砂(数mmの粘土ブロック多い)
4. 灰オリーブ7.5Y6/2粘土
5. MNS/ 細砂
6. 粗7.5Y7/6礫
7. 灰白2.5Y7/1粘質シルト
8. にぶい黄褐色10YR7/4礫砂
9. にぶい黄褐色10YR6/4シルト
10. 粗面7.5YR5/6礫砂



5区 097井戸平面・断面図

1. 黄褐色10YR3/1シルト(泥化物わずかに含む)
2. 明黄褐色10YR6/6粗砂混じりシルト
3. 黄灰10YR6/1粘質土
4. 黄褐色10YR5/6粘質土(直径1~2cmの礫及び風化礫若干含む)
5. 粗灰黄2.5Y5/2粘質土(直径0.5~3cmの礫混じり)
6. 灰黄2.5Y6/2粘質土(直径1.5cmの礫及び泥化物わずかに含む)
7. 灰5Y5/1粗砂混じり粘土(直径1~3cmの礫わずかに含む)
8. 灰5Y6/1粘性砂礫層(砂~直径4cmの礫で構成)
9. 粗灰10YR6/1礫土
10. 粗7.5YR6/6礫砂
11. 明黄2.5YR5/6細砂
12. 灰黄2.5Y6/2粗砂混じりシルト
13. 黄灰2.5Y6/1シルト(直径0.3~4mmの礫で構成)
14. 灰5Y6/1シルト
15. 灰N4/ 粘質土
16. 黄灰2.5Y4/4粘質土(直径1~2cmの礫わずかに含む)
17. にぶい黄2.5Y6/4砂混じり粘質土(細砂~直径10cmの礫わずかに含む)
18. 地灰N3/ 粘土
19. 灰7.5Y6/1粘性砂礫層(砂~直径2cmの礫で構成)
20. オリーブ黄5Y3/1シルト
21. 灰N4/ 粘質土



5区 103井戸平面・断面図

1. 黄褐色10YR5/6砂礫(砂~直径5cm大礫で構成)
2. 黄灰5Y5/1砂礫(砂~直径7cm大礫で構成)



図 21 097・100・103 井戸平面・断面図

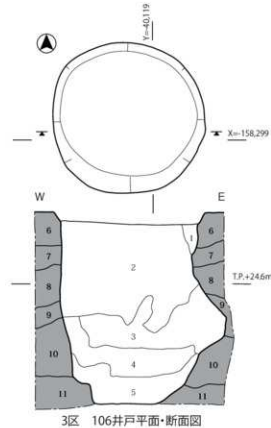
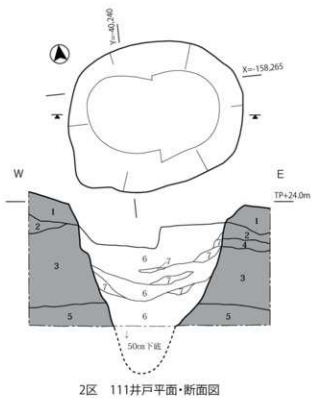
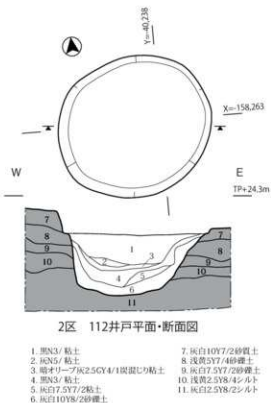
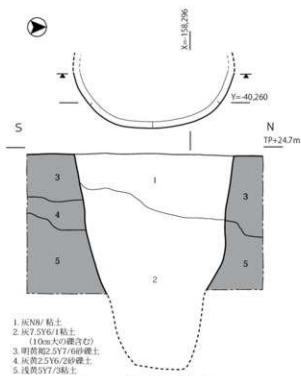
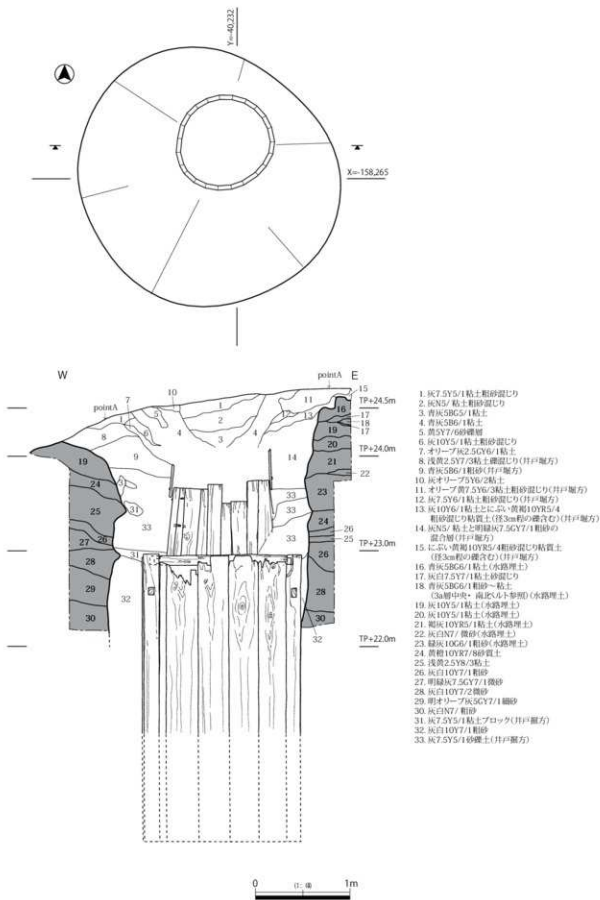
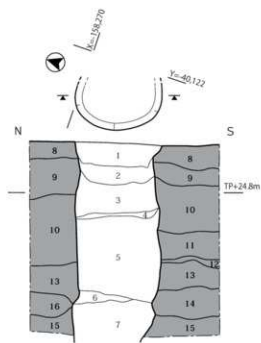


図22 106・110・111・112井戸平面・断面図



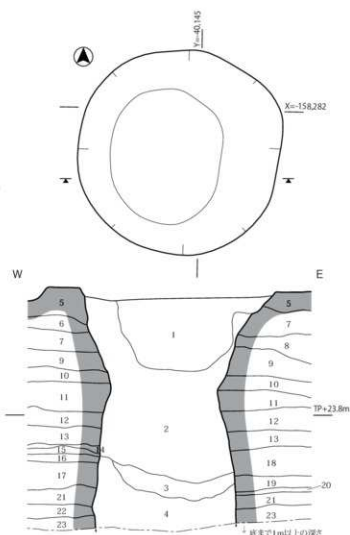
1. K7.5Y5/1粘土粗砂混じり
2. KNS/粘土粗砂混じり
3. 青灰5B65/1粘土
4. 青灰5B6/1粘土
5. 黄灰7/60層理
6. K10Y5/1粘土粗砂混じり
7. オリーブ灰2.5GY6/1粘土
8. 浅黄2.5Y7/3粘土薄混じり(井戸壁方)
9. 青灰5B6/1粗砂(井戸壁方)
10. Kオリーブ3Y6/2粘土
11. オリーブ黄7.5Y6/3粘土粗砂混じり(井戸壁方)
12. K7.5Y6/1粘土粗砂混じり(井戸壁方)
13. K10Y6/1粘土上にぶい黄期10YR5/4粗砂混じり粘土上(径3m程の継合む)(井戸壁方)
14. KNS/粘土と黄期灰7.5GY7/1粗砂の混合層(井戸壁方)
15. にぶい黄期10YR5/4粗砂混じり粘土上(径3m程の継合む)(井戸壁方)
16. 青灰5B66/1粘土(水路埋土)
17. K10Y7/3粘土粗砂混じり
18. 青灰5B66/1粗砂～粘土
(Ca層中灰・黄灰ノト初期)(水路埋土)
19. K10Y5/1粘土(水路埋土)
20. K10Y5/1粘土(水路埋土)
21. 粗灰10YR5/1粘土(水路埋土)
22. K10Y7/黄砂(水路埋土)
23. 粗灰10G6/1粗砂(水路埋土)
24. 黄期10YR7/8砂質土
25. 浅黄2.5YR6/3粘土
26. K10Y7/1粗砂
27. 明緑灰7.5GY7/1粗砂
28. K10Y7/2黄砂
29. 明オリーブ灰5GY7/1粗砂
30. K10Y7/粗砂
31. K7.5Y5/1粘土ブロック(井戸壁方)
32. K10Y7/1粗砂
33. K7.5Y5/1砂質土(井戸壁方)

図23 114 井戸平面・断面図



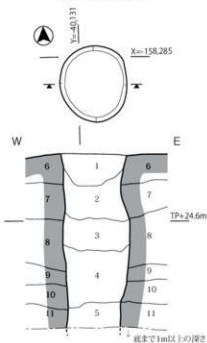
4区 131井戸平面・断面図

1. 灰黄層10YR5/2シルト
2. 灰5Y6/1粘土
3. 灰オリーブ5Y6/2粘土
4. オリーブ5Y6/6粘土
5. 細灰10YR5/1粘土
6. 明オリーブ灰5GY7/1粘土
7. 細灰10YR5/1粘土
8. 明黄層10YR7/6シルト
9. 灰白10Y7/1粗砂混じり粘土
10. 明緑灰7.5GY7/1粘土
11. 明黄層10YR6/6粗砂
12. 浅黄5Y8/2シルト
13. 浅黄2.5Y7/4粗砂
14. 浅黄5Y7/4粘土
15. 緑灰10GY5/1粘土
16. 明黄層10YR7/6シルト



4区 134井戸平面・断面図

1. 灰N5/シルト粘土
2. 緑灰5G6/1粗砂混じり粘土
3. 灰N6/粘土硬土
4. オリーブ灰5GY6/1粘土17. 灰白5Y7/1粘土
5. 浅黄2.5Y7/4シルト
6. 緑灰7.5GY6/1粗砂
7. 明オリーブ灰5GY7/1粗砂混じり
8. 土い混2.5Y6/4シルト
9. 灰黄2.5Y7/2粘土
10. 緑灰7.5GY6/1粗砂
11. 粗5Y6/8粗砂
12. 明黄層10YR7/6粘土
13. 土い混黄層10YR7/2粗砂
14. 明黄層10YR6/6粗砂混じり
15. 土い混黄層10YR7/2粗砂
16. 粗5YR6/6粘質シルト
17. 灰白7Y7/1粘土
18. 灰黄2.5Y7/2シルト
19. 灰白10Y7/3シルト
20. 粗5YR6/6粘質シルト
21. 灰白5Y7/1粘土
22. 灰N6/粘土
23. 灰N4/粘土



4区 132井戸平面・断面図

1. 黄層2.5Y5/6シルト
2. 灰5Y6/1粘土
3. 灰10Y5/1粘土
4. 明黄層10YR6/6砂礫土
5. 明黄層5R7/1粘土
6. 浅黄2.5Y7/4シルト
7. 明青灰5GY7/1粗砂
8. 灰白5Y8/2粗砂
9. 明黄層10YR7/6粗砂
10. 粗5YR6/8粘土
11. 土い混黄層10YR7/3粘土オリーブ黄5Y6/3砂礫土



図 24 131・132・134 井戸平面・断面図

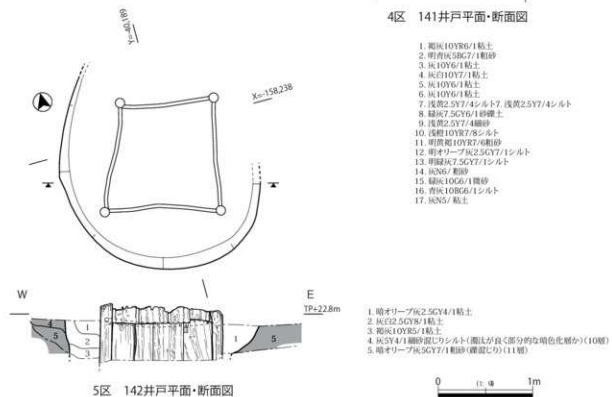
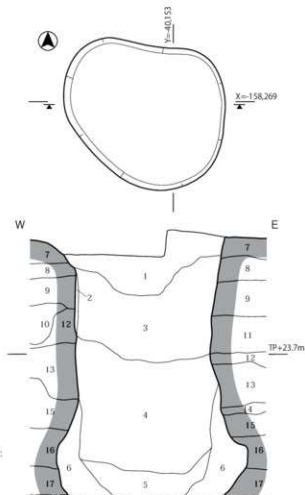
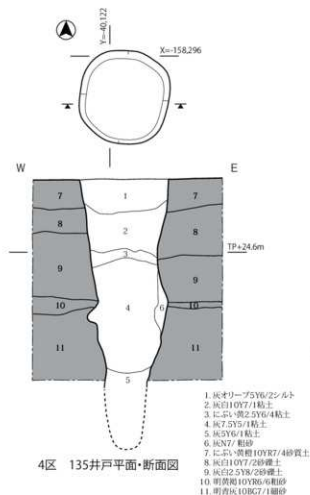


図 25 135・141・142 井戸平面・断面図

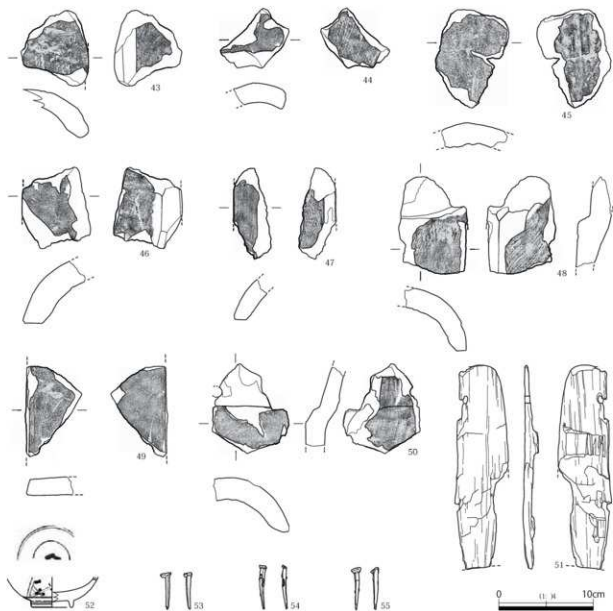


図 26 井戸出土遺物実測図

凹面側端を広く面取りする。13世紀頃の瓦と思われる。49は凸面、凹面を丁寧にナデている。側縁を面取りし、凹面側では側面を縦方向にナデている。近世瓦である。

086井戸

2I-9cと2I-8cにかけて検出した。085井戸と同じく調査区全体では地盤高の最も高い位置に掘り込まれている。径1.3～1.4mの不整な円形掘り方である。検出面より1.9m掘り下げ、青灰色粗砂に至って湧水を得ている。底面付近の径0.6mまでは次第に窄まる丸底となって終えている。埋土は検出面より0.7mまで粘土で、それより上は一気に埋められた砂、シルトなどである。この上層より近世～近代の軒丸瓦片が2点出土している。

出土物 以下の1点を図化した。50は胴部～玉縁の破片である。凸面を丁寧にナデる。凹面には10～12条/cmの布目痕がある。凹面側には玉縁から胴部にかけての面取りがある。凸面を縦方向に強くナデ、両側縁を丸くナデている。14世紀以降の瓦と思われる。

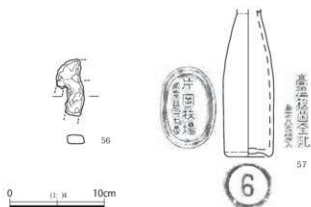
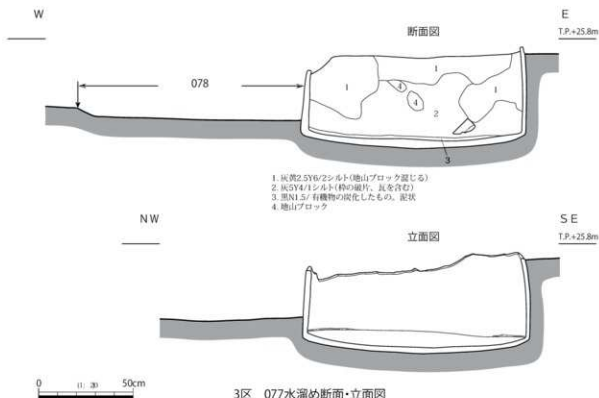


図 27 077 水溜め断面・立面図・出土遺物実測図

087井戸

2I-4aにおいて検出した。南東から北西に延びる139畦畔とこれに平行する東側および南側の1段高い耕作面に画された隅に掘り込まれている。径1.8mのラッパ状に上開きとなる掘り方が、検出面より-0.5m以下はほぼ垂直に掘り下げられ、-1.5m以下は底面に向かって窄まる。第9層の細砂層と第10層の粘土層の境付近で湧水を見る。近世～近代の丸瓦片が2点第1～2層で出土している。

089井戸

2I-7cにおいて検出した。085、086井戸と同じく調査区全体では高い地盤に掘り込まれている。平面径0.9mで、以下はやや内湾気味に掘り下げられている。本来はもっと高い地盤に掘り込まれたラッパ状に上開きとなる井戸が地下げによって削平されたものと考えられる。埋土には地山ブロックが含まれ、地下げの際に埋め戻された印象である。検出面より-0.5m以下は砂地の地山のため崩壊してしまった。出土遺物はみられなかった。

091井戸

2I-5eにおいて検出された。084井戸の東側に掘り込まれている。この井戸との間には南東～北西方向の鋤溝の一部が痕跡をとどめ、その方向と直行する形で南側に1段高い耕作面が存在する。このことから084と並んで091井戸も1つの区画の水田の隅を狙って掘り込まれていることが分かる。径2.1mのほぼ円形の掘り方で、深さ0.6mまで掘り下げられ、以下はやや内湾気味となり、底部付近で東はズレが生じている。第15、16層の微砂混じりのシルトに至って湧水を得ている。埋土の第1～8層より近世～近代の平瓦片が1点出土している。

094井戸

2I-2aにおいて検出した。南に接する1段高い耕作面の肩が南西～北東に通る。その肩のラインと直角をなして続く段が2H-1jに及んでいる。つまり、水田区画の隅に掘り込まれた井戸といえる。径0.8mの円形掘り方で、検出面よりの深さは1.6mである。底部に向かってやや内湾するように下がり、底部を丸く掘り込んでいる。井戸は本来もっと高い地盤から掘り込まれていたのが地下げによって上部が削平されたと考えられる。地山の第7・8層が湧水深度と思われる。井戸底に堆積した第4層の粗砂以外はすべて粘土の埋土である。出土遺物はみられなかった。

096井戸

1H-10j, 2H-1jにおいて検出した。径1.6m、検出面より-0.8m以下は崩落により掘り下げられなかった。職業訓練校造成時に埋められたと考えられる。

097井戸

1I-7aにおいて検出した。東半部は調査区外に及んでいる。径1.9m、検出面よりの深さは2.6mで、細砂層まで掘り込み湧水を得ている。職業訓練校造成時まで使用されていたと考えられる。埋土には全体的に近代瓦、ガラス、磁器、連筒下駄(図22:51)などの破片が混入していた。

100井戸

1I-8aで検出された径0.8mの井戸である。検出面より深さは-2.5mまで掘り下げた。地山はT.P.+25.0mとT.P.+23.6m付近でシルトを挟み、その上下は砂礫となっている。職業訓練校造成時の盛土下の耕土面より掘り込まれ、埋土は盛土時の廃ガラや耕土を含む土砂である。造成時まで使用されていたのであろう。

103井戸

1I-7aにおいて097井戸の西側に検出した。径2.8mの掘り込みであるが、崩壊によって0.5m以下は掘り下げられなかった。職業訓練校造成時に埋め戻されたと考えられる。

106井戸

2H-2jにおいて、094井戸の西側の砂礫の地盤に掘り込まれている。径2.5mのほぼ円形の掘り方で、検出面より-0.4mで径1.3mと窄まり、以下はほぼ垂直に下がるが、崩壊のため-2.0mまで観察したにとどまる。掘り込みは、職業訓練校造成時盛土下の耕土面からであり、それまで使用されていたようである。出土遺物はない。

110井戸

3H-6jにおいて検出した。西半部は調査区外に及ぶ。107畦畔と004畦畔との交差するところに掘り込まれている。壁面が崩壊し完掘できなかったが、検出面より2.3mで井戸底と思われる。径1.7mの円形掘り込みで、-1.0m付近でやや中膨らみに下がり、以下は下窄まりとなる。埋土はかつての耕

土であった灰色粘土である。出土遺物はみられなかった。

1 1 1 井戸

3H-4g～5gにおいて検出した。219水路の南北方向の底面の砂礫層に掘り込まれている。径約2.0mの円形で、検出面より－1.3mまで掘り下げたが、崩落のため井戸底はボーリングによって確かめ、－1.8mまで掘り込まれていることが分かった。開口部は上広がり、底部に向かって窄まる掘り込みである。埋土は同じ粘土と砂礫が交互に混じり、一気に埋めている。掘削範囲内では出土遺物はみられなかった。

1 1 2 井戸

3H-4gにおいて111井戸の南西に接して検出した。111井戸と同様の掘り込みであるが、検出面より－0.65mで平坦な底面に達する。埋土は底面に溜まる砂礫土以外はすべて粘土で、219水路埋土に似た土質の炭混じり粘土(第3層)を含む。水路が埋没して耕地となつてから掘り込まれた井戸であろう。出土遺物はみられなかった。

1 1 4 井戸

3H-4gにおいて検出した。219水路の東側の粘土面から掘り込んでいる。径約3.0mの掘り方で、検出面より－2.5mまで掘り下げたが、崩落の恐れがあつたため底面を確認できなかつた。掘り込みは上広がりであるが、それより以下は径2.0mのほぼ垂直な掘り込みである。掘り方内には1.6m四方の方形枠を設け、その内部に桶側を重ねて井戸本体としている。

桶側は084井戸と同様の造りで、裾広がり部分をその下の桶側の上端に10cmほど被せるものである。1段目の桶側は裾の部分で内径1.05m、高さ0.4m程度残存していた。その下の2段目の桶側は幅14cm、厚さ1.0～2.5cm、長さ99.5cm前後の板を使用している。上端での内径は90.0～95.0cmである。

方形枠は、一辺15～17cmの角材4本を使用して骨組みとし、それぞれの材の上端から2～4cmのところと、同じく35cmのところとに枿穴を割り出し、これに横木を通す仕組みである。上の枿穴は7～10cm幅、奥行き5～9cmの方形で、下の枿穴は5～6×7～9cmの貫通孔である。上の枿穴が受ける横木は10cm角の材で、その両端に一辺5cm、長さ5cm程度の枿を削り出している。この横木と縦木により組み立てられた骨組みの一辺は1.65mで、この側面に縦板をあてがって掘り方との間を粘土、砂礫で埋めている。南側面では幅30.0～33.0cm、厚さ2.5cm、長さ3.0mの板4枚と幅6.0～7.0cmの板1枚で両隅柱の間隔1.34m幅を塞いでいた。西側面では隅柱までも板で覆っていた。

井戸掘り方より須恵器または壺の破片2点、土師器片1点、瓦器片1点、磁器碗片1点が出土しているが、いずれも細片のため図化できない。

1 3 1 井戸

2H-3hにおいて検出した。東半部は調査区外に及んでいる。検出面より－0.2mあたりまでは上開きに掘り込み、以下は内湾気味に掘り下げられ、－1.9m以下は次第に窄まり井戸底に至っている。検出面より－2.0m付近までしか発掘できなかったが、ボーリングで探ったところ検出面より－3.0mで井戸底に達する。耕土と思われる粘土で一気に埋められている。出土遺物はみられなかった。

1 3 2 井戸

2H-4iにおいて検出した。検出面では径0.7mの円形で、－0.4mあたりから内湾気味に掘り下げ、－1.6mからは垂直に下がる。－1.85mまで確認した。ボーリング棒にて探ったが井戸底に達する

ことはできず、底面は-2.85mよりさらに下がると考えられる。地山を削った土で一気に埋められている。出土遺物はみられなかった。

133井戸

2H-5iにおいて134井戸の北東に接して検出された。南東～北西へ延びる地山を削り出した段の肩部に掘り込まれている。写真撮影中に崩壊し、断面実測はできなかった。径1.8mで134井戸と同様、ラッパ状に掘り込み、-1.0mで径1.0m前後に窄まり、以下は内湾するように掘り下げている。-2.25mまで掘り下げたが井戸底には達せられなかった。出土遺物はみられなかった。

134井戸

2H-5iにおいて検出した。南東～北西方向の139畦畔が南西～北東方向の188溝に接する東側に掘り込まれている。径2.1mの円形で、上開きのラッパ状に掘り込み、-1.0m付近から内湾するカーブを描いて掘り下げられている。-2.5mまで掘り下げ、以下はさらに深さ1.0mまでボーリングにて探したが、底面に達せなかった。井戸底は-3.5m以下である。埋土は耕土の混じる粘土を含み、一気に埋められたと考えられる。埋土より陶器鉢、18世紀代の波佐見窯系染付碗(図26;52)が各1点出土している。

135井戸

2H-3jにおいて検出した。径0.95mの円形に掘り込み、-0.9m以下やや内湾気味に掘り下げ、-1.3m以下は斜めに下がって井戸底となる。検出面より-2.1mまで発掘したが、ボーリング棒によって探ったところ底面は-2.85mと考えられる。

141井戸

2H-6gにおいて検出した。南東～北西方向に延びる139畦畔の北の延長線上の段差と、南西～北東方向に延びる013畦畔の交差するところの東に接して掘り込まれている。径1.8mの円形の掘り込みであるが、本来上開きのラッパ状であった開口部が削平されたとみられる。-1.3mまではほぼ垂直であるが、それ以下は内湾する形に掘り下げられ、-2.4mあたりで最も胴張り状となり、以下は底面に向かって窄まるようである。-2.8mまで発掘したが、それ以下は-1.0mまでボーリングにて探しても井戸底に達しなかった。したがって底面は-3.8m以下に及んでいると考えられる。埋土は耕土と思われる粘土で一気に埋めている。出土遺物はみられなかった。

142井戸

2H-9dにおいて検出した。5区(北)は調査区全体では最も樋野ヶ池に接する位置にある。この調査区は勾配の急な池の護岸に接しているうえに軟弱な砂の地盤から常時出水があり、崩落の危険が大きかった。そのため深く掘り下げることはできなかった。この井戸は本来第1面の遺構で、5区(北)東壁断面土層中、第15層上面より掘り込まれているが、第2面まで下げて検出したものである。

T.P.24m付近から掘り込まれ、ラッパ状に開く開口部から-1.0mで、径2.0mの円形となり、このレベルで一辺1.3mの方形の枠組みが露呈する。枠組みの四隅には10.2cm角の材を立てて隅柱とし、横木を受ける奥行き6.0～8.0cm、一辺5.0cm四方の方形の柄穴を削り込んでいる。隅柱と隅柱の間は、厚さ1.3～1.5cm、幅20.0～30.0cmの板を以って塞ぐ。立ち上がり10.0～20.0cmの高さを留める上板の下端は下板の上端に載せている。その上下の板は、隅柱と隅柱の間に差し渡された横木に外側から、板1枚につき1～2本の釘で打ちつけて固定している。

釘(図26;53～55)は長さ4.2～4.5mmで、1寸4～5分の巻頭釘または頭巻釘と考えられる。

077水溜め(図27)

2I-3dで検出した。078井戸の東側を断ち切って掘り込まれている。139畦畔の南東の延長上の段と南西から延びる段とがほぼ直角に接合する位置にある。これらの段によって204水田、1205水田が区画されるが、この水溜めは078井戸、079井戸とともにそれら水田の隅に掘り込まれている。径1.15mの円形で、検出面より-0.45～-0.50mを垂直に掘り込み、底面は平らにして、その内壁全体に厚さ2.0～4.0cmにコンクリートを丁寧に塗りつけ、上部がやや内傾する水槽のように仕上げている。埋土は地山ブロックの混入する耕土で、底面には炭混じりの泥土が溜まっている。この埋土中より針金、板材、近代平瓦片、磁器碗、急須、牛乳瓶、馬鐮の歯(56)、それに落下したこの遺構の開口部分のコンクリート片が出土した。板材はこの施設の蓋の可能性はある。

牛乳瓶(57)は口縁部を欠くが、気泡のある厚さ3mm程度のガラス製で、側面には縦長の楕円輪郭の中に「片岡牧場 電話二七番」、その反対側に「高温殺菌全乳 一、八分入」、底面にはゴチック体の「9」または「6」の陽刻(エンボス加工)がある。「全国乳業年鑑」によると片岡牧場の設立年は不明だが、昭和34年から60年まで大阪府南河内郡美原町黒山に所在した記載がある。在阪の中堅の会社で学校牛乳の供給を通じて地元では相応の知名度があったらしい。昭和40年の年鑑から「片岡牧場」が「片岡乳業」に変更されている。日本の市販牛乳は、明治から大正にかけては90ml(五勺瓶)、昭和初期から昭和45年頃にかけては180ml(一号瓶)で、それ以後は厚生省が学校給食用の牛乳の標準容量を200mlに策定して200ml瓶に増量された。本例のような肩の張らない細身の180ml瓶の他の類例を見ると、全高は17.3cmであり、それらは昭和10～20年代のものである。以上から見てこの牛乳瓶の使用されていた年代を昭和初期から高度成長期の昭和39年までとみることができよう。

水田

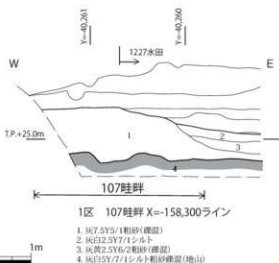
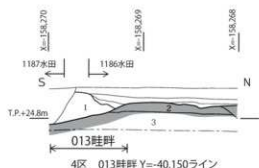
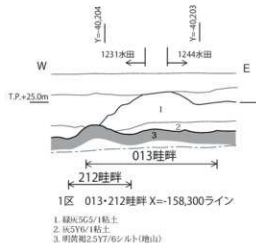
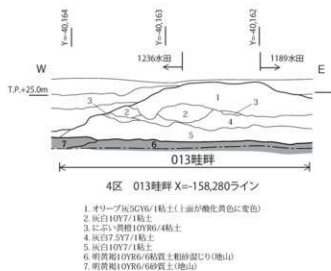
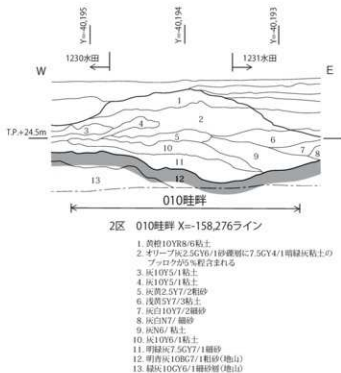
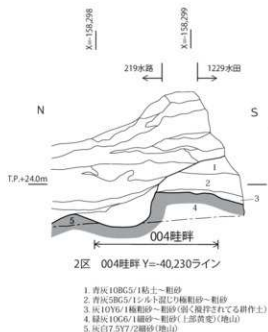
水田区画は畦畔によって画される一定区画を指す。畦畔は、田畑の耕作作業以外の通行、施肥、保水などのために使用される細長い形状をした部分で、高低差のある農地間の傾斜地、水路、農道の「のりしろ」も含まれる。したがってかつての自然地形の起伏を効率的に利用して水田に供するために行われた削平による段差や、古い畦畔の高まりが消失して帯状に変色した痕跡などによっても検出の根拠とした。なお、記述の便宜上、一枚毎の水田の表記にあたっては、現地での検出時に振った遺構番号に、第1面検出のものには前に1を付して1000番代とし、第2面検出のものは同様に2を付して2000番代として区別した。これによって後述する第2面の水田の番号で、100番代の数字が第1面と同じであれば、同じ位置で上下にわたって確認される水田であることを示している。

1095水田

2H-5i～j、2I-4～5a～bで検出した。東は1233水田との境の段差、西は139畦畔により画され、北は1189水田との段差、南は1234水田との境の段差により画される、東西3.0～5.0m、南北23.0m、面積92㎡の南北に細長い水田である。南東～北西の地盤高はT.P.25.05～25.09mを測る。北辺には134井戸、南辺には087井戸が掘り込まれている。

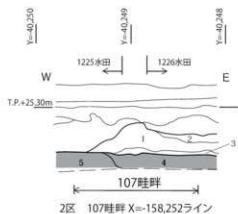
1137水田

2H-8～9jにおいて検出した。1190水田の北東隅に一边3.0m、深さ0.05～0.07mの方形の掘り込みで、北辺に2箇所の水口をつけて一段下の1189水田に落とし込んでいる。地盤高はT.P.24.8mを測る。

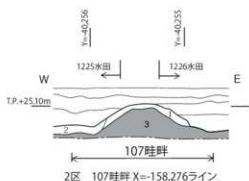


0 1m

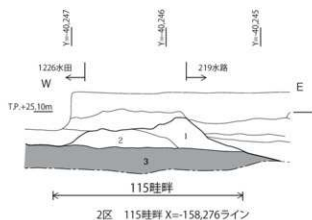
図 28 畦畔断面図 (1)



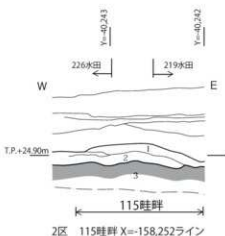
1. 明貴岡10YR6/2シルト(粘土)
2. にふい黄緑10YR7/4シルト(上の土の床土)
3. 浅黄2.5Y7/4シルト
4. にふい相7.5YR6/4砂礫土(地山)
5. 黄緑10YR7/8礫土(地山)



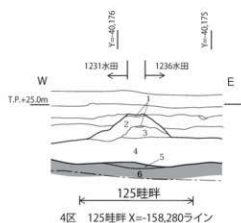
1. にふい相2.5Y6/3シルト浅黄2.5Y7/4シルトブロック固まる
2. にふい相2.5Y6/3シルト
3. にふい相2.5Y6/4粘質シルト(地山)



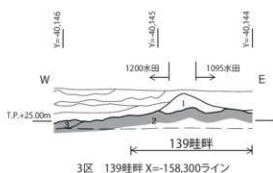
1. 灰オリーブ7.5Y6/2粘質シルト
2. 灰オリーブ5Y6/2粘質シルト
3. 明貴岡2.5Y6/6礫混じりシルト(地山)



1. 黄緑10YR8/6シルト
2. 灰黄緑10YR6/2シルト
3. にふい相7.5YR6/4砂礫土(地山)



1. 明貴岡10YR7/6砂質土
2. 灰3G6/粘土
3. 灰10Y6/1粘土
4. 明オリーブ灰2.5GY7/1粘土
5. 灰5Y6/1細砂(11.3mm以下層理土)
6. 明貴岡2.5Y7/6粘砂(地山)



1. 灰白2.5Y7/1シルト
2. 緑灰5G6/1砂礫層(砂〜径3cmの礫で構成)(地山)
3. 灰白10Y7/2粘砂(地山)



図29 畦畔断面図(2)

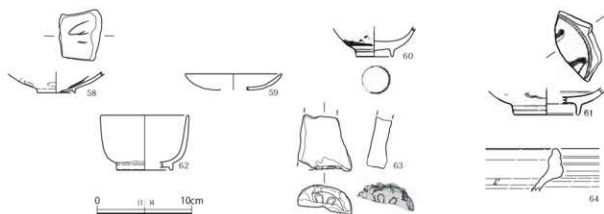


図30 畦畔出土遺物実測図

1138水田

2H-2～3h～jにおいて検出した。東西3.0m、南北15.0mの北西～南東方向の細長い水田である。1233水田の南東部に同じ方向で掘り込まれている。面積は45㎡である。地盤高はT.P.25.17～25.21mを測る。

1185水田

2H-5～6f～gで検出した。1232水田の東を限る南北方向の段差と、東側の1233水田との間の段差によって東西および北を画され、また水田1186によって南を画される東西8.0m、南北3.0m、面積24㎡の小規模な水田である。地盤高はT.P.24.80～24.85mを測る。

1186水田

2H-5～6gで検出した。1232水田の東を限る南北方向の段差と、東側の1233水田との間の段差によって東西を画され、南は013畦畔により画される。東西5.0m、南北5.0～7.0m、面積46.0㎡程度の小規模な水田である。南東隅に211土坑が、また南西隅には141井戸が掘り込まれている。地盤高はT.P.24.76～34.85mを測る。

1187水田

2H-5～6hで検出した。139畦畔と水田1233との境の段差によって東西を画され、北は013畦畔、南は1095水田の北辺の段差によって画される東西4.0～5.0m、南北16.0m、面積72㎡程度の水田である。南東隅に133井戸が掘り込まれている。地盤高はT.P.24.88～24.90mを測る。

1189水田

2H-6～10i～j、3H-1aにおいて検出した。南東から北西に延びる段丘の斜面を北東～南西方向に造成した水田である。北東は139畦畔の北の延長上の段差により限られ、南西端は3I-2b付近の旧河道東肩に接している。北は013畦畔まで、南は188溝までの南北幅12.0～13.0mであるが、2H-9J付近では一段高い1190水田が南から張り出し、よってここでは南北幅は半減する。面積は480.0㎡である。地盤高はT.P.24.70～25.00mを測り、東から西へ緩やかな傾斜をもつ。

1190水田

2H-8～9jにおいて検出した。1189水田の西南に南から張り出す形で、方向を同じくする水田である。南側は1195水田の北辺との段差で限られる。西側は削平されている。面積は100㎡程度である。地盤高はT.P.24.90～25.00mを測る。

1191水田

2I-10aにおいて検出した。北側は1190水田、東側は1195水田に接する。西側は削平により不明。地盤高はT.P.25.00mを測る。

1192水田

2I-7～8aにおいて検出した。北は1189水田、東は1197水田、西は1195水田、南は1196水田に接する。面積は30㎡程度である。不整形な長方形を呈する。地盤高はT.P.24.80～24.90mを測る。

1195水田

2H-8～9aにおいて検出した。北は1190水田、東は1196水田、西は1191水田に接し、南は削平を受けている。面積は50.0㎡以上あったと思われる。地盤高はT.P.24.90～25.00mを測る。

1196水田

2I-7～8a～bにおいて検出した。南東～北西方向に長く延びる。東は1197・1198水田に、北は1192水田に、西は1195水田に接する。南は削平を受けている。面積130㎡以上の水田であったと思われる。1198水田の北の隅からこの水田に幅0.15～0.20m、深さ0.04mの溝が流れ込んでいる。水口と思われる。地盤高はT.P.25.00mを測る。

1197水田

2H-5～7i～j、2I-6～7aにおいて検出した。1189水田の南側に造成された東西22.0m、南北12.0m、面積260.0㎡程度の水田である。南東隅には小規模な1200水田が造成されている。北は188溝に、南は旧地形の斜面の等高線に沿って北にやや張り出す形の240畦畔によって区切られ、また東は139畦畔に、西は一段高い1196水田により限られる。地盤高はT.P.24.80～25.00mを測る。

1198水田

2I-5～7a～bにおいて検出した。北辺、南辺ともに旧地形の斜面の等高線に沿って北に張り出す形の畦畔(240・202)で画される。東は139畦畔、西は一段高い1242水田で限られる。東西20.0m、南北13.0m、面積260㎡である。地盤高はT.P.25.00～25.20mを測る。

1203水田

2I-2～3cにおいて検出した。西は1204水田、南は1238水田に接し、北は092溝に限られる水田である。東は調査区外に及んでいる。面積は30.0㎡以上である。地盤高はT.P.25.9mを測る。

1204水田

2I-3c～dにおいて検出した。東は1203水田、西は1205・1235水田に接し、南から突出する1237水田の北東角に延びる不整形な水田である。南北方向の鋤溝の痕跡が顕著である。面積は33.0㎡程度である。南端に077水溜土坑が掘り込まれている。東辺北寄りに水口と思われる溝があり、1235水田の東辺に勾配をつけて落とし込んでいる。地盤高はT.P.25.60～25.70mを測る。

1205水田

2I-3～5c～dにおいて検出した。北は帯状に痕跡を留める241畦畔、南は地下げにより生じた段差、東は139畦畔の南への延長上にある段差、西は091井戸の西にかろうじて検出した南北方向の鋤溝群により画される。東西22.0m、南北10.0m、面積220.0㎡である。地盤高はT.P.25.40～25.50mを測る。南東隅に079井戸、それを切って078井戸、さらに204水田との境には077水溜土坑が、また南西隅に091井戸が掘り込まれている。

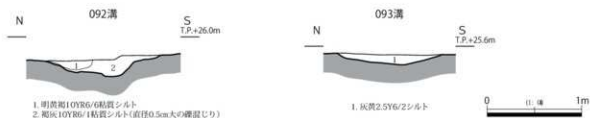


図 31 092・093 溝断面図

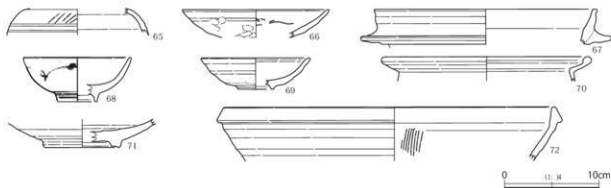


図 32 溝・溝状遺構出土遺物実測図

1 2 2 5 水田

3H-6f～jにおいて検出した。東西幅 5.0～7.0m、南西～北東方向に延びる水田で、東側は 107 畦畔によって画される。南端では東西に画する畦畔の一部もみられる。3H-6g 付近では西から中位段丘裾が一部張り出している。219 水路に向かって緩斜面をなしていた段丘の裾を水平に削平して等高線に沿う狭い水田を造成したと考えられる。面積は 117.0 m²以上であった。地盤高は T.P.24.70～25.00m を測り、北へやや低くなる。

1 2 2 6 水田

3H-5f～6jにおいて検出した。1225 水田に平行してその東側に、219 水路までの東西幅 5.0～8.0m を水田としたものである。219 水路の西肩に沿って 115 畦畔が通り、これが水田の東辺を画し、南端の東西は 004 畦畔により画されている。その東西畦畔際に 108 土坑が掘り込まれている。面積は 329.0 m²以上である。地盤高は T.P.24.80～24.90m で、北へやや低い。

1 2 2 7 水田

3I-6a～cにおいて検出した。北側を 004 畦畔に限られ、001 溝以西に広がる水田である。ただし 107 畦畔が 004 畦畔と交差してさらに南に延びるその一部が 3I-6a 北西隅に見られるので、1226 水田と同様、北東～南西方向に長い形となるようである。面積 80.0 m²以上である。地盤高は T.P.25.00m を測る。

1 2 2 8 水田

3I-3～6c～dにおいて検出した。旧河道の堆積土を利用した水田である。008 畦畔によって 1229 水田と区切られ、西は北から延びる 005 畦畔に、東は旧河道の東肩に限られる。全面に鋤溝の痕跡が縞状に変色して認められる。面積 432.0 m²以上の広い水田である。地盤高は T.P.24.90m を測る。

1 2 2 9 水田

3I-2～6a～cにおいて検出した。1128 水田と同じく旧河道の堆積土を利用し、北は 004 畦畔、南は 008 畦畔、西は 005 畦畔そして東は北東～南西方向に延びる旧河道の東肩に限られる面積 1,015.0

mの水田である。全面に鋤溝の痕跡が縞状に変色して認められる。地盤高はT.P.24.90mを測る。

1 2 3 0 水田

3H-1～3f～i, 2H-8～10f～hにおいて検出した。旧河道の堆積土を利用した水田である。南は219水路東西部分の北辺に、西は同水路の東辺に限られる。東限は旧河道の東肩にあたる。北部は職業訓練校の地下室部分で大きく攪乱されているが、この攪乱部分を越えて樋野ヶ池南端まで広がるのが5区(北)調査区で確認される。おそらくこの池との区切りとなる土手がある筈で、同区で検出した142井戸はこの水田の北辺に接して掘り込まれたものであろう。地盤高はT.P.24.70mを測る。

1 2 3 1 水田

2H-8～10g～jにおいて検出した。1230水田の東側の旧河道の東肩の段差を利用した北東～南西方向の不整形で狭い水田である。面積は100.0㎡足らずである。地盤高はT.P.24.50mを測る。

1 2 3 2 水田

2H-6f～hにおいて検出した。旧河道東肩から続く段差を利用し、造成された水田である。西は126畦畔に、また東は139畦畔の北の延長上にあたる段差で画された東西幅2.0～3.0mの細長い水田である。南は013畦畔に画される。北は調査区外に及ぶ。面積は60.0㎡以上になる。地盤高はT.P.24.70mを測る。

1 2 3 3 水田

2H-2～5g～j, 2I-3～4aにおいて検出した。南は1234水田との境の段差、西は1095、1187、1186、1185の水田との境の段差により画される。東は調査区外に及んでいる。北の境は2H-3～5e～fの現代の掘り下げにより不明である。南東隅付近に094、106、135の井戸が掘り込まれ、また東の調査区壁沿いの2H-3h北東部にも131井戸があり、井戸が水田区画の縁辺に位置する傾向からすると、東西は24.0m程度と考えられる。鋤溝の痕跡が顕著である。面積は900.0㎡以上である。地盤高はT.P.25.20～25.30mを測る。

1 2 3 4 水田

2I-2～4a～b, 1H-7～10i～j, 2h-1j, 1I-8～10a～bで検出した。南は092溝で、西は206溝で、北は1233水田との境の段差で限られる。東は5区(東)に入るが、ここでは削平が著しいため、この水田が同区全体に拡がっていたかどうか不明である。面積は230.0㎡以上である。地盤高はT.P.25.60mを測る。

1 2 3 5 水田

2I-4～5b～cにおいて検出した。北を202畦畔、南を241畦畔、東を139畦畔の南への延長上にある段差、西をかううじて残る南北方向の鋤溝群に画される東西22.0m、南北12.0m、面積260.0㎡程度の水田である。地盤高はT.P.25.20～25.40mを測る。

1 2 3 6 水田

2H-7～8f～iにおいて検出した。1231水田と同じく旧河道東肩の段差を利用した水田で、125畦畔と126畦畔によって東西が、013畦畔によって南が画される。北は調査区外に及んでいる。面積は180.0㎡以上になる。地盤高はT.P.24.40～24.50mを測る。

1 2 3 7 水田

2I-3～5dにおいて検出した。北は1205水田との境の段差により、また東は223畦畔により画される水田である。西および南は調査区外に及んでいる。鋤溝の痕跡が顕著である。面積は52.0㎡以上

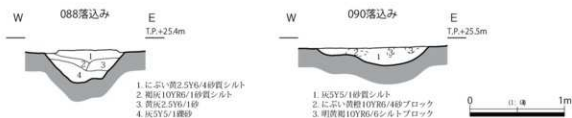


図 33 088・090 落とし断面図

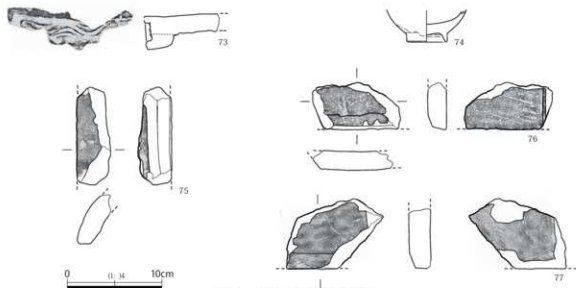


図 34 落とし出土遺物実測図

になる。地盤高は T.P.25.70m を測る。

1 2 3 8 水田

2I-2 ~ 3c ~ d において検出した。北は 1203 水田との間の段差、東は 1204 水田との段差、南西は 223 畦畔により限られ、東および南は調査区外に及んでいる。やや深い鋤溝の痕跡が認められた。面積は 50.0 m² 以上である。地盤高は T.P.25.70m を測る。

畦畔 (図 28 ~ 29)

本調査区の場合、旧河道と段丘という地形の違いから、1・2 区では南西から北東へ、3・4 区では南東から北西へ低くなる二方向の制約が生じている。それを克服して、できる限り収量を上げる水田に改変するために、旧河道部分は盛土して、段丘部分は逆に削って平坦面を確保している。このような開墾を省力的に行うにはまず幹線ともいべき大畦畔、次いでそれを細分する小畦畔が設けられる。ここでは便宜的に大畦畔と小畦畔に分けて説明する。

大畦畔 旧河道部分では 1230 水田を画する西辺の 115・005 畦畔、東辺の 010 畦畔がある。010 畦畔の幅は広く、高さもあり、盛土も丁寧で、地山を若干掘り込んだ上に何層も盛り上げている。これは出水時の旧河道の増水、あるいは樋野ヶ池の貯水の水位上昇に伴う水対策も考慮したものであろう。115・005 畦畔の西側には等高線に沿う形で 107 畦畔があり、1225 水田と 1226 水田を分かち、125 畦畔は旧河道東側の傾斜面を 1231・1236 水田として画し、013 畦畔は段丘部分の裾を画して、南側一帯の水田を区切っている。これらの畦畔によって旧河道部分とその東西に広がる段丘部分の傾斜面の耕地区画が整えられている。

107 畦畔の断面には段丘を削り下げた最初の畦畔の形が現れている。この畦畔の西側には 1225 水田を造成する際に削り下げられた段丘裾の一部が残っている。東側段丘部分では南東から北西へ、これも樋野ヶ池の浮島へのびる段丘尾根の等高線に沿うと考えられる 139・223 畦畔がある。139 畦畔では西に低くなる地山の粗砂や砂礫が緩傾斜をなし、その上に 20cm 程度の盛土をして畦畔としている。その西 32 m で同方向に延びる 140 畦畔も段丘部分の大畦畔とみられる。202 畦畔は後世の削平により隆起状態では検出されなかったが、この付近一帯は調査区全体の中で最も地盤が高く地山層が隆起するので、おそらく地山を削り出したものと考えられる。

小畦畔 上記の概ね南北方向につけられた大畦畔の区画内を東西に区切る畦畔である。これらの畦畔によって南から北に傾斜する段状の水田面が画されている。旧河道部分では 004・008 畦畔があり、段丘部分では南から 241・202・240 畦畔などがある。

畦畔出土遺物 (図 30)

1231 水田と 1236 水田を分かち 125 畦畔の盛土中より瓦器、土師質土器、陶磁器、瓦が出土した。58 は瓦器底部片で、小さく低い高台がつき、内底面に粗いヘラミガキを施す。尾上編年Ⅲ末～Ⅳ前半にあたり、13 世紀前半～中頃とみられる。59 は土師質小皿の摩滅した破片である。60、61 は波佐見窯系染付碗で 17 世紀代の器である。62 は京焼系碗で 19 世紀代と考えられる。63 は径 6.0cm の菊丸文瓦当をもつ近世の化粧瓦である。126 畦畔の盛土では備前播鉢の口縁部の破片が出土した。64 は口縁下内面に丸みのある段を有し、外帯に 3 条の凹線を施す。乗岡編年の近世 2 期、17 世紀中頃～後葉と考えられる。

溝 (図 31・32)

001 溝

3I-6a～d、3H-5j において検出した。1229 水田と 1227 水田とを画する 005 畦畔の西辺に沿って南西～北東方向に流れる溝で、北端は 219 水路南西隅に流れ込む。南端では幅 0.9m、深さ 0.4m、北端では幅 1.7m、深さ 0.5m を測る。底面は南端では T.P.24.58m、北端では T.P.24.48m で、219 水路に落ちる部分では T.P.24.3m である。この溝は、1229 水田の北辺を限る東西方向の 004 畦畔より上位に堆積する旧耕土層より掘り込まれ、職業訓練校造成前の昭和 35 年 (1960) 作成地形図に描かれている。3I-6a～d にかかる範囲で、埋土中より中世～近代の平瓦、丸瓦、陶磁器、土管、土師器、須恵器、瓦器の破片が出土した。

出土遺物 以下のものについて図化した。65 は長頸壺の体部にみられる斜行文が施された須恵器片である。66 は摩滅した瓦器片である。外面指オサエ、内面に粗いミガキを施す。67 は土師質羽釜で水平の鐙が付く。68 は 18 世紀代の波佐見窯系染付碗で、見込みは蛇ノ目軸ハギ、畳付は露胎である。69 は備前焼茶碗と考えられる。内面全体と体部外面に淡灰緑色釉がかかる。70 は体部から短くのびる口縁部が屈曲して垂直に立ち上がり丸くおさめる器で、全体に鉄軸がかかる。18 世紀代京焼系土鍋と考えられる。71 は 17 世紀初頭の唐津窯系皿である。内面は淡灰緑色釉、外面は露胎である。72 は備前播鉢で口縁端部上方の角がやや突出する。内面には 8～9 条単位のスリメを施す。胎土には砂粒が多い。乗岡編年の中世 4 期にあたり、14 世紀中頃～15 世紀前半と思われる。

092・206 溝

2I-2～4b～c において検出した一連の溝である。092 溝は 1234 水田と 1203 水田を画する南西～

北東方向の溝で、2I-3b 南西で北西へ方向を変え、1234 水田と 1198・1235 水田を画する 206 溝に続き、その北端は 1095 水田の南西隅へ落とし込んでいる。092 溝では幅 1.00m、深さ 0.11～0.24m、206 溝では幅 0.5m、深さ 0.08～0.10m を測る。溝底面は 092 溝東端で T.P.25.59m、206 溝北端では T.P.25.19m あり、比高は 0.40m となる。出土遺物はみられなかった。

093 溝

2I-3～4a において検出した。周囲の鋤溝に比べて幅広い溝である。1234 水田の北西隅にあたり、その北辺に沿う。幅 0.7～1.0m、深さ 0.07～0.08m で、底面は T.P.25.40～25.43m と東側がわずかに高い。埋土は灰黄色シルトで、出土遺物はみられなかった。

113 溝

2H-8～10h～j において検出した。013 畦畔の西側に平行する形で、南西～北東方向に延びる溝である。南西端は 010 畦畔に、北東端は 125 畦畔に切られる。幅 0.4～0.7m、深さは 0.14～0.24m を測る。南西端は 219 水路に流し込まれている。出土遺物はみられなかった。

116 溝

3H-1i～j、2H-10h～i、3I-1～2a において検出した。010 畦畔の西辺に沿って南西～北東に延びる溝である。南西端は 219 水路東西部分の北東隅に落とし込んでいる。幅 0.7～1.2m、深さ 0.1～0.2m を測る。出土遺物はみられなかった。

182 溝

3I-3～6c～d において検出した。1229 水田と 1228 水田とを分かť 008 畦畔北側の溝で、008 畦畔の北辺に沿って東西 12.0m 残っていた。中央付近で幅 0.7m、深さ 0.05m を測る。出土遺物はみられなかった。

土坑

108 土坑

3H-6j において検出した。107 畦畔と 004 畦畔が交差する東に接する位置で、001 溝の西肩に掘り込まれている。径 0.95m、深さ 0.38m の平面円形の土坑である。埋土は耕作土の粘土とこの付近の地山のブロックが混じり、一気に埋めたと考えられる。出土遺物はなかった。

129 土坑

2H-4f において検出した。長軸 0.96m、短軸 0.50m、深さ 0.15m の長楕円形土坑である。埋土は炭混じりのシルトに地山ブロックが混在する。3.0～4.0cm 大の焼土塊が 2 片出土している。

150 土坑

2H-6h において検出した。139 畦畔の北西への延長上にあたる。径 0.55m、深さ 0.12m の円形の掘り込みである。埋土に炭の混じる土層が識別される。耕作にともなう焚き火跡のようなものを埋め戻した可能性がある。出土遺物はみられなかった。

211 土坑

2H-5g において検出した。1186 水田と 1233 水田との境の段差部分に掘り込まれている。長軸 0.70m、短軸 0.59m、深さ 0.16m の楕円形土坑である。埋土は Y=40.150 ライン南北断面図中の第 11 層である。出土遺物はみられなかった。

218 土坑

2H-5iにおいて検出した。1187・1095・1189・1197の4枚の水田が接する位置に掘り込まれている。長軸1.00m、短軸0.54m、深さ0.22mの楕円形土坑である。埋土は埋土Y=-40.150ライン南北断面図(図12)中の第18層である。出土遺物はみられなかった。

落ち込み(図33・34)

088落ち込み

2I-7cで検出した。短軸0.85m、長軸2.10m、深さ0.10～0.35を測る不定形な落ち込みで、凹凸のある底面である。底面には流跡と思われる礫混じりの砂が溜まった後、旧耕土と思われるシルトが覆う。長軸が東側の1235水田の方向と揃っているので、南東～北西方向に延びる旧地形の傾斜を利用した耕地造成から残った窪みであろう。埋土より軒平瓦が出土した。

出土遺物 73は軒平瓦で、瓦当幅3.5cm、外区の長さ(上)0.6cm、外区の長さ(下)0.7～0.8cm、残存する脇区左の長さ0.6cmで周縁の幅と大差ない。文様区の長さは2.1cm、瓦当厚みは2.5cm、周縁高0.5cm、体部の厚みは1.8～1.9cmを測る。文様は水波文を描く。平瓦広端部に段頸を貼り付け、断面は鈍角をなす。正面左側に剥がれた接合部が観察される。凹面は布目の跡を縦方向にナデ消すところがある。凸面の頸接合部付近は横方向に削り、その後ナデている。15～16世紀の年代を与えられる。

090落ち込み

2I-6dで検出した。深さ0.20m、南北3.10m、東西2.50mに拡がる不定形な落ち込みで、西側一带に掘り込まれた攪乱坑と平面的には大差ないが、それらと違い、現耕土や汚れた土ではなく旧耕土のシルトに地山のブロックが混じる。耕地造成のさいに旧地形の窪みを埋めたものと考えられる。埋土より土師器、瓦質土器、陶器、瓦の破片が出土した。

出土遺物 74は17世紀代の唐津窯系碗である。内面、体部外面に淡灰緑色釉がかかり、それ以外は露胎である。75は丸瓦である。凹面に糸切りによる斜めの弧状の筋が残る。凸面はナデを施す。76、77は平瓦。76は側面を面取りする。凸面に板状工具による叩き痕がある。また側面に直交する形で凸型台からはみだした粘土痕がみられる。77は側面を面取りし、凹面、凸面ともにナデ調整である。

109落ち込み

3H-5gにおいて検出した。東西1.50m、南北2.40m、深さ0.10～0.67mの平面が不整な楕円形である。埋土は底面にレンズ状に粗砂が溜まり、その上を粘土が覆う。自然な埋没状況とみられる。上層より近世の丸瓦片が出土している。

第3節 第2面の遺構と遺物(図35)

井戸(図36～37)

071井戸

3I-2a区で検出した。第1面の219水路の南辺を画する004畦畔と010畦畔が接する位置で、これらの畦畔の土盛り以前に掘り込まれ、また219水路の東西部分の深く掘り下げられた溜池部分に流れ込む溝070を切っている。したがってここでの切り合い関係は、古い順から219水路東西部分溜池・070溝→071井戸→219水路を画する004・010畦畔となる。職業訓練校建物基礎支柱が打ち込まれて、断面西側第1層を攪乱している。平面は径2.5mのほぼ円形で、検出面より深さ0.5～0.6mでやや窄まり、1.0m付近でやや胴張りとなるが、地盤の東からの圧迫によって歪な断面を呈している。検



图 35 第 2 面遺構全体図

出面より2.3mで平たい底面となる。第6層下半に至って出水を見る。掘り込まれている地山は西から東へ傾斜する粗砂、礫の上にシルトが堆積する。埋土は、深さ1.5m以下が同じ土質の粗砂、粘土の互層で、底面より粘土→粗砂→粘土→粗砂の堆積である。その上を覆う第7層は本調査区の地山のひとつである段丘礫層を削った土で埋めている。周辺を開墾して耕地化とする際に、削った土で一気に埋めたとと思われる。出土遺物はみられなかった。

072井戸

3I-1a区で検出した。071井戸の南東、070溝の東に接し、東側の段丘礫層が北西に下がる傾斜変換線の位置で検出された。184・212畦畔を切っている。径1.3～1.5mの不整な円形である。掘り込みはほぼ垂直で、検出面より2.0mの細砂・粗砂まで達して底面となるが、出水と崩落が激しく掘り切れなかった。検出面より0.3～0.4mまでは層厚5.0～10.0cmの最終的な埋め戻し土である耕土混じりの粘土が観察される。出土遺物はみられなかった。

143井戸

2H-8～9g～hにおいて検出した。写真撮影中に崩壊したため断面実測はできなかった。平面は径8.0～9.0mの南北に長い不整な楕円形で、-1.0mまでラップ状に掘り込み、以下は径3.0～3.5mの楕円形に掘り下げている。-2.7mまで掘り下げたが激しい湧水で井戸底には達せられなかった。この井戸には南西から124溝が、北西からは152溝、156溝、144溝が流れ込み、155溝は北西の旧河道の東肩となる低所へ流れ落ちている。

147井戸

2H-8gにおいて検出した。西側の143井戸に小溝が流れ込んでいる。径2.5～2.9mの東西にやや長い不整な楕円形で、検出面より-2.4mまで掘り下げたが井戸底には達せられなかった。ボーリングで探したが、底面はさらに1.0m以上の深さになるものと思われる。掘り方は北壁が掘り込み面から底面に向かって徐々に傾斜するが、南壁は検出面より-1.0m前後までラップ状に開き、以下はほぼ垂直な壁面をなす。埋土は砂混じりの灰色粘土で写真撮影中に崩壊したため、埋土の断面図を作成できなかった。出土遺物はみられなかった。

水田 (図38)

段丘にあたる3、4調査区では第1面検出の水田の下で位置や方向を同じくする下層の水田もしくは水田造成痕と思われる遺構が認められた。便宜的に水田として説明する。

2095水田

第1面の1095水田の下で検出された東西2.9～3.6m、南北7.8～8.7mの小規模な水田である。深さは0.15m前後に掘り下げている。南辺には第1面の087井戸の掘り込みによる攪乱がある。

2190水田

第1面の1190水田の造成痕と思われる。北辺を南北下幅2.2m、上幅1.3～1.5m、高さ0.17～0.20mに土手状に削り出した東西の帯状の隆起である。東端は第1面の1137水田の掘り込みにより断ち切られている。また南側は2195水田造成痕の北側に地下げされた南北幅0.8～1.3m、高さ0.1m前後で、東西約3.5mの段がある。

2195水田

2190水田造成痕と一連のものである。西から東にかけて高さ約0.1mの2つの段差がある。東片は

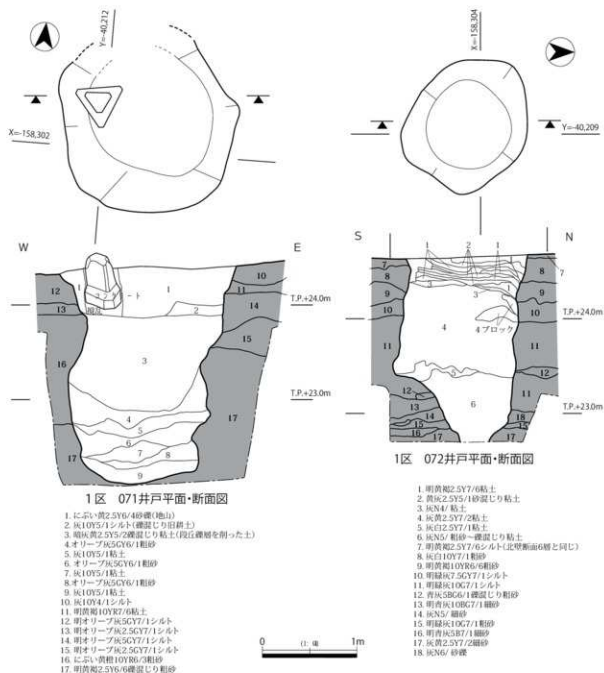


図 36 071・072 井戸平面・断面図

2195 水田造成痕から続く東西幅 1.5 ~ 1.8m に带状に地下げしている。

2 1 9 7 水田

第 1 面 1197 水田の造成痕である。同水田の南西隅で深さ約 0.1m を掘り下げ、北東にかけて平坦にすることで旧地形の起伏を解消している。

2 1 9 8 水田

第 1 面の 1198 水田造成痕である。西辺に深さ約 0.15m の地下げの肩がみられる。東側には 2095 水田の西辺に接して不定形に残る約 0.15m の高まりがある。

2 2 3 5 水田

第 1 面の 1235 水田の造成痕である。西側に深さ約 0.1m の地下げの肩が南北に連れる。それより東側に 15.0 ~ 17.0m 隔てて、東西幅 6.0 ~ 7.0m、南北 20.0m 前後にわたり、高さ 0.08 ~ 0.20m の段

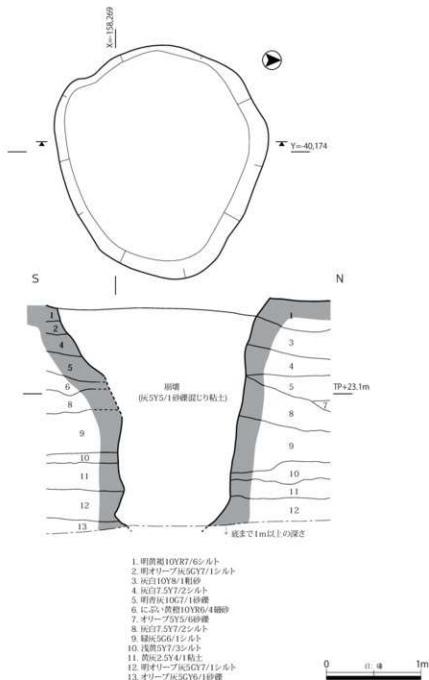


図 37 147 井戸平面・断面図

が残る。その北半部は南半部より 10.0cm ほど低く地下げされている。段丘のこのように残る段差は旧地形の等高線に沿うものと考えられる。

畦畔

212・213・214 畦畔

旧河道東肩の傾斜変換ラインに沿って造成された一連の畦畔である。212・213 畦畔は第 1 面の 013 畦畔の下で削り出されている。下幅 0.05～0.08m、214 畦畔は 213 畦畔の西端で南北にとりつき、南東から北西に延びる 2197・2198 水田造成痕などの方向と同じである。212 畦畔の西端は 070 溝、072 井戸により断ち切られている。

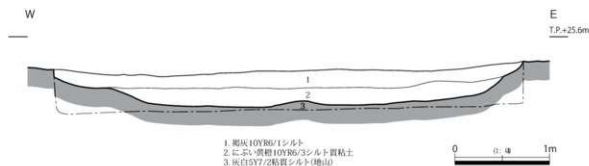


図38 2095 水田断面図



図39 070 溝断面図

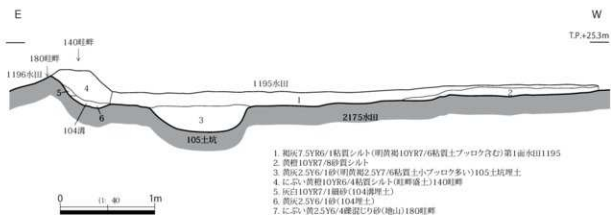


図40 104 溝・105 土坑ほか断面図



図41 溝・溝状遺構出土遺物実測図

溝

070 溝 (図39)

3I-2aにおいて検出した。第1面の1216水田と1244水田の境の下に位置する。北は071井戸で断ち切られている。幅は0.5～1.2mで、北側は径2.0mの円形となる。校舎のコンクリート基礎杭が打設された影響で円形に膨張したものである。深さは0.4～0.6mで、底面地盤高は南でT.P.24.8m、北で23.85mを測る。この箇所での切り合い関係は、070 溝→071 井戸→004 畦畔となる。第1面の

219 水路が最終的に 004 畦畔によって画され整備される以前に、南から北へ落とした溝であろう。

104 溝 (図 40)

2I-8a において検出した。2195 水田の東辺に沿う幅 0.1～0.3m、深さ 0.04～0.06m の溝で、北端は 2190 水田の南端に及んでいる。造成時の掘り込みに伴うものかもしれない。第 1 面の 140 畦畔の下に位置し、第 2 面の 2175 水田の西辺に沿っている。埋土より土師質羽釜片、須恵質掘鉢片が出土した。しかし、これらの遺物は遺構の時期を示すものではなく造成時の混入によるものとみられる。

出土遺物

78 は口縁部外面に凹状の段をめぐらし、水平の鈎がつく羽釜である。15 世紀代と考えられる。79 は東播系鉢で口縁端部を肥厚させる形態で、第Ⅲ期第 3 段階 (14 世紀後半) にあたる。

溝状窪み (図 41)

西側の旧河床面にみられる流跡の一種である。渦を巻いたような状態や北流の状態を示すものなど様々である。多くは灰色砂が充満しているが、砂礫を埋土とするものもある。いずれにしても河床を洗った流水の痕跡である。それらの中で以下の遺構から若干の出土遺物があった。

025 溝状窪み

3I-6c～d 付近を中心に渦巻いたような状態で検出される不定形な窪みである。深さ 0.16～0.29m と凹凸がある。埋土は灰色砂で、土師器片 1 点、須恵器甕体部片 1 点が出土している。

060 溝状窪み

3I-6b～c 付近にみられる窪みである。深さ 0.09～0.27m で、埋土は灰色砂である。土師器片 2 点が出土し、1 点は口縁端部が短く外反して丸く終える坏身片である (80)。

土坑 (図 42・43)

069 土坑

3I-6a 北東部で検出した。旧河道の西岸に人為的に掘り込まれた径 1.70m、深さ 0.35m の円形土坑である。後世の水田化によって削平され、底部のみ残った状態である。埋土は 5 層に分かれ、底面には厚さ 0.12m の炭がレンズ状に溜まっている。須恵器甕体部の破片が、第 1～3 層では 2 片、第 4～5 層では同体部片 17 片、口縁部片 1 片、土師器片 3 片が出土した。須恵器は甕ほぼ 1 個体分であるが、土師器片は細片のため器種については不明である。第 1～5 層にかけて出土した甕の破片は同一個体である。

出土遺物

81 は卵形の体部にくの字形に外反する口縁部がつく。口縁端部は上端に面をなし水平である。体部外面は平行タタキの後ナデ、内面は同心円文の当て板痕をとどめる。口径 12.0cm、器高 31.0cm に復原される。平城Ⅱ～Ⅲに相当し、8 世紀前半～中頃の器と考えられる。

101 土坑

2I-6c で検出された小土坑である。

102 土坑

2I-6d の 101 土坑の南側で検出した。2235 水田の南西隅に掘り込まれている。長軸 1.1m、短軸 0.3m、深さ 0.45～0.50m である。埋土中より瓦質掘鉢片が出土した。

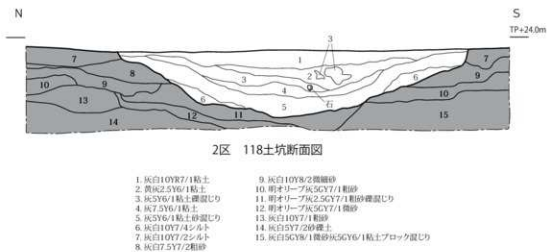
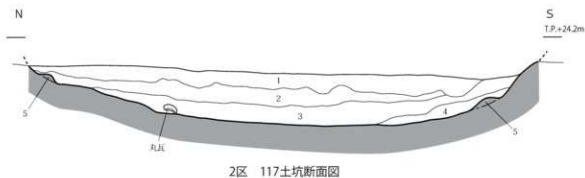
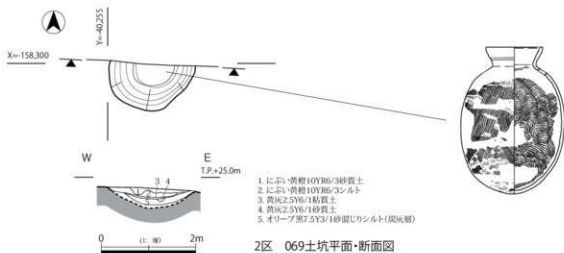


図 42 069・117・118 土坑平面・断面図

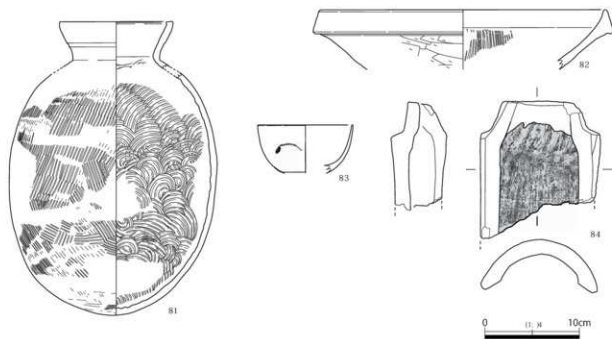


図43 069・117・118土坑出土遺物実測図

出土遺物

82は口縁部が内傾し、上下に拡張する。内面には4～5本のスリメを入れる。体部外面は横方向にヘラケズリを重ねる。14世紀後半～15世紀の器と考えられる。

117土坑

3H-1iにおいて検出した。118土坑と同様に第1面より1層下の面(X=-158.276ライン沿い断面の第44・53層上面)より掘り込まれている。東西12.00m、南北5.50～6.10mの不整形な長方形で、主軸は南東～北西に延びる。東辺は第1面検出の219水路の東肩斜面に接し、長軸方向は同水路東西部分(3H-1～4j)の底面と同じである。規模、方向、位置関係から第1面検出の219水路に先行する遺構と考えられる。検出面からの深さは0.55mで、埋土は4層に区分できる。第1層はこの土坑を埋めた砂礫土であり、第2層以下は漸次埋没していった際の粘土や砂である。第2層より磁器碗、第3層より丸瓦片が出土している。

出土遺物

83は18世紀代の波佐見窯系染付碗である。84の丸瓦は胴部～玉縁の破片で、凸面は縦方向にいていねいにナデ、凹面は胴部から玉縁にかけて面取りする。面取りは凸面側縁にも行われている。凹面には16世紀第4四半期にみられるコビキBとは異なる、横方向の浅く細い筋状の粘土切り離しの痕跡が認められる。

118土坑

3H-2h～iにおいて検出した。本来、この遺構の掘り込みは第1面より1層下の面(X=-158.276ライン断面の第44・53層上面)であるが、第2面で検出することとした。検出面では径3.70m、深さ0.70mで、埋土は粘土がレンズ状に堆積する。出土遺物はみられなかった。

河床

1区西半から2区のほぼ全域、そして一部は4区の北西隅において検出された旧河道跡で、南西か

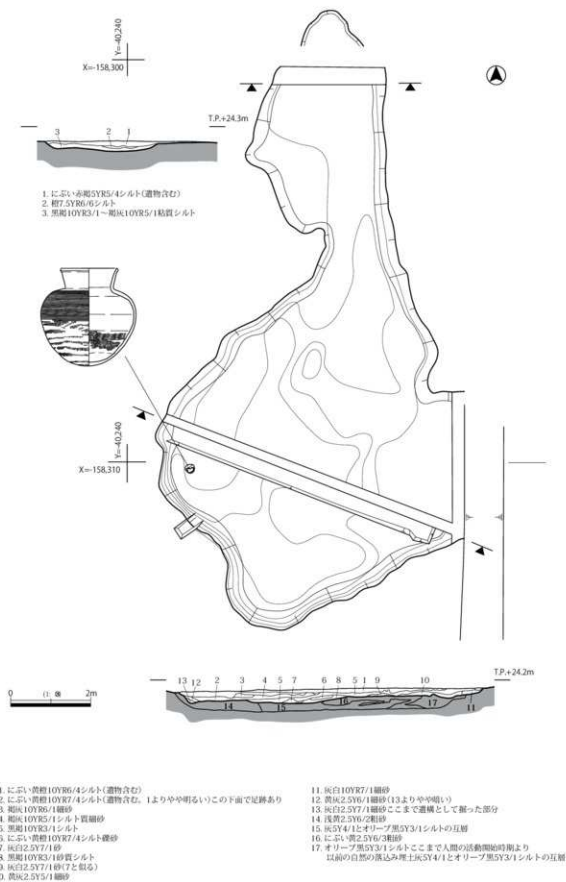
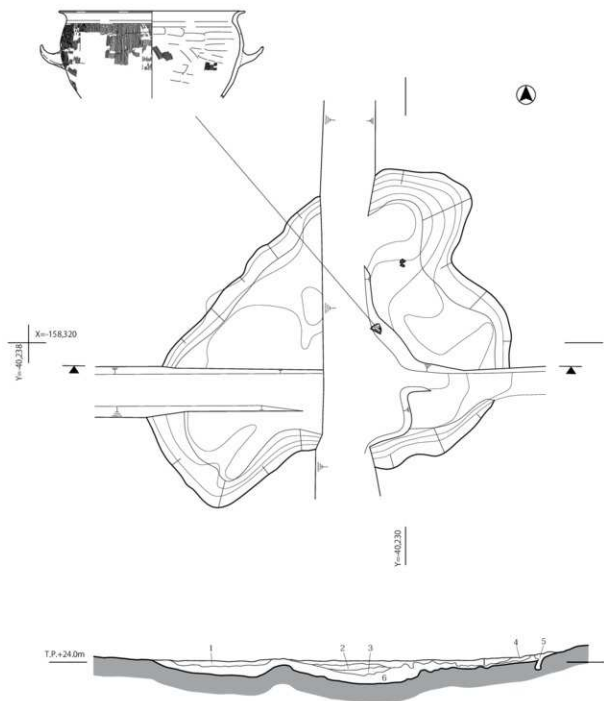


図44 006 落込み平面・断面図



1. 灰オリーブSY5/3極粗砂～粗砂(ブロッコ土・礫多く含む、遺物含む)
2. 灰SY4/1粘土(遺物含む)
3. 黄灰2.SY6/1細砂
4. 灰オリーブSY5/2粗砂
5. 灰オリーブ灰2.SY7/2細砂
6. 灰SY4/1細砂混じラシムト(層状が良く部分的な暗色化層が)

0 1 2m

図45 007 落込み平面・断面図

ら北東に延びる。幅は東西 35.0～60.0m である。東西兩岸の北端は、現在の樋野ヶ池南岸が南に約 20.0m 奥まった部分にあたり、東岸は岸から約 100m 北に延びる岬状の島の先端に連なる。島の東側では大塚山古墳との間を南東から北西へかけて阿湯戸池、上ノ池、今池、小治ヶ池、樋野ヶ池にみられるように、別の旧河道の痕跡があり、池中の島の先端が本調査区の旧河道との合流点であったとみられる。河中央の地盤高は 1 区南端で T.P.24.4m、1 区と 2 区境付近で T.P.23.9m、2 区北端で T.P.23.6m を測る。河床には以下に挙げる落ち込みをはじめとする流跡がある。

落ち込み (図 44～46)

旧河床面において検出した流跡の一種で、流れによって深く刻み込まれる河中央部に点在する。人為的に掘り込まれた遺構ではないが、落ち込みが埋没する過程で遺物を含むものがあり、ここでは出土遺物を含むものについて規模、形状、遺物の出土状態に触れる。

006 落ち込み

3I-4a～b において検出した。南北 15.0m、東西 7.7m の南北に長い不定形な落ち込みである。深さは最深部で 0.36m を測る。旧河道の流水堆積による埋没過程で落ち込みとなったもので、人為的に掘り込んだ形跡はみられない。埋土は 3 層に区分され、第 1 層より須恵器甕、坏蓋、土師器が出土している。甕は一個体分で、南西部の 3I-4a～b 付近で、落ち込みの肩部から中央部にかけて放り込まれたような

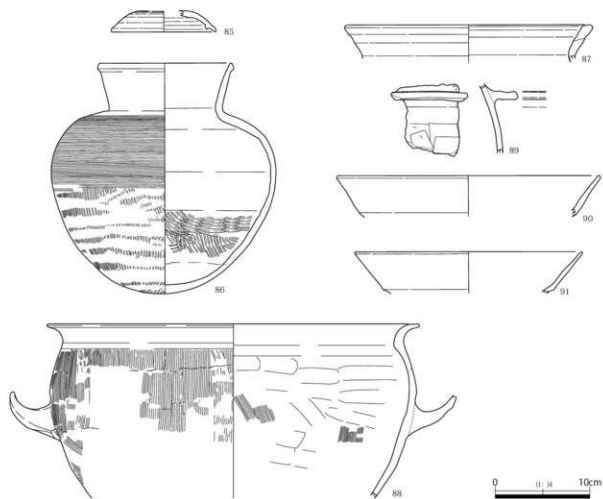


図 46 落ち込み出土遺物実測図

状態で出土している。

出土遺物

85は須恵器環蓋の破片で、内面のカエリが口縁端部のラインより上にくる。天井部回転ヘラケズリを施す。86はやや肩の張る球形の体部に外反する口縁部がつく甕で、口縁端部が肥厚し、内側に浅い凹面をなす。体部外面は上半にカキメ、下半に平行タタキを施す。内面は円弧タタキの後スリケシ調整。87は短く外反する口縁部をもつ甕である。以上の土器は陶器Ⅲ型式2～3段階、7世紀後半と考えられる。

007落込み

3I-3～4b～cにおいて検出した。006落込みの南東に接し、南北方向に長い不定形な落込みである。006落込みと同様な掘り込みとは考えられない。深さは0.3mを測る。埋土は13層に区分され、第1層から2層にかけて土師器把手付鍋が出土した。3I-3b～4cの落込み南と北東の肩部より中央へ放り込まれた状態で破片が散在していた。

出土遺物

88は土師器把手付鍋である。口径39.0cm、残存器高18.4cm。体部に短くくの字形に外反する口縁部が続く。体部最大径下に上向きに把手が付く。口縁部内外面をヨコナデ、体部外面は縦方向のハケメ、内面はハケメの後、横方向に強くナデる。飛鳥Ⅳに相当し、7世紀第4四半期とみられる。

031落込み

3I-5cにおいて検出した。径1.20～1.60mの不整円形で、深さ0.05m、埋土は暗灰色砂質土で、土師器小片が1点出土している。

046落込み

3I-6dにおいて検出した。径1.70～2.00mの楕円形で、深さは0.25m、埋土は3層に分けられるが、砂や砂礫で、激しい流水による堆積状況を示している。瓦質羽釜鈔部片が2点出土している。

出土遺物

89は鈔部の破片である。球形の体部から内傾して立ち上がる口縁部に水平の鈔がつく形態である。14～15世紀と思われる。

080落込み

3I-5dにおいて検出した。径1.80～2.00mの不整円形で、深さ0.15～0.22m、埋土は灰色砂で鉄分が沈着している。須恵器甕もしくは壺の口縁部片が1点出土している。

119～123落込み

3H-2g～3gにおいて検出した落込み群である。この地点は旧河道の河中央にあたる。地盤高ではT.P.23.4～23.6mを測り、流水によって周辺より深く河床が刻まれた結果生じた不定形な落ち込みである。深さは0.03～0.18m、埋土は基本層序のところて述べたX層で、これは006・007落込みの遺物出土層と同じである。これらの落込みのうち、119、120で摩滅著しい古式土師器片が出土している。

出土遺物

90は119落込み、91は120落込みから出土した。いずれも調整は不明であるが、外反する口縁部で庄内式二重口縁壺の加飾が施されなくなる頃の器ではないかと思われる。

第4節 包含層の出土遺物

IV層出土遺物（図47～50）

土師器 92は口径6.5cm前後の外反する口縁部をもつ土師器甕である。摩滅激しく調整は不明であるが、形状から8世紀代と考えられる。93は土師器鍋の角状把手である。挿入手法によるもので7世紀後半～8世紀前半と考えられる。

須恵器 94は坯蓋の天井部の破片である。ヘラケズリを施す。短い直線のヘラ記号がある。95は坯蓋で口縁端部をわずかに下方へ屈曲させる。内外面回転ナデによる調整である。96は坯蓋の擬宝珠様つまみである。低く扁平で中央が平坦である。陶器Ⅳ型式に相当する。97は受部が短くやや上向きで、たちあがりは端部を丸く仕上げている。陶器Ⅱ型式1～3段階にあたると思われる。98は坯身底部で、陶器Ⅳ型式1～2段階にあたるかと思われる。

瓦器 99、100は椀の体部～口縁部である。

瓦質土器 101～104はいずれも段をもつ口縁部に水平に鈎のつく羽釜で15～16世紀と考えられる。

土師質土器 105は羽釜、106は鉢で摩滅が激しい。いずれも15世紀頃のものと考えられる。107は播鉢で口縁端部上面に凹線がめぐる。内面には肥厚帯直下から4条/cmのスリメが入られている。

ミニチュア土製品 108は多重塔の残欠で、残存長3.5cm、屋根の厚み1.7～1.9cm、塔身厚み1.1cm、相輪の厚み0.7から0.8cm。底部に2.5mmの孔の痕跡がある。109は大黒天像の残欠である。残存高4.5cm、厚み1.7cm。前面と背面の型合せによる。110は長さ3.7cm、残存高2.2cm、厚み1.7cmの猫である。頭部を欠く。前で脚を描えて座る姿を写している。

磁器 111～122は波佐見窯系染付碗である。114、116、117、119、122の見込みは蛇ノ目軸ハギ。111、116は梅枝文、113、115、121は草花文、112、119は網目文を描く。111、116は18世紀中頃、112～115、117～122は18世紀代と考えられる。123は波佐見窯系の蕎麦猪口で外面に蛸唐草文、内面に四方禪文を描く。同じく18世紀代と考えられる。124は見込みに風景画を描く17世紀の波佐見窯系染付皿、125は同じく丸皿で18世紀代と考えられる。126は見込みに五弁花文、高台内には二重方格の中に渦文角福印をもつ波佐見窯系青磁染付皿で、18世紀代と考えられる。127は見込みに牡丹文のスタンプをもつ龍泉窯系青磁碗で15世紀後半と考えられる。128は同じく龍泉窯系青磁印花文碗で15世紀末と考えられる。高台内に使用者の墨書がある。「玄了」か。129、130は16世紀末～17世紀初の漳州窯系青磁碗である。131、132は京・信楽系灯明皿で、131は二重口縁を付す皿である。いずれも19世紀代と考えられる。133は關江上流窯系白磁割高台皿で15世紀後半と考えられる。生産窯としての類例は、福建省邵武四都窯がある。134は白磁で人形の左襟元～肩の破片である。産地など不明である。

陶器 135は白色化粧土による刷毛目文を施した肥前窯系碗で18世紀前半と考えられる。136は朝鮮王朝陶磁白釉茶碗で人為的カットがある。16世紀末～17世紀初と考えられる。137は瀬戸窯系灰釉碗で15世紀代と考えられる。138は皿の底部片である。見込みに胎土目を施す。139、140は淡緑釉を施す17世紀初の唐津窯系丸皿である。141は内外面に白色釉を施す18世紀前半～中頃の唐津窯系三鳥手鉢である。口縁部下で屈曲し水平にのびる腰折れタイプの鉢で、内面に剣頭文をめぐらせる。142は18世紀前半の肥前窯系刷毛目鉢の底部片である。143は見込み蛇ノ目軸ハギで、茶褐色の釉を施す。144は白色化粧土を施す刷毛目鉢である。145は底部に糸切り痕のある17世紀代の肥前窯系蓋

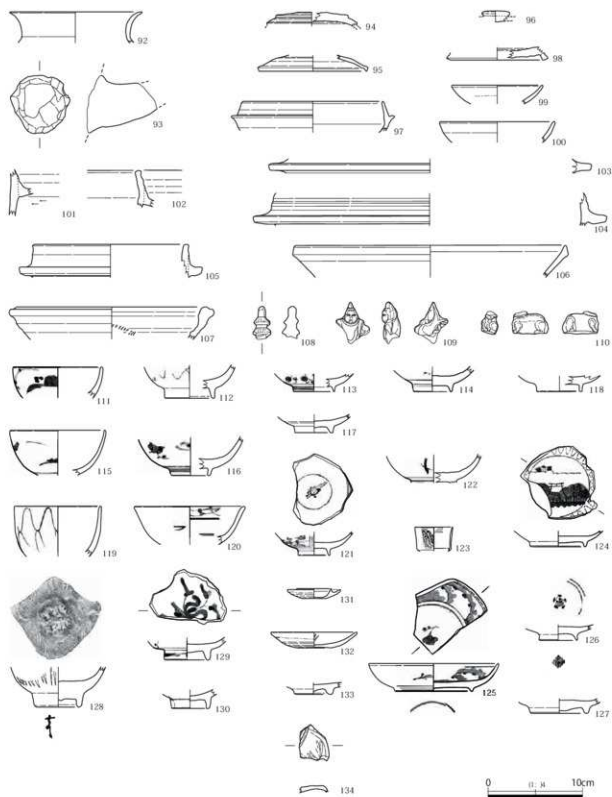


図 47 包含層IV出土物実測図 (1)

である。外面に鉄軸がかかる。146～151は口縁部緑帯内側に突帯をもつ罫描鉢である。147、150、151は突帯の突出が顕著であり、146、149はその度合いが小さく丸みを帯びて下方へなだらかに続いている。147は赤橙色の焼き上がりで、他はすべてチョコレート色を呈して締まった焼きである。147、150は内面のスリメが10～11条単位であるのに比べて、他は7～8条単位と粗い。151には内面に「佐」

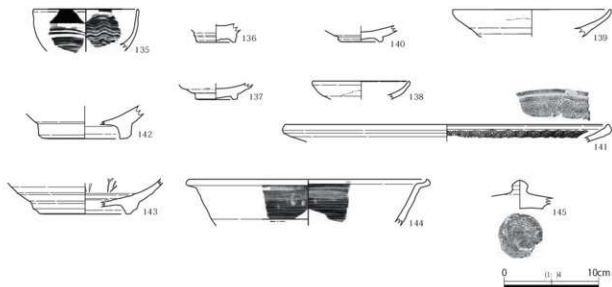


図48 包含層Ⅳ出土遺物実測図(2)

字の刻印がある。以上の鉢は、147、150、151は堺播鉢Ⅰ期、146、148、149はⅡ期にあたり、18世紀後半～19世紀と考えられる。152、153は備前播鉢で、152は口縁部内面のナデによる突帯が退化して扁平となるが、わずかに稜角を残し、153では口縁部内面の凹線がなくなり、平滑な面となり、外面縁帯の条線も不明瞭である。152は乗岡編年近世4期で18世紀後半、153は近世5期で19世紀に入ると考えられる。154～157は丹波焼播鉢である。154は口縁部を外反気味に直立させた幅広の受口状縁帯で、外面の凹凸が激しい。内面のスリメは9～10条単位である。大丹波焼播鉢編年のⅦ型式に該当すると思われ、18世紀前半と考えられる。155は口縁端部が体部とほぼ直角の丸みを帯びた面をもつ。無軸で4～5条単位のスリメを入れる。口縁部内面に浅い凹線が巡る堅緻な焼成である。17世紀代と思われる。156は底部未調整で外面は回転ナデ、指オサエ痕はみられない。内面には体部にスリメを施した後、4条/cmの円弧状スリメを入れている。18世紀後半と考えられる。157は底部から内湾気味にのびる体部をなす。内面には7条単位のスリメを密に施す。外面には斜上方の指オサエ痕が顕著である。上方に浅い凹線がめぐる。同編年のⅣ～Ⅵ型式に該当すると思われ、17世紀中頃～後半と思われる。

埴輪 158は朝顔形埴輪の肩部の破片と思われる。摩滅して調整はよくわからないが、内面には横方向の指ナデが認められる。胎土には砂粒を多く含んでいる。4～5世紀と考えられる。

軒丸瓦 159は左巻三巴文瓦である。瓦当径14.4cm、外縁幅1.3cm、外縁高1.3～1.5cm、瓦当厚1.6cm。珠文は9個みられるが全体では24～26個と推定される。外縁は幅があり高さもある。文様の隆起は大きく、断面は半月形となる。珠文帯外に圏線をもつ。巴文の頭部は尖り、尾は長くのびるが、圏線とは重ならない。珠文は大きく間隔が密である。鎌倉時代前半、13世紀後半を考えたい。

160は右巻三巴文瓦である。瓦当厚1.5cm。やや間隔のひらいた珠文や巴文からみて159よりは新しく中世末としておきたい。161も三巴文瓦である。瓦当径は15.4cm程度とみられ、瓦当厚は1.75cm、外縁幅2.0cmで、外縁高は0.8cmと低い。外縁に刻印がある。この刻印は縦長の細い三角形の凹みの中に小さな3本の突起がみられ、同様のものが日置荘遺跡の中世瓦の中に類例がある(同報告書図版1-123-6)。

軒平瓦 162は瓦当幅3.0cm、外区の長さ(上)0.6cm、体部厚1.5cm。段頸は鈍角をなし、幅広い脇

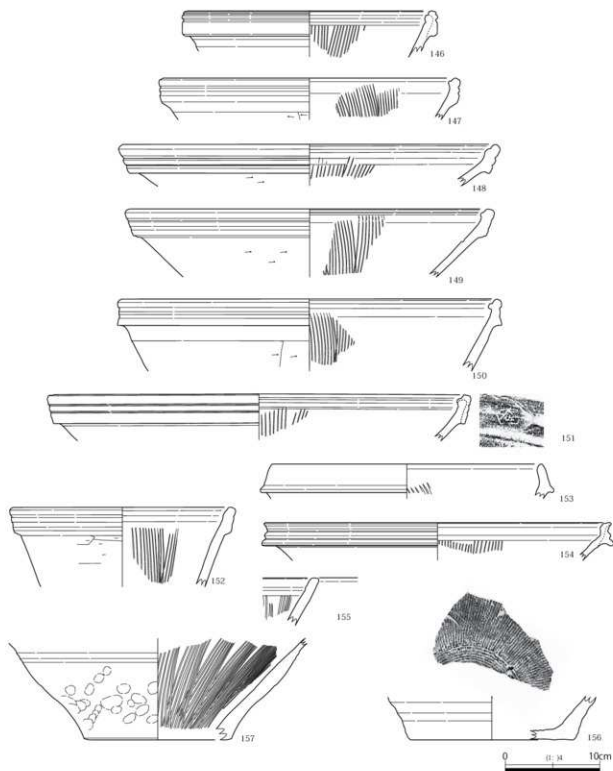


図49 包含層IV出土遺物実測図(3)

区をなす。凹面、凸面共に横方向にナデる。瓦当面に離れ砂が残る。文様は反転する唐草文の先端が二又に分離する。山崎編年近世VIII期に該当し、18世紀後半～19世紀と考えられる。163は瓦当下半の頸部の破片である。平瓦広端部から外れたもので、貼り付け式の段頸とみられる。唐草文の反転する下端は巻き込まず細い線となって終えている。頸凸面裏面を横方向にナデる。同編年Ⅲ-1期にあたり、16世紀末～17世紀と考えられる。164は摩滅の激しい破片であるが、かろうじて蓮華文が認められる。

鎌倉時代頃の時期であろうか。

平瓦 165 は玉縁部分の破片である。凸面はていねいなナデ、凹面は側面、玉縁を面取りする。内面は筒布の布目の痕跡をとどめる。玉縁の長さは 6.0cm である。中世末～近世と考えておきたい。

飾瓦 166 は鬼瓦の破片である。粘土塊を以て造型し、接合部分を指で強くナデている。幅 1.5～1.7cm、高さ 0.7～0.8cm の半円形断面の隆帯で獅子形の髪を表現し、この隆帯に 0.2cm 幅の串状工具で縦方向に刺突文を加えている。その際、0.7cm 間隔で工具を粘土上で止めて、断続的に 0.2～0.3cm の長さの刺突文としている。近世瓦と思われるが定かではない。

金属製品 167 は煙管の雁首である。残存長 5.2cm、胴部長 4.2cm、立ち上がり部の長さ 1.3cm である。火皿は口径 1.7～1.9cm。頸部との接続部に細い突帯が片面にみられる。頸部は弧状に立ち上がる。胴部は羅字側に向かって口径が増す。168 は残存長 8.5cm、胴部長 6.5cm、立ち上がり部の長さ 2.0cm である。火皿は口径 1.3cm。頸部との境に細い突帯がある。頸部は弧状に立ち上がる。胴部の口径は均一である。同部には鉄板を管状に巻いた際の接合痕がある。169 は火銃銃の鉛製弾丸と考えられる。径 1.2cm、重量 9.1g、2 勾玉である。ライフリングは認められないので滑空銃身で 45 口径ほどの先込め式の長物に用いられたものと思われる。

東側段丘部包含層Ⅷ出土遺物 (図 51)

170 は短い鐔のつく土師質羽釜、171 は土師質片口鉢である。いずれも中世。172 は陶器壺で体部最大径 21.0cm 前後になり、屈曲する口縁がつくと思われる。赤紫色の胎土で外面は淡灰色釉、内面はやや暗い灰色を呈する。内面には頸部付近に接合痕をとどめる。17 世紀の外国産の可能性がある。

2 区包含層Ⅸ (上層・中層) 出土遺物 (図 52)

土師器 173 は高杯脚部で縦に面取りするもの。8 世紀代と考えられる。

須恵器 174 はオリコミ手法による立ち上がりの短く内傾する坏身である。陶色編年Ⅱ型式 5 段階に相当し、6 世紀末～7 世紀初と考えられる。175 は底端部近くにハの字形に高台を付す坏身である。

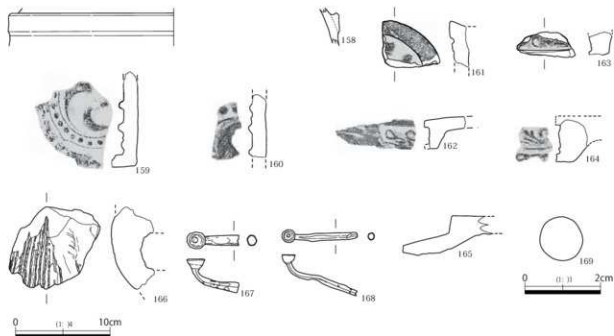


図 50 包含層Ⅳ出土遺物実測図 (4)

高台接地面は平坦である。陶色IV型式1～2段階に相当し、8世紀前半と考えられる。176は平底の壺かと思われる。底部外面は回転ヘラズリである。

黒色土器 177は椀である。摩滅が激しいが、内黒の器で内面は密にミガキを重ねている。178も同じく内黒の椀であり、いずれも10世紀代とみられる。

瓦器 179、180は椀口縁部の破片で、179は器壁が180に比して厚く、内外面にヘラミガキが認められる。180は器壁が薄く、深みがなく、内面に粗いヘラミガキを施す。179は12世紀代、180は13世紀後半あたりかと思われる。181～183は底部で、183はしっかりした高い高台を付し、内面には密なヘラミガキが認められる。181、182は退化した高台を付し、内面のヘラミガキは太く粗い。183は12世紀前半、他は13世紀中頃～後半と考えられる。

土師質土器 184は羽釜の鐙、185は内傾する口縁部外面に短い水平の鐙が付く。肥厚する端部は上に面をなす。14世紀代と考えられる。

須恵質土器 186は東播系片口鉢である。口縁端部が拡張するというより肥厚している感じである。東播系鉢Ⅲ期3段階に相当し、14世紀後半と考えられる。

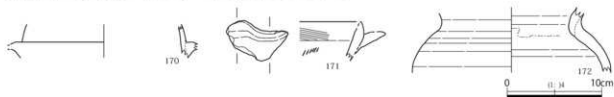


図51 包含層Ⅵ出土遺物実測図

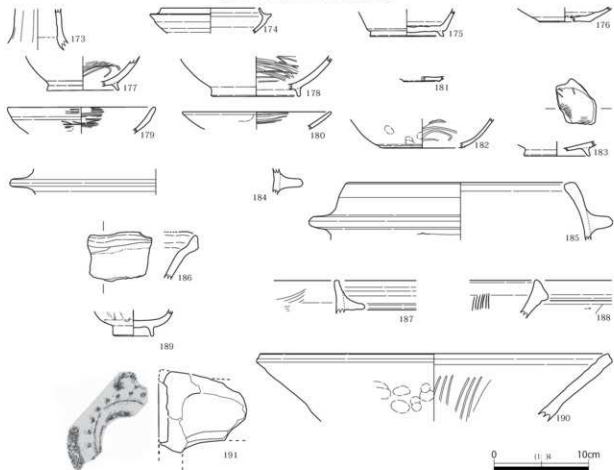


図52 2区包含層Ⅸ出土遺物実測図

瓦質土器 187は羽釜の口縁部である。直立する口縁部外面に浅い凹線がめぐり、短い水平の罫が付く。14世紀代と考えられる。188は播鉢で口縁部が三角形断面を呈し、端部は丸みを帯びている。内面には4条/cmのスリメを入れる。14世紀後半と考えられる。

磁器 189は波佐見窯系染付碗で淡灰緑色を呈し、一重の網目文を描く18世紀の器である。

陶器 190は備前焼播鉢で、体部から口縁部にかけて器厚が変わらない形態である。スリメは条線が3条単位で単位間の間隔が広い。乗岡編年の中世3期に相当し、14世紀中頃～15世紀前半と考えられる。

瓦 191は左巻文軒丸瓦である。外縁幅1.5cm、外縁高0.5cmで、文様の隆起は小さく、模範としている。珠文は9個残り、全体では20～22個と推定される。瓦当裏面に丸瓦を付け、接合部凹面は縦方向に強くナデつけている。凸面は縦方向のナデを、側面は面取りを施す。瓦当には離れ砂がある。14世紀代とみられる。

旧河道内堆積土

1区包含層IX（上層）(図53)

須恵器 192は坏身で、立ち上がりが低く短く内傾する。口径は10cm前後になる。陶邑Ⅱ型式5段階に該当し7世紀初とみられる。193は坏身の底部である。底端部付近にハの字形にふんばる低い高台がつく。陶邑Ⅳ型式、8世紀代と考えられる。194は小型甕の体部で長円形となるようである。最大径付近に浅い沈線がめぐり、径1.2cmの円孔が穿たれている。陶邑Ⅱ型式6段階からⅢ型式2段階あたりで7世紀代と考えられる。壺の底部と思われるものがある。195が平底、196が丸底である。

瓦器 碗では197～201は体部片、201は碗形の深みを残すが、他はすべて浅く退化の進んだ形態である。201は調整不明であるが、他は外面が指オサエ、内面に粗いヘラミガキを施している。197～200は尾上編年Ⅳ期に相当し、13世紀後半あたりと考えられる。201はそれよりも古い。202、203は三角高台の形をとどめる底部片で、204、205は格子状のミガキが認められる。同編年Ⅱ期後半、12世紀後半と考えられる。また206、207、208は高台がさらに退化し形骸化しており、Ⅳ期後半、14世紀に入るものとみられる。209は皿で内外面密にヘラミガキし、見込みには格子状ヘラミガキを施す堅緻な器である。13世紀代か。

土師質土器 210～212は羽釜で、口縁部外面に段状の凹線をめぐらせる。210、211は直立する口縁に水平の罫がつき、端部は上端面をなす。212はやや内傾する口縁部に短い上向きの罫がつく。14～15世紀と考えられる。213は内傾する口縁部端部を肥厚させ、短くわずかに外反させる羽釜で、14世紀代と考えられる。214は鉢の破片であり、16世紀代と思われる。

瓦質土器 215は直立する口縁部外面に段状の凹線をめぐらせ、これに水平の罫がつく。216～218は口縁部が内傾する形態である。14～15世紀と考えられる。

陶磁器 219は淡灰緑色釉を施す15世紀末～16世紀初の龍泉窯系青磁碗である。高台は無軸である。220は17世紀第2四半期の唐津窯系折縁皿で、見込み、高台に砂目がある。

埴輪 221は円筒埴輪片である。タガの断面は三本指のヨコナデによる台形をなす。4世紀後半～5世紀後半とみられる。

石製品 222は長さ9.85cm、最大幅3.0cm、厚さ0.6～1.1cmの砥石である。両面が滑らかな使用面であり、両側面には線条痕が顕著である。狭い一端に本来の加工面をとどめる。短冊形の製品が割れた後もお用いられていたようである。

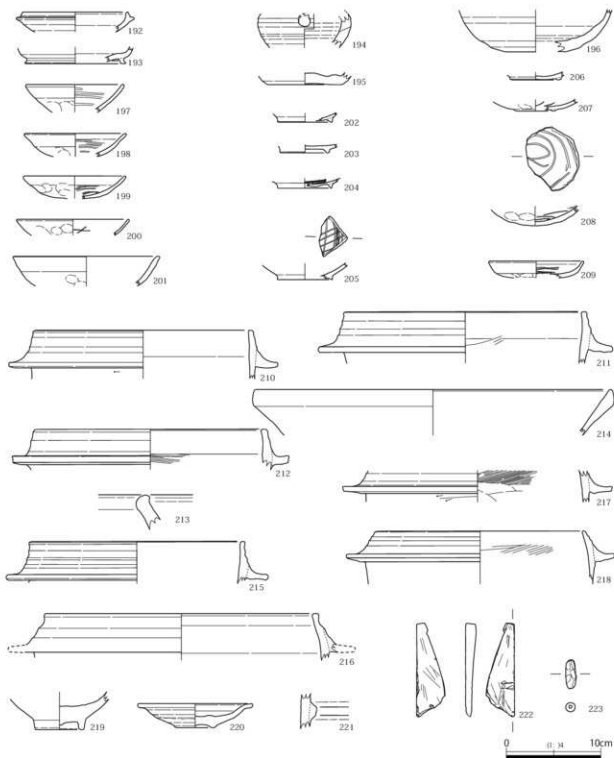


図 53 1区包含層IX上層出土遺物実測図

土製品 223 は管状土錘である。長さ 2.9cm、径 1.0cm で、径 0.2cm の孔を穿っている。

1区包含層IX（中層）（図 54）

須恵器 224 は斜上方にのびる口縁端部を丸くおさめる坏身口縁部である。225 は坏身底部で細い高台がハの字形につく。接地面は平坦である。226 は平底の甕と思われる。以上の須恵器は陶器Ⅳ型式、8 世紀代とみておきたい。

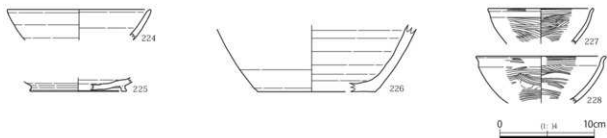


図 54 1区包含層X中層出土遺物実測図

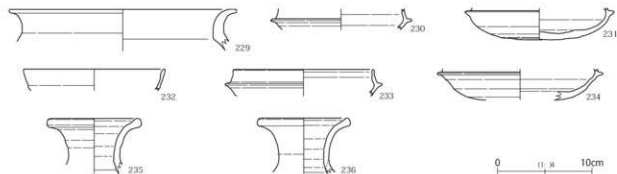


図 55 1・2・5（北）区包含層X出土遺物実測図

瓦器 227、228 は内湾する体部をもつ破片である。口縁外部が強くヨコナデされ、短く外反する。内外面共に密にヘラミガキする。228 は器壁が 227 に比べて厚い。いずれも焼成が良好で硬質である。尾上編年 I 期にあたり、11 世紀後半～12 世紀初と考えられる。

1・2・5（北）区包含層 X（図 55）

土師器 229 は裏の口縁部片で、体部より短く直立する端部を外反させ、丸く終える形態である。7 世紀後半～8 世紀前半におさまると思われる。

須恵器 230～234 は坏身である。234 は立ち上がりの内傾気味で、端部は段をなしている。231、232、234 が陶器Ⅱ型式 1～2 段階に相当し 6 世紀前半、233 はⅣ型式で 8 世紀代に入るとみられる。235、236 は同一個体かもしれない。短く外反する口縁部で、端部を肥厚させ、内側にやや内傾させている。Ⅱ型式 1～5 段階の提瓶の口縁部かと思われ、6 世紀代とみておきたい。

第4章 まとめ

第1節 土地利用の変遷

今回の調査では、中位段丘面とこれを刻む旧河道の土地利用の変遷を把握することができた。1区、2区を中心に検出された第2面の河床面では、古墳時代初頭から飛鳥・奈良時代にかけて開墾の兆しを示す人為的痕跡が落込みや土坑という形で捉えられた。しかし119・120落込み出土の庄内式土器片は摩滅し、流水に洗われて河床の凹みに留まったもので、出土箇所でも人間が何か特別な行為を行った結果であるとは考えられない。ところが、同じ河床でも須恵器甕を出土した006落込みや土器把手付鍋を出土した007落込みは、同じく須恵器甕を出土した河道西肩の069土坑とともに、あきらかに人間の意図的な行為の結果である。その具体的な意図については、なお検討しなければならないが、水に対するなんらかの儀礼的所作がおこなわれていた可能性は否定できない。いずれにせよ、飛鳥・奈良時代に旧開析谷と合流する河道に人が関与し始めた紛れもない証拠である。

この河道は、松室池から樋野ヶ池に接続する旧河道として地形図に示されてきたもので、地籍図では小字「谷」となっている。その河道に今回、飛鳥・奈良時代の人為的痕跡を確認できたわけである。第2章に触れたように、樋野ヶ池の中洲の北東部では6世紀中～後半の須恵器窯が発見されている。窯は今のところ1基確認されている。それからすると少なくともこの時期にはまだ旧開析谷を堰き止めて溜池に利用していたとは考えられない。池の内部の調査はされていないので何基の窯が存在したか不明であるが、旧開析谷の溜池化を考えると、それほど継続的に営まれていたとは思えない。

中高野街道以西の沖積段丘、氾濫原を中心に整然とした条里地割が残るが、その地割にしたがった飛鳥・奈良時代以降の建物跡は市域各所で発掘調査により確認されている。もちろん、この地割にしたがった水田の開墾も進んでいたであろう。そこで問題となるのがその水田への配水である。雨量の少ない南河内の平野部では、大規模な旧開析谷を堰き止め、溜池に利用するのは当然のなりゆきである。そのような取水のやり方はおそらくこの頃から強く意識され始めたにちがいない。そうでなければ、いわゆる丹比大溝が地形の自然な方向性を越えてまで東西に横断して施工されることはなかったであろう。このように考えると、上記の006・007落込み、069土坑の存在は、6世紀後半以降の旧開析谷や河道からの用水確保を目的とした新たな土地利用に連動しているとみなければならない。

その後、この河道が埋没していく過程で、中世以後活発な水田化が進んだ。それは何層にもわたって堆積する粘土質の土壌を主体とする作土層の形成に窺われる。また近世以後、3区、4区、5区（東）では中位段丘を等高線に沿って、田から田へ円滑な配水を行うため、10cm内外の高低差をつけて、段状に大小の水田が繰り返して造成されていった。この結果、中位段丘面の近世以前の遺構は削られて残っていない。しかし耕土層には中世遺物も散見されるので、中世には谷地部のみならず、中位段丘の開墾も既に行われていたようである。

明治18年の陸測図や昭和36年の地図には、2区で検出された219水路の姿や、現在樋野ヶ池に中洲状となって延びかつての河道の東肩を見ることができる。昭和36年の地図に調査区の主要検出遺構を重ね合わせると、そのほとんどが地図上の水田区画や水路の位置と等しいことが分かる（図56）。中位段丘部分で検出された細かく区画された水田はこの地図にはもはや見られず、ほとんどが大きく平

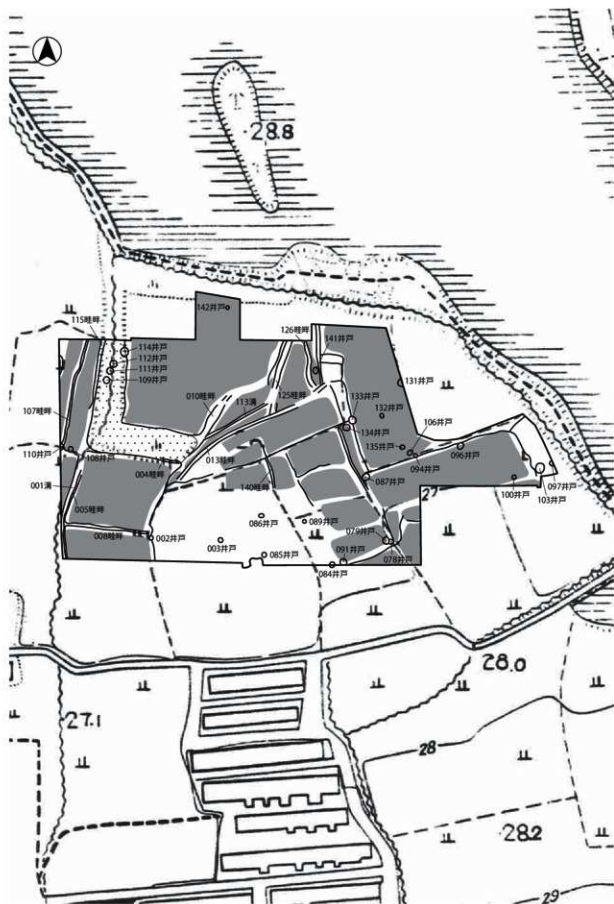


図 56 第 1 面遺構と地形図 (1961 年) の重複状況図

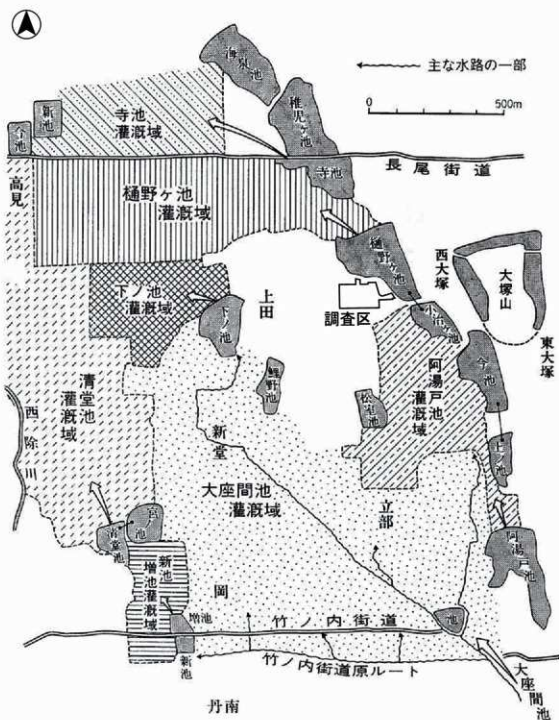


図 57 調査区周辺の溜池分布図

坦な姿に改変されている。そこには水周りや作付けがより効率的に行われるように広い面積の水田に変えていった形跡を窺える。219 水路より以北の樋野ヶ池までの広い水田 (1230 水田) は、それより以南の 1 区の水田 (1228, 1229 水田) よりも遅れて造成されたものと考えている。それは 1 区のこれらの水田を断ち割って観察した南北断面には顕著な畦畔の立ち上がりみられるのに対し、219 水路を越えた 2 区の水田の下では認められず、ただ粘着性の強い粘土のような粘土層を主体とする堆積状況であったことから明らかである (図 11)。このことから 1230 水田は 219 水路を設けた後、



図 58 調査区周辺の小字分布図

周辺からの客土も加えて平坦な一枚の水田にしたと考えられる。したがって近世に入って行われた段丘の水田化によって職業訓練校造成直前までの耕地の基本は形成され、以後は中位段丘の小規模区画の水田の高低差を解消して、より広い大区画の水田へ変えていく作業が部分的に行われたに過ぎない。

『松原市史』第1巻に掲載されている周辺の溜池の地図（図57）を参照すると、旧開析谷を利用した

阿湯戸池、上ノ池、今池、小治ヶ池、樋野ヶ池、寺池、稚児ヶ池、海泉池など、南東～北西に延びる各池の灌漑域が具体的に理解できる。若山遺跡は樋野ヶ池に接しているとはいえ、この地点では中位段丘の尾根の東斜面下に位置するので取水はもっと北の低い地盤でなければ不可能である。よってこの池の灌漑域は調査区の北、北西の長尾街道に接する上田町3丁目、6丁目付近一帯となる。調査区南では阿湯戸池と大座間池の灌漑域が拮が、調査地までは及んでいない。現在、松原東小学校となっているかつての松室池と、その西で一部が多目的広場と変わった鯉野池を結ぶ線あたりまでが、南方竹内街道の南に接する大座間池の灌漑域の流末となっている。それより以北、つまり調査地を含む周辺の灌漑状況はこの地図では空白である。しかし昭和36年地図では、南の松室池の北西隅と北東隅から、現上田府営住宅地区（小字「谷」の部分に該当）の東西を限る形で水路がそれぞれ北に延びている。そのうち北東隅から北に流れる水路は、途中で分岐して、一方は東の樋野ヶ池へ、他方は調査地の中位段丘部分（3区～5区）に至り、北西隅から流れる水路は旧河道部分（1区、2区）に至っていた。そして後者が今回検出された001溝であり、さらに北の219水路南北部分あたっている。してみると検出された溝や水路も周辺の灌漑水系の毛細部分として機能していたといえる。

このような水路による配水を補うのは井戸である。井戸は耕作の邪魔にならないように、水田区画の隅に掘り込まれる傾向がある。畦畔などの区画が削られて残らない場合でも井戸は残る。逆に言えば、井戸のあったところは本来畦畔による区画の隅に当たっていたとみてよい。もしそのように考えることが許されるなら、先ほどの図56の段丘部分で区画が削られて残らなかったところに井戸だけが目立つのは、本来水田区画がさらに細かく造成されていたためである、といえるだろう。また井戸から取水していたところでも他の効率的な手段が得られれば、井戸は廃絶され、新しい取水手段に取って代わった。219水路がつけられて、111・112井戸などの井戸が必要なくなったのはその例であろう。

地籍図（図58）（註2）では調査地に遺跡名の根拠となった小字「若山」と、その西に接する小字「今池」の2つの地名がある。発掘調査の結果に照らせば、この小字名自体は明らかに調査地の旧地形を反映している。つまり、「若山」とは3区、4区の中位段丘部分のかつての高所を指し、「今池」とは2区検出の219水路を含む旧河道部分の呼び方である。地籍図の範囲は厳密なものではないが、検出された遺構との位置関係から言えば、219水路の南肩、すなわち004畦畔より以北、樋野ヶ池に達するまでが一時期、池であった状態を「今池」と呼んだものと思われる。その後この池の部分も水田化されていくが、219水路底面で検出された111・112井戸、109落込みなどは219水路がまだつけられていない頃のものである。南から流れ込む001溝を受けて1230水田を潤し、また樋野ヶ池への排水をも考慮したL字形の水路をつけるのは次の段階であった。これをまとめると、大きくは1228・1229水田（1区）+湿地状態～水田（2区）→1228・1229水田（1区）+219水路（小字「今池」）+1230水田（2区）への流れを追える。このように松室池北西隅からの配水を受ける001溝と219水路との関係は、東の旧開析谷の名残りである樋野ヶ池と、1区・2区にかかる旧河道との合流部分に接する個所に営まれた、水田の水懸りにあった。18世紀初め以降、丹北郡上田村には寺池、鯉ノ池、樋野ヶ池、松室池、細ヶ池があり、また狭山池の中樋筋の分水を受けていたが、文政元年（1818）にはその水懸りを離脱していたといわれている。この頃には、離脱しても賄えるだけの水を周辺の溜池で充足できたのであろう。今回の調査地点では「今池」という字名に該当すると思われる219水路もそのひとつであった。

以上、要約すると、1・2区の旧河道では古墳時代初頭の土器が一部出土するところがあったが、土

地利用の意識がはっきりし始めるのは飛鳥・奈良時代の7～8世紀である。この時期の遺物を出土した遺構は、周辺の水田への配水に直結する開析谷の溜池化にも連動していた。この方向性は中世以降の水田耕作へと繋がっていく。近世に至ると、当地は一時期狭山池の流末ともなったが、19世紀前半にはその水懸りからも離れる。それは周辺の谷地形を堰き止めた溜池からの配水がより効率的、自立的に行われるようになったからでもあろう。それ以後、景観は、近代に入っても大きく変わることはなかったが、産業構造が急速に変化し始める高度成長期の到来とともに、溜池の埋め立てが進み、そこに公共施設が建設される。ここに至って古代以来連綿と続いた土地利用の方向性に新たな分岐が生じることとなった。

第2節 若山遺跡の出土遺物

第2面の河床の窪みから出土した庄内式土器の壺の口縁部の摩滅した破片が、今回の出土品中最も古いものである。出土状態と摩滅の程度からみて流水によってもたらされた印象が強く、この時期の遺構が他にみあたらないので、多くを語りえない。しかし調査地点より東の柴籬神社から中高野街道を越えて国道309号線付近までの広い範囲に分布する、旧石器時代以来近世におよぶ一大複合遺跡、上田町遺跡が存在するので、この遺跡との関係をまず考えたいところである。

同じく第2面の河床の落込みから出土した土師器把手付鍋、須恵器環・甕や、河岸に掘り込んだ土坑から出土した須恵器甕は、出土状態から見て、既に7～8世紀にこの河道に対し、何らかの人為的な意図があって埋め置かれた遺物である。土師器・須恵器の破片は河床を覆う中世耕土にも中世～近世遺物と並んで普通にみられ、時期的には6世紀前半～8世紀のものが多い。樋野ヶ池窯跡では6世紀中頃～後半という限られた時期の須恵器が発見されているので、至近のこの窯跡との関係が考えられる。また、本遺跡の場合は段丘部の削平土や他所からの客土を以って水田造成された可能性が高いので、同じ耕土中出土の埴輪片と共に、たとえば、古墳の残骸が発見された南の立部遺跡などとの関係も考えなくてはならない。

中世遺物では、上記の7～8世紀の落込みを覆う作土や泥土中に既に瓦器破片が出土し始める。それらには11世紀後半にさかのぼる破片もみられるから、中世に入ると本格的に水田が営まれていたに違いない。瓦器以外には瓦質羽釜、土器と共に瓦の出土も目立つ。

瓦は中世末～近世・近代の平瓦、丸瓦の破片が大半であるが、摩滅した布目痕・縄目叩き痕をもつ古代瓦の破片もみられる。近世瓦では、「立瓦定」や「河野重」の刻印をもつ破片が第1面219水路の埋土中より出土している。後者の刻印をもつ丸瓦の凹面には粘土切り離しの痕跡である横方向の細い線条痕が認められる。1580年後半～1590年前半に瓦の大量需要に応じて出現した、いわゆる「コビキB」技法に近いが、線条痕はそれに比べてかなり細い。近代の製瓦機導入直前の成形痕であろうか。聞き込みによると、かつて上田や立部で瓦を製造していたとのことであり、これらの瓦は在地瓦の資料としても注意される。

陶磁器類では、小字「今池」に該当する219水路より、17～19世紀の唐津窯系、波佐見窯系、瀬戸窯系碗皿類が出土しているが、量的には波佐見窯系磁器が圧倒的に多い。播鉢は「上」字の刻印をもつ破片も含め、堺播鉢I類の破片が目立っている。第1面上の耕土(包含層IV)中にも、17～19世紀の陶磁器がみられ、波佐見窯系、次いで唐津窯系、肥前窯系の碗皿、また「佐」字の刻印をもつ堺播

鉢がある。これらに加えて、15世紀後半の關江上流窯系白磁皿、龍泉窯系青磁碗、16世紀末～17世紀初の朝鮮王朝白釉碗、漳州窯系青磁碗などの輸入品もわずかながら散見される。

12世紀末～13世紀初頭に基礎づけられた東中国海太平洋貿易路が、15世紀後半に堺の海商によって新貿易システムとして継承され、臨濟宗を中心とする堺と閩南の禪林世界を背景とする貿易ネットワークが確立された。わが国ではそのネットワークの下で輸入された關江上流窯系白磁皿が15世紀第3四半期より出土し始めるという。西は堺まで二里余り、この若山遺跡でも他の輸入陶磁器とともに關江上流窯系白磁皿が出土した。耕土中に紛れる廃棄品が周辺の往時の日常生活雑器の一端を反映するとすれば、堺より大和長尾に至る物流ルートである長尾街道の南に接するこの遺跡にも、近世堺をめぐるこのような東アジア世界の動向の一斑を窺えそうである。

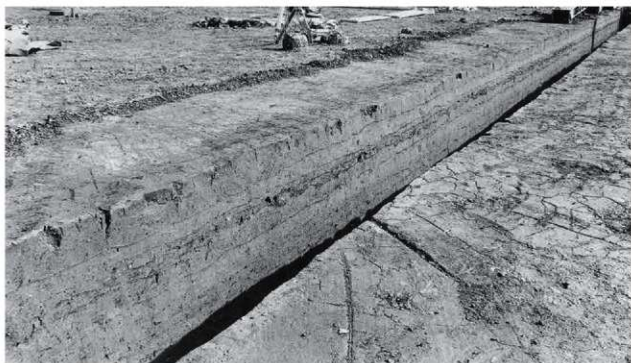
註1. 層序の記述にあたっては、中尾智行により分層され、作成された1区立会資料の解説文を補足し、発展的に利用した。

註2. 公表されている市域の小字図の中の、調査地にあたる小字「若山」とその西の「今池」の位置は不確かで、両小字はともに東に寄って、職業訓練校敷地内に収まるとのご教示を、松原市教育委員会より得ている。したがって図53ではそれを改めた位置で表示した。

参考文献

- 日下雅義「大和川・今池遺跡付近の地理的環境」大和川・今池遺跡調査会『大和川・今池遺跡Ⅱ』1980年
白神典之「第5章 堺遺跡について」『堺環濠都市遺跡発掘調査報告』堺市文化財調査報告第37集 1988年
大平茂「近世丹波焼播鉢の型式分類とその編年」兵庫県教育委員会『三田市下相野窯址』（兵庫県文化財調査報告第107冊）1992年
乗野爽「備前焼播鉢の編年について」中近世備前焼研究会『第3回 中近世備前焼研究会資料』2000年
森村健一「堺・關南『泉南佛國』國際關係論」関西近世考古学研究会『関西近世考古学研究15』2007年
山崎信二『近世瓦の研究』2008年
中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』1995年
『大阪府全誌』巻四（復刻版）1985年
『大阪府の地名』（日本歴史地名大系第28巻）1988年
松原市史編纂委員会『松原市史』第1巻 1985年
松原市教育委員会『上田町遺跡・丹比柴籬宮跡』1987年
松原市教育委員会『上田町遺跡』1988年
松原市教育委員会『上田町遺跡』1989年
堺市教育委員会『堺市文化財調査報告』第20集 1984年
堺市教育委員会『堺市文化財調査報告』第21集 1985年
堺市教育委員会『堺市文化財調査報告』第37集（堺環濠都市遺跡（SKT79）発掘調査報告）1988年
堺市教育委員会『堺市文化財調査報告』第41集 1989年
堺市教育委員会『堺市文化財調査概要報告』第5集 1990年
大阪府教育委員会・財団法人大阪府文化財センター『日置荘遺跡』（近畿自動車道松原ささみ線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書）1995年
財団法人大阪府文化財センター『堺環濠都市遺跡（SKT969地点）』（大阪府文化財センター調査報告書第177集）2008年
奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅵ』（奈良国立文化財研究所学報第23冊）1975年
佐賀県立九州陶磁文化館『国内出土の肥前陶磁』1984年

写 真 图 版



1区 X=-158,320ライン断面 (1. 上-西半、2. 下-東半) (南西から)



3.5区 (東) X=-158,300ライン断面 (南から)



1. 2区 Y=-40,230ライン断面 北半 (北西から)



2. 2区 Y=-40,230ライン断面 南半 (北西から)



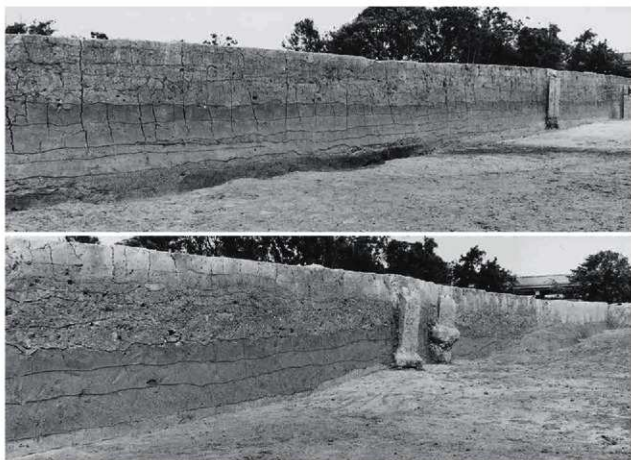
1. 2区 X=-158,276ライン断面 (南から)



2. 2区 X=-158,252ライン断面 (南から)



3. 5区 (北) Y=-40,185ライン断面 (西から)



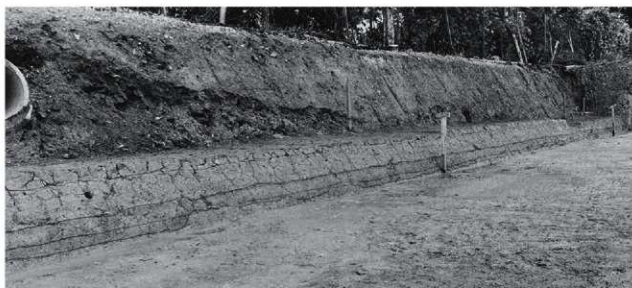
2区 X=-158,280ライン断面 (1. 上-西半、2. 下-東半) (南西から)



4区 X=-158,280ライン断面 (3. 上-西半、4. 下-東半) (南東から)



1. 4区 X=-158,252ライン断面 (南西から)



2. 4区 X=-158,245ライン断面 (南西から)



3. 4区 X=-158,150ライン断面 (南東から)



1. 1区 全景 (北東から)



2. 2区 全景 (東から)



1.2区 全景 (南西から)



2.3区 全景 (南東から)



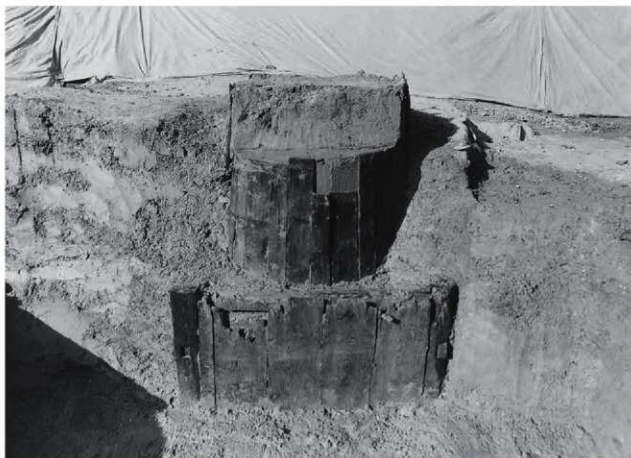
1. 4区 全景 (南から)



2. 5区 (東) 全景 (西から)



1. 2区 111井戸断面 (南から)



2. 2区 114井戸断面 (南から)



1.4区
131井戸断面(東から)



2.4区
135井戸断面(南から)



3.5区(北)
142井戸断面(南から)



1. 3区 084井戸断面 (北から)



2. 3区 087井戸断面 (南から)



1.5区(東)
100井戸断面(北から)



2.2・3区
106井戸断面(南から)



3.2区
108土坑断面(北から)



3区 077水溜め (1. 上-全体、2. 下-断ち割り) (南から)



3. 4区 188溝・1197水田 (南西から)



1.1区 001溝 (南西から)



2.1区 1216水田・010畦畔 (南西から)



1. 3区 139畦畔 (南から)



2. 4区 125畦畔 (南から)



3. 4区 013・126畦畔 (南から)



1.1区 全景 (南西から)



2.1区 全景 (北東から)



1.2区 全景 (南東から)



2.4区 全景 (南西から)



1.1区 071井戸断面（南から）



2.4区 143井戸断面（北西から）



1. 2区 117土坑 (西から)



2. 2区 118土坑 (南から)



1. 1区 006落込み (南東から)



2. 同上 遺物出土状況 (西から)



1. 1区 007落込み (南東から)



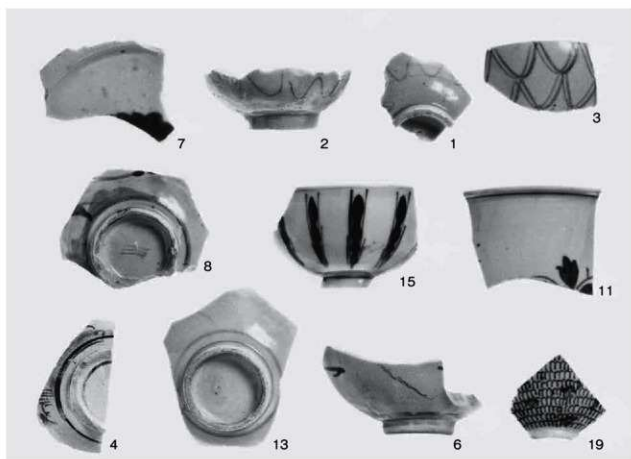
2. 同上 遺物出土状況 (西から)



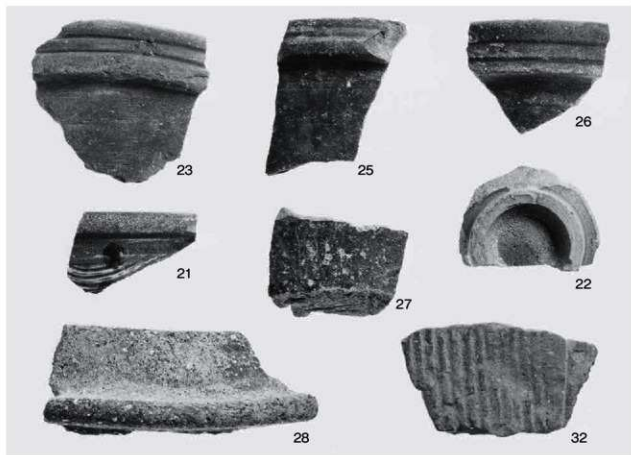
1. 2区 119・120落込み (南から)



2. 同上 遺物出土状況 (南から)



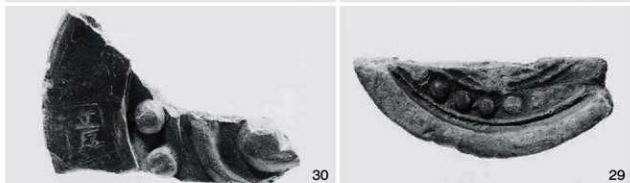
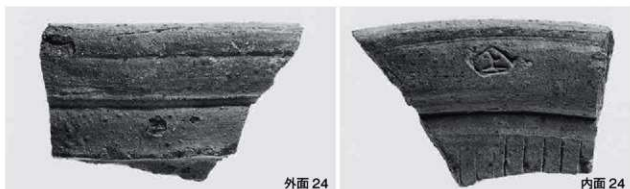
219水路 出土遺物 (1)



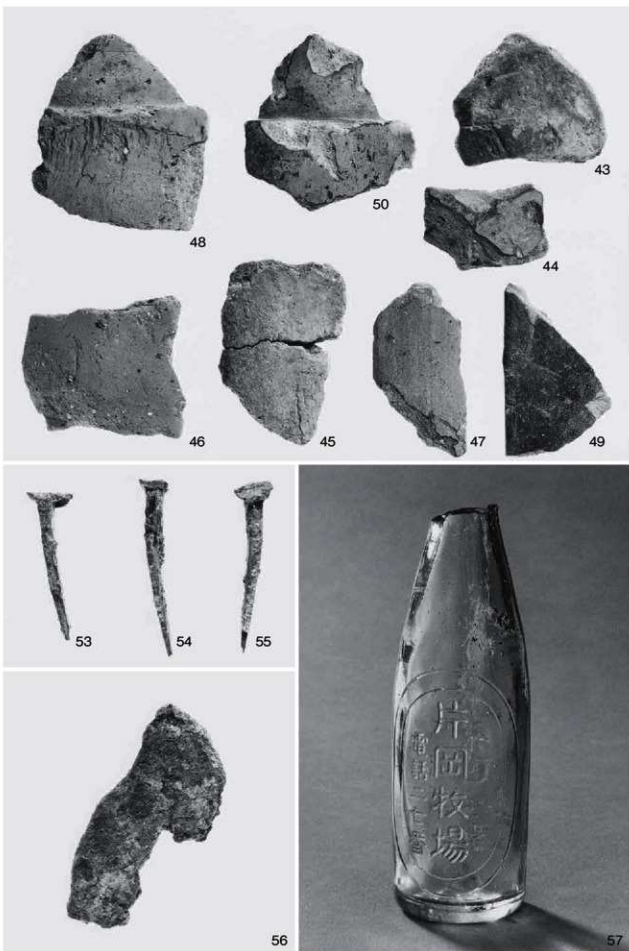
219水路 出土遺物 (2)



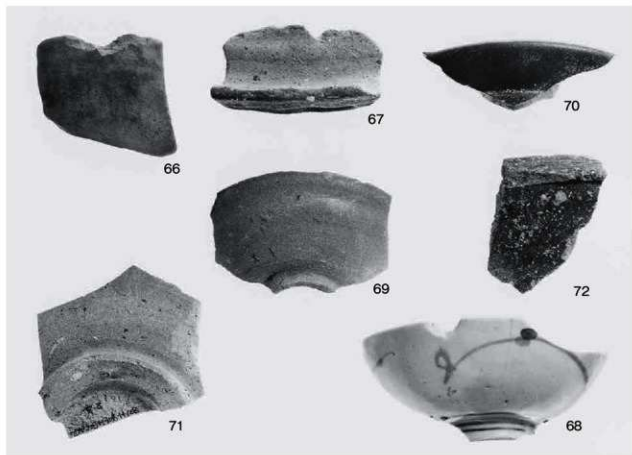
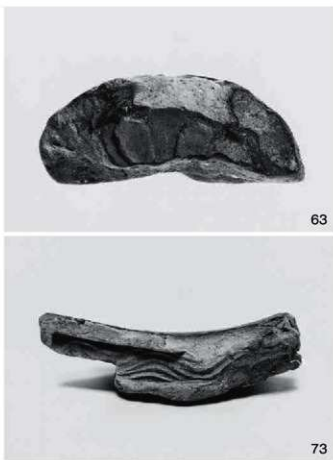
219水路 出土遺物 (3)



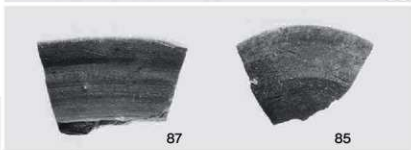
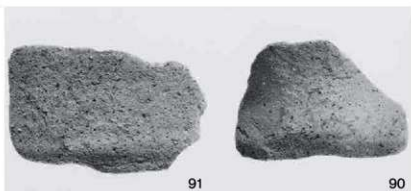
219水路 出土遺物 (4)



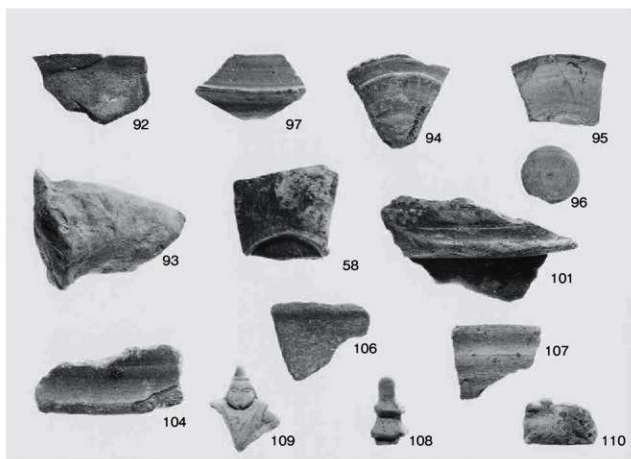
井戸・水溜め 出土遺物



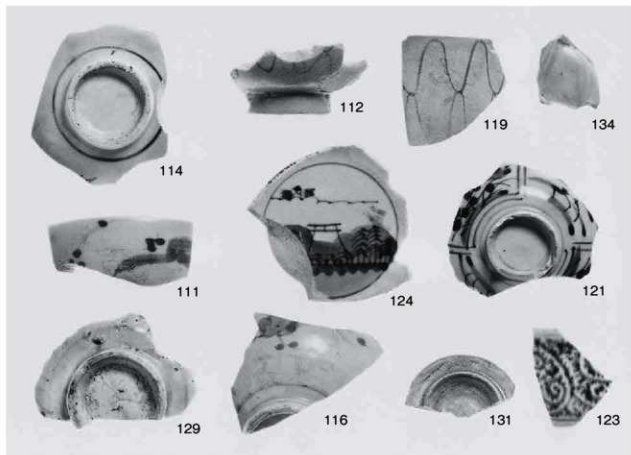
畦畔盛土・溝・落込み 出土遺物



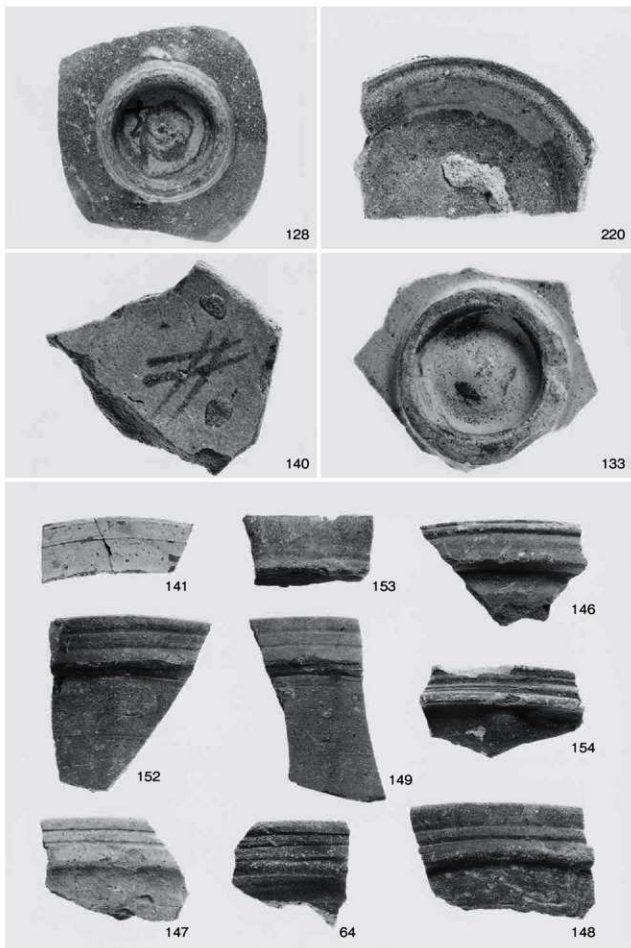
土坑・落込み 出土遺物



IV層 出土遺物 (1)



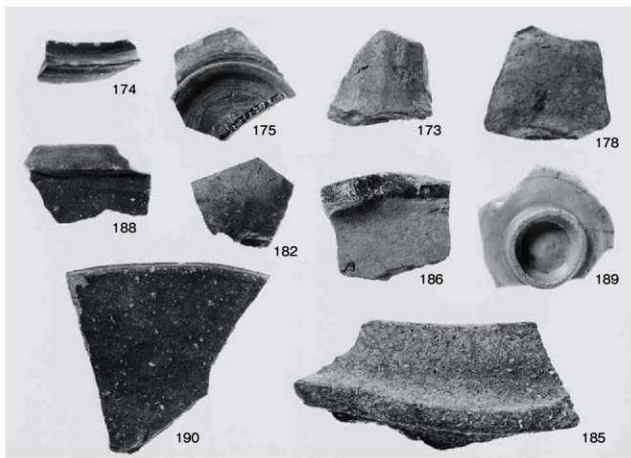
IV層 出土遺物 (2)



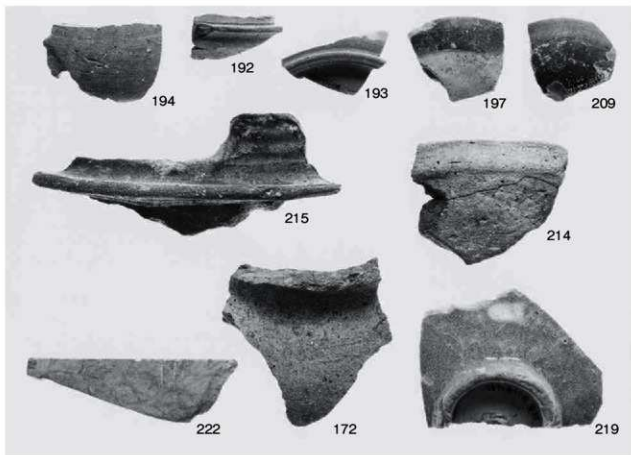
IV層 出土遺物 (3) (220のみIV層出土)



IV層 出土遺物 (4) (223のみⅠ層出土)



Ⅱ層 出土遺物 (1)



Ⅱ層 出土遺物 (2)

報告書抄録

ふりがな	わかやまいせき						
書名	若山遺跡						
副書名	(仮称) 松原ポンプ場築造工事に伴う発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	(財) 大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第 205 集						
編著者名	榎本哲						
編集機関	(財) 大阪府文化財センター						
所在地	〒 590 - 0105 大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号 Tel.072(299)8791						
発行年月日	2010 年 8 月 31 日						
ふりがな	ふりがな	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
わかやまいせき 若山遺跡	おおさかふまつばらし 大阪府松原市 うえだちよう 上田町 6 丁目	27217		北緯 34° 34° 20° 東経 135° 33° 42°	2008 年 9 月 ～ 2009 年 12 月	12.850	大阪府水 道部南部 水道事業 所 (仮称) 松原ポン プ場築造
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
若山遺跡	流路	古墳～	落込み	土師器・須恵器			
		奈良					
	水田	中世～	畦畔・溝・井戸	土師器・須恵器・瓦器・			
近世			陶磁器・瓦				
要 約	古墳時代初頭～飛鳥・奈良時代の旧河床面の遺構（落込み）、中世～近世の水田、畦畔、井戸、溝、土坑、水路などを検出した。谷地形と中位段丘という起伏ある土地の開墾を通して、現在の景観に近い平坦な耕地に改変されていく過程を復元することができた。						

(財)大阪府文化財センター発掘調査報告書 第205集

松原市

若山遺跡

—(仮称)松原ポンプ場築造工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行年月日/2010年8月31日発行

編集・発行/財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本/株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪府大阪市東成区深江南2丁目6番8号